

愛知県東海市

はたま ひがしほた  
畠間・東畠遺跡発掘調査報告



2009年

愛知県東海市教育委員会





東畠遺跡1・2地点調査区全景（北より）

卷頭図版第 2



烟問遺跡3 地点調査区全景（西より）



烟問遺跡4 地点調査区全景（西より）



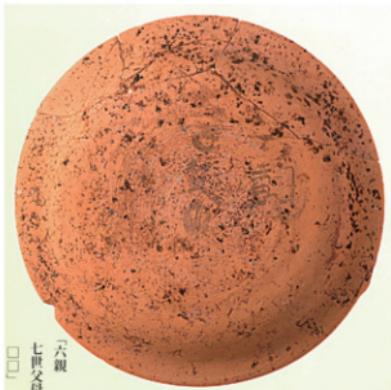
畠間遺跡 044SU 土師器皿出土状況(1)( 東より )



畠間遺跡 044SU 土師器皿出土状況(2)( 北より )



烟問遺跡 044SU 出土墨書土師器皿 (77)



烟問遺跡 044SU 出土墨書土師器皿 (80)



烟問遺跡 044SU 出土墨書土師器皿 (79)



烟問遺跡 013SM 出土墨書山茶碗 (83)

# 序

愛知県東海市は知多半島の付け根に位置し、伊勢湾に面する都市です。

現在では沿岸部の埋め立てにより多くの企業が立地し、海岸線を臨むことができなくなりましたが、今回報告する畠間遺跡および東畠遺跡で我々の先人が暮らしを営んでいた頃は、遺跡のすぐそばまで海水が入り込み、古代における「あゆち湯」とほぼ同じ様子であったようです。

これまで東海市における臨海部に営まれた集落については、その様相がよく分かっていませんでした。市では名古屋鉄道常滑線大田川駅周辺を市の中心街と位置づけ、平成4年度より区画整理事業を実施しています。これにともなって平成11年度より行われてきた発掘調査において、こうした臨海部の集落の様子が明らかになってきました。

今回は平成20年度に実施した発掘調査について、その成果を報告します。今回の調査では、これまでの調査で不明瞭であった中世における畠間遺跡の様子を知る手がかりを得ることができました。今後、本報告書が地域の歴史研究に活用され、埋蔵文化財に対する理解を深める一助となれば幸いです。

文末になりましたが、調査にあたり地元の皆様ならびに関係者、関係諸機関より多大なる御理解、御協力を賜りましたことを厚く御礼申し上げます。

平成21年8月

愛知県東海市教育委員会

教育長 加藤朝夫

## 例　　言

1. 本書は、愛知県東海市大田町畠間、東畠地内に所在する畠間（はたま）遺跡および東畠（ひがしつた）遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、東海大田川駅周辺土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査として、東海市教育委員会が同事業施行者である東海市より依頼を受け、国際航業株式会社に畠間・東畠遺跡発掘調査業務委託として委託し、実施した。
3. 本事業は、現地の発掘調査を平成20年11月10日から平成21年3月11日まで実施し、平成21年4月1日から平成21年8月7日まで整理作業ならびに本書の作成作業を実施し、本書の刊行をもって終了した。発掘調査面積は820m<sup>2</sup>である。
4. 現地調査は、東海市教育委員会（社会教育課主事 宮澤浩司）の監督のもと、国際航業株式会社研究員桐山秀穂、坂野俊哉、西野順二、測量技師内田恭司、上田誠人、渡辺智、管理技師足立勤が担当した。調査・整理の体制は第1章第4節に記した通りである。
5. 調査の実施にあたって、東海市教育委員会、東海市中心街整備事務所、東海市シルバーパーソンセンター、愛知県教育委員会、（財）愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター、知多古文化研究会など、関係各位のご協力を賜った。
6. 自然化学分析のうち、遺構013SMを形成する土層についての地質学的検討を鬼頭剛氏（〔財〕愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター）に、山茶碗の内面に付着した赤色顔料の分析を堀木真美子氏（〔財〕愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター）に、遺跡出土の昆虫化石の分析を奥野絵美氏（名古屋大学大学院博士課程）、森勇一氏（金城学院大学）に、木製品の樹種鑑定を株式会社吉田生物研究所に依頼した。
7. 調査および報告書作成にあたっては、赤塚次郎、芦田淳一、池田陸介、石黒立人、伊藤利和、伊藤裕偉、稻垣正宏、宇佐見守、奥川弘成、奥野絵美、尾野善裕、梶原義実、蟹江吉弘、川添和暁、鬼頭剛、小林康幸、坂本範基、真田泰光、柴垣勇夫、清水正明、鈴木敏則、鈴木とよ江、鈴木正貴、辻本彩、水井宏幸、中野晴久、中村信幸、新美倫子、贊元洋、西尾博久、野々村光雄、浜中邦弘、浜中有紀、早野浩二、樋上昇、福岡猛志、藤澤良祐、堀木真美子、水谷香織、水橋公恵、森勇一、矢部隆、山本信夫、山下勝年、和田英雄（五十音順）の各氏にご指導・ご教示を賜った。記して感謝申し上げる。
8. 遺構実測について上田と渡辺が行った。
9. 遺物実測について桐山、坂野、西野、渡辺のほか、町田義哉（国際航業株式会社）が行った。また、石器については沖野実（国際航業株式会社）が実測した。このほか、ナカシャクリエイティブ株式会社の協力を得た。
10. 写真撮影について遺構・土層は桐山と坂野が、遺物は桐山と西野が撮影した。
11. 出土した遺物、作成した図面・写真など記録・資料類はすべて東海市教育委員会で保管している。
12. 本書の執筆分担は以下のとおりである。

第1章第1節 宮澤浩司（東海市教育委員会）

第1章第4節・第5節、第2章第3節、第3章第3節、第4章、第5章 桐山秀穂（国際航業

株式会社)

第1章第2節・第3節、第2章第1節・第2節、第3章第1節・第2節 坂野俊哉（国際航業株式会社）

第4章第1節 鬼頭剛（〔財〕愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター）

第4章第2節 堀木真美子（〔財〕愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター）

第4章第3節 西野順二（国際航業株式会社）

第4章第4節 奥野絵美（名古屋大学大学院博士課程）・森勇一（金城学院大学）

12. 表紙のカットは、軒丸瓦は東畠遺跡2地点出土資料、軒平瓦は観福寺所蔵資料の瓦当の拓本を使用した。

13. 第2図では国土地理院発行の2万5千分の1地形図（鳴海）を、図版第19では国土地理院撮影の空中写真（1946年撮影）を使用した。

## 凡　　例

1. 調査記録の方位及び座標は世界測地系の平面直角座標第VII系に準拠した。ただし、単位(m)を省略している。
2. 標高はすべてT.P.（東京湾平均海面高度）による。
3. 土層の土色観察および遺物の色調の観察には小山正忠・竹原秀雄編著・農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』（2007年度版）を用いた。
4. 遺構の略記号は以下の通りである。  
SD：溝 SE：井戸 SK：土坑 SM：貝塚 SP：柱穴・ピット SU：集積遺構 SX：不明遺構  
SZ：墳丘墓 NR：自然流路
5. 本書で使用する遺構番号は、遺構の種別に関係なく一連の通し番号で与えた。そしてこれらの番号の末尾に前述の遺構の略記号を付与し、遺構の種類を記すこととした。
6. 遺構図の縮尺は、各々図のタイトルに表示している。貝塚・溝については大きさにより1/50、1/100、1/200を使い分け、不同である。井戸・土坑については1/50に、遺物出土状況は1/40に統一した。
7. 遺構図中の遺構寸法の法量単位はmである。
8. 本書で使用する遺物番号は土器・土製品・石製品の種類を問わず、通し番号を付与した。これにより本文・観察表・実測図・写真において、一つの遺物を指示する際には同一の番号を使用している。
9. 遺物実測図の縮尺は1/3を基本としているが、遺物の大きさによって変更しているものがある。
10. 引用・参考文献は筆者及び発行年（西暦）を文中（）で示し、巻末に一括して掲載した。

# 目 次

巻頭図版

例言・凡例

## 第1章 調査の経緯と遺跡の環境

第1節 調査にいたる経緯	1
第2節 遺跡の位置と環境	4
第3節 番間・東畠遺跡における既往の調査	7
第4節 発掘調査の方法	8
第5節 調査経過	9

## 第2章 東畠遺跡の調査

第1節 概要と基本層序	11
第2節 遺構	16
第3節 出土遺物	23

## 第3章 番間遺跡の調査

第1節 概要と基本層序	29
第2節 遺構	34
第3節 出土遺物	49

## 第4章 自然科学分析

第1節 番間遺跡で検出された 013SM 硬化面の地質学的検討（鬼頭剛）	59
第2節 番間遺跡出土山茶碗付着の赤色顔料分析（堀木真美子）	62
第3節 番間・東畠遺跡における動物遺存体（西野順二）	63
第4節 愛知県番間・東畠遺跡から検出された昆虫化石について（奥野絵美・森勇一）	73

第5章 まとめ	78
---------	----

引用参考文献

## 挿図目次

第1図	烟間・東畠遺跡の位置 (1/1,000,000)	1
第2図	調査地位置図 (1/25,000)	2
第3図	調査区の位置 (1/2,500)	3
第4図	周辺の遺跡 (1/15,000)	5
第5図	既往の調査地	7
第6図	グリッド配置図	8
第7図	東畠遺跡1・2地点土層断面図の位置	12
第8図	東畠遺跡2地点南壁土層断面図 (1/50)	12
第9図	東畠遺跡2地点西壁土層断面図 (1/50)	13
第10図	東畠遺跡1地点西壁土層断面図 (1/50)	14
第11図	東畠遺跡1地点東壁土層断面図 (1/50)	14
第12図	東畠遺跡1・2地点調査区全体図 (1/250)	15
第13図	東畠遺跡007SZ 平面図・断面図 (平面図1/100, 断面図1/50)	16
第14図	東畠遺跡008SD 遺物(4)出土状況図 (1/40)	17
第15図	東畠遺跡015SD 遺物(1・2)出土状況図 (1/40)	17
第16図	東畠遺跡023SZ 平面図 (1/100)	18
第17図	東畠遺跡017SD 遺物(5)出土状況図 (1/40)	18
第18図	東畠遺跡024SZ 平面図・断面図 (平面図1/100, 断面図1/50)	19
第19図	東畠遺跡013SU 遺物出土状況図 (1/40)	20
第20図	東畠遺跡004SD 遺物出土状況図 (1/40)	20
第21図	烟間遺跡3・4地点土層断面図の位置	29
第22図	烟間遺跡4地点西壁土層断面図 (1/50)	29
第23図	烟間遺跡3地点西壁土層断面図 (1/50)	30
第24図	烟間遺跡3・4地点北壁土層断面図 (1/50)	31
第25図	烟間遺跡3・4地点II層上面調査区全体図 (1/250)	32
第26図	烟間遺跡3・4地点II層下面調査区全体図 (1/250)	33
第27図	烟間遺跡013SM 平面図 (1/200)	35
第28図	烟間遺跡037SD 平面図・断面図 (1/50)	36
第29図	烟間遺跡011SB 平面図・断面図 (1/50)	37
第30図	烟間遺跡038SE 平面図・断面図 (1/50)	38
第31図	烟間遺跡023SD・024SD・028SD・034SD・035SD・036SD・050SD・057SD・029SK・032SK ・046SK・058SK・067SK・043SU・044SU・045SU・042SX 平面図 (1/200)	39
第32図	烟間遺跡044SU 遺物出土位置図 (1/50)	39
第33図	烟間遺跡043SU・045SU 遺物出土位置図 (1/50)	39
第34図	烟間遺跡044SU 土師器皿集積遺構の構造 (模式図)	41
第35図	烟間遺跡041SD・047SK・051SK 平面図・断面図 (1/50)	43
第36図	烟間遺跡021SM 平面図・断面図 (1/50)	44
第37図	烟間遺跡026SM 平面図・断面図 (1/50)	45
第38図	烟間遺跡048SK 平面図・断面図 (1/50)	47
第39図	烟間遺跡049SK 平面図・断面図 (1/50)	47
第40図	烟間遺跡013SM の土壤サンプルの取得位置 (1/500)	59

第 41 図	畠間遺跡 013SM 土壤サンプルの X 線透過写真	60
第 42 図	畠間遺跡出土の赤色顔料分析結果	62
第 43 図	畠間遺跡における貝層サンプル取得位置 (1/500)	63
第 44 図	013SM における貝類の組成	64
第 45 図	021SM における貝類の組成	65
第 46 図	026SM における層別貝類の組成	65
第 47 図	026SM における貝類の組成 (1)	65
第 48 図	026SM における貝類の組成 (2)	66
第 49 図	022NR 出土イヌ頭蓋骨	66
第 50 図	東畠遺跡・畠間遺跡における昆虫サンプリング位置 (1/500)	73

## 付表目次

第 1 表	東畠遺跡 1・2 地点における遺構出土土器・陶磁器の組成	23
第 2 表	畠間遺跡 3・4 地点における遺構出土土器・陶磁器の組成	49
第 3 表	畠間遺跡 3・4 地点における遺構出土中世土器・陶磁器の組成	49
第 4 表	検出動物分類一覧	70
第 5 表	出土動物遺存体一覧表 (脊椎動物) 個別採取	71
第 6 表	出土動物遺存体一覧表 (無脊椎動物) 個別採取	71
第 7 表	出土動物遺存体 貝層サンプル	72
第 8 表	畠間遺跡から産出した昆虫化石	74
第 9 表	東畠遺跡出土土器・陶磁器観察表	85
第 10 表	東畠遺跡出土軒丸瓦観察表	88
第 11 表	東畠遺跡出土瓦観察表	88
第 12 表	東畠遺跡土製品観察表	88
第 13 表	東畠遺跡石器観察表	88
第 14 表	畠間遺跡出土土器・陶磁器観察表	89
第 15 表	畠間遺跡出土軒丸瓦観察表	96
第 16 表	畠間遺跡出土平瓦観察表	96
第 17 表	畠間遺跡出土瓦観察表	96
第 18 表	畠間遺跡出土土製品観察表	97
第 19 表	畠間遺跡出土石器・石製品観察表	97
第 20 表	畠間遺跡出土木製品観察表	97

## 図版目次

卷頭図版第 1	東畠遺跡 1・2 地点調査区全景 (北より)
卷頭図版第 2	上 畠間遺跡 3 地点調査区全景 (西より) 下 畠間遺跡 4 地点調査区全景 (西より)
卷頭図版第 3	上 畠間遺跡 044SU 土師器皿出土状況 (1) (東より) 下 畠間遺跡 044SU 土師器皿出土状況 (2) (北より)
卷頭図版第 4	畠間遺跡 044SU 出土墨書土師器皿 (77・79・80)・013SM 出土墨書山茶碗 (83)

図版第 1	東畠遺跡 1・2 地点出土土器実測図 (1)
図版第 2	東畠遺跡 1・2 地点出土土器実測図 (2)
図版第 3	東畠遺跡 1・2 地点出土土器実測図 (3)

- 図版第 4 東畠遺跡 1・2 地点出土土器実測図 (4)
- 図版第 5 東畠遺跡 1・2 地点出土土器実測図 (5)・瓦実測図
- 図版第 6 東畠遺跡 1・2 地点出土石器実測図・土製品実測図
- 図版第 7 畑間遺跡 3・4 地点出土土器実測図 (1)
- 図版第 8 畑間遺跡 3・4 地点出土土器実測図 (2)
- 図版第 9 畑間遺跡 3・4 地点出土土器実測図 (3)
- 図版第 10 畑間遺跡 3・4 地点出土土器実測図 (4)
- 図版第 11 畑間遺跡 3・4 地点出土土器実測図 (5)
- 図版第 12 畑間遺跡 3・4 地点出土土器実測図 (6)
- 図版第 13 畑間遺跡 3・4 地点出土土器実測図 (7)
- 図版第 14 畑間遺跡 3・4 地点出土土器実測図 (8)
- 図版第 15 畑間遺跡 3・4 地点出土土器実測図 (9)
- 図版第 16 畑間遺跡 3・4 地点出土瓦実測図・土製品・錢貨実測図
- 図版第 17 畑間遺跡 3・4 地点出土石器・石製品実測図 (1)
- 図版第 18 畑間遺跡 3・4 地点出土石器・石製品実測図 (2)・木製品実測図
- 図版第 19 畑間・東畠遺跡周辺空中写真 (上空から)
- 図版第 20 上 東畠遺跡 1 地点調査区全景 (北より)  
下 東畠遺跡 2 地点調査区全景 (北より)
- 図版第 21 上 東畠遺跡 007SZ 完掘状況 (1) (南東より)  
下 東畠遺跡 007SZ 完掘状況 (2) (北東より)
- 図版第 22 上 東畠遺跡 023SZ 完掘状況 (北西より)  
下 東畠遺跡 023SZ 断面 (南西より)
- 図版第 23 上 東畠遺跡 017SD・021SP 完掘状況 (西より) 東畠遺跡 017SD 土器出土状況 (1) (西より) 同 (2) (北より) 東畠遺跡 008SD 断面 (西より)  
下 東畠遺跡 015SD 断面 (東より) 東畠遺跡 008SD 土器 (4) 出土状況 (北より)  
東畠遺跡 015SD 土器 (3) 出土状況 (東より) 東畠遺跡 015SD 土器 (1・2) 出土状況 (北より)
- 図版第 24 上 東畠遺跡 1 地点西壁土層断面 (1) (北東より) 同 (2) (北東より) 東畠遺跡 2 地点西壁土層断面 (北東より) 東畠遺跡 002SM 検出状況 (北より)  
下 東畠遺跡 001SU 検出状況 (1) (北東より) 同 (2) (東より)
- 図版第 25 上 東畠遺跡 004SD 土器出土状況 (1) (南東より) 同 (2) (北西より)  
下 東畠遺跡 004SD 断面 (北より) 東畠遺跡 004SD 土器出土状況 (3) (北西より) 東畠遺跡 012SU 検出状況 (北西より) 東畠遺跡 006SD 断面 (東より)
- 図版第 26 上 畑間遺跡 3 地点西半完掘 (1) (北東より)  
下 畑間遺跡 3 地点西半完掘 (2) (南より)
- 図版第 27 上 畑間遺跡 4 地点調査区全景 (東より)  
下 畑間遺跡 4 地点西半完掘 (西より)
- 図版第 28 上 畑間遺跡 3 地点西壁断面 (1) (東より)  
下 畑間遺跡 3 地点西壁断面 (2) (東より) 同 (3) (東より) 同 (4) (東より) 同 (5) (東より)
- 図版第 29 上 畑間遺跡 3 地点 013SM 検出状況 (西より)  
下 畑間遺跡 3 地点 013SM 完掘状況 (南より)
- 図版第 30 上 畑間遺跡 4 地点 013SM 検出状況 (西より)  
下 畑間遺跡 4 地点 013SM 完掘状況 (東より)

- 図版第31 上 番間遺跡3 地点013SM断面（南東より） 番間遺跡4 地点013SM断面および上面（東より） 番間遺跡4 地点013SM上面（拡大） 番間遺跡4 地点013SM断面（拡大）  
下 番間遺跡037SD 検出状況（南より） 番間遺跡037SD断面（南西より）  
番間遺跡037SD 完掘状況（南東より） 番間遺跡019SU-10 検出状況（北より）
- 図版第32 上 番間遺跡011SB 完掘状況（北より）  
下 番間遺跡011SB断面東半（北より） 番間遺跡011SB断面西半（北より）
- 図版第33 上 番間遺跡038SE 完掘状況（北西より）  
下 番間遺跡038SE断面（北より）
- 図版第34 上 番間遺跡026SM 検出状況(1)（南より）  
下 番間遺跡026SM 検出状況(2)（西より）
- 図版第35 上 番間遺跡026SM 完掘状況（南東より）  
下 番間遺跡026SM断面（南東より）
- 図版第36 上 番間遺跡021SM 検出状況（北より） 番間遺跡021SM断面（北より） 番間遺跡025SM 検出状況（東より） 番間遺跡027SM 検出状況（西より）  
下 番間遺跡044SU 土師器皿出土状況(3)（東より） 同(4)（東より） 同(5)（東より） 同(6)（東より）
- 図版第37 上 番間遺跡045SU 検出状況（東より） 番間遺跡041SD断面（南より） 番間遺跡058SK 木製品出土状況（南より） 番間遺跡047SK断面（南西より）  
下 番間遺跡048SK 完掘状況（南より） 番間遺跡048SK断面（南より） 番間遺跡049SK 完掘状況（南より） 番間遺跡049SK断面（南より）
- 図版第38 上 東畑遺跡1 地点包含層掘削 東畑遺跡2 地点013SU 遺物検出作業 番間遺跡3 地点包含層掘削・測量作業 番間遺跡3 地点013SM 貝層サンプリング作業  
下 番間遺跡3 地点026SM 掘削作業 番間遺跡4 地点044SU 遺物検出作業 番間遺跡4 地点遺構掘削作業(1) 番間遺跡4 地点遺構掘削作業(2)
- 図版第39 東畑遺跡015SD 出土土師器 東畑遺跡017SD 出土土師器 東畑遺跡004SD 出土弥生土器(1) 東畑遺跡004SD 出土弥生土器(2) 東畑遺跡出土004SD 弥生土器(3) 東畑遺跡013SD 出土弥生土器(1)
- 図版第40 東畑遺跡004SD 出土弥生土器(4) 東畑遺跡004SD 出土弥生土器(5) 東畑遺跡004SD 出土弥生土器(6) 東畑遺跡004SD 出土弥生土器(7) 東畑遺跡013SD 出土弥生土器(2) 東畑遺跡013SD 出土弥生土器(3)
- 図版第41 上 東畑遺跡出土山茶碗耳皿・小碗・小皿  
下 東畑遺跡出土土師器鍋・山茶碗・常滑 東畑遺跡出土山茶碗・常滑 東畑遺跡出土弥生土器・瓦器椀・瀬戸美濃平碗 東畑遺跡出土石器
- 図版第42 東畑遺跡出土瓦(1) 東畑遺跡出土瓦(2) 東畑遺跡出土瓦(3) 東畑遺跡出土土製品
- 図版第43 上 番間遺跡038SE 出土山茶碗  
下 番間遺跡024SD 出土山茶碗
- 図版第44 上 番間遺跡034SD(044SU) 出土土師器皿  
下 番間遺跡034SD 出土山茶碗・常滑 番間遺跡034SD(045SU) 出土瀬戸美濃・常滑  
番間遺跡036SD 出土瓦質土器鍋・山茶碗・常滑 番間遺跡038SE 出土常滑捕鉢
- 図版第45 上 番間遺跡024SD・057SD 出土土師器皿・鍋 番間遺跡024SD・057SD・022NR 出土常滑 番間遺跡022NR 出土山茶碗 番間遺跡052SK・057SD 出土山茶碗  
下 番間遺跡013SM 出土山茶碗・常滑 番間遺跡026SM 出土土師器鍋 番間遺跡026SM・027SM 出土土師器皿・鍋・山茶碗 番間遺跡029SK 出土山茶碗

- 図版第 46 上 煙間遺跡出土須恵器・綠釉陶器・灰釉陶器 煙間遺跡出土白磁・青磁 煙間遺跡  
出土瀬戸美濃 煙間遺跡出土土師器・瓦質土器・山茶碗
- 下 煙間遺跡出土土製品 煙間遺跡出土焼土塊 煙間遺跡出土石器・石製品(1)  
煙間遺跡出土石器・石製品(2)
- 図版第 47 煙間遺跡出土瓦(1) 煙間遺跡出土瓦(2) 煙間遺跡出土瓦(3) 煙間遺跡出土瓦(4)  
煙間遺跡出土木製品(1) 煙間遺跡出土木製品(2)
- 図版第 48 煙間遺跡出土動物遺体(1)(貝類)
- 図版第 49 煙間遺跡出土動物遺体(2)(脊椎動物骨)
- 図版第 50 煙間遺跡出土動物遺体(3)(脊椎動物骨)
- 図版第 51 煙間遺跡出土昆虫化石写真(1)
- 図版第 52 煙間遺跡出土昆虫化石写真(2)

# 第1章 調査の経緯と遺跡の環境

## 第1節 調査に至る経緯（第1～3図）

畠間遺跡および東畠遺跡（以下畠間・東畠遺跡）は愛知県東海市の大田町に位置する（第1・2図）。平成8年から10年にかけて愛知県教育委員会によって実施された知多半島遺跡詳細分布調査報告書（長島・柴田1999）によると畠間遺跡は古墳時代から中世にかけての散布地、東畠遺跡は弥生から中世にかけての散布地とされている。

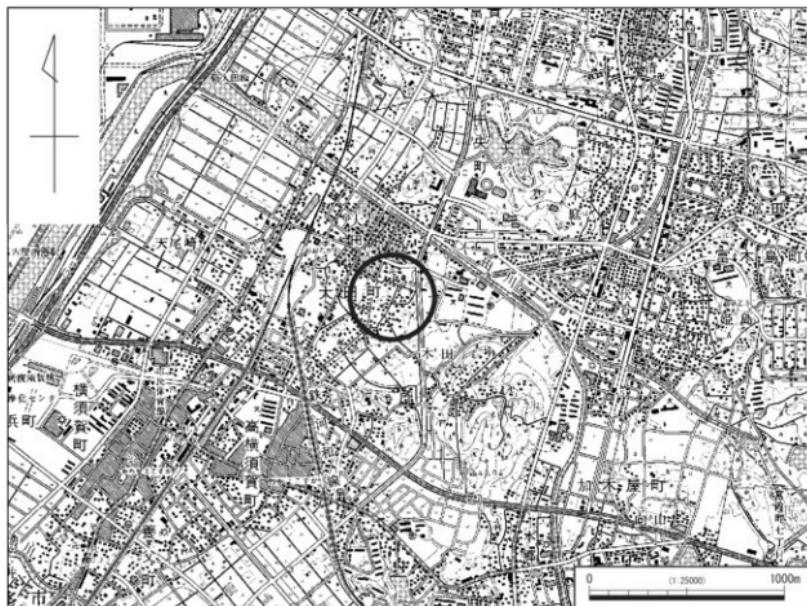
本市では名古屋鉄道大田川駅周辺を中心市街地として位置づけ、平成4年より土地区画整理事業を実施している。これに伴い、平成8年度には事業区域内に所在する埋蔵文化財包蔵地について、その範囲ならびに性格を把握するため試掘調査を実施した。この調査により、事業区域内には畠間・東畠遺跡を始め、後田遺跡、郷中遺跡、龍雲院遺跡が存在することが確認された。この調査成果に基づき土地区画整理事業担当部局である中心街整備事務所と協議・調整を図り、平成11年度から東海市教育委員会によって主に道路整備用地の記録保存を目的とした緊急発掘調査を継続して実施している。平成19年度末時点での調査面積は7,490m<sup>2</sup>である。

平成11年度から平成19年度までの調査については東海市教育委員会直営による発掘調査を実施している。この間、平成13年度調査の一部については発掘調査報告書を刊行している（立松・永井2004）。これを除く分については発掘調査概報の形で調査の概要を報告しており、現在本報告書作成に向けて整理作業を実施中である（永井・宮澤2007、宮澤2009）。調査成果の詳細はこれら報告書等を参照されたいが、平成20年度調査地点と隣接する地点について、その概略を示しておきたい（第3図）。

平成19年度調査では平成20年度調査1・2地点に接する北側区域を調査した。確認した主な遺



第1図 畠間・東畠遺跡の位置 (1/1,000,000)



第2図 調査地位置図 (1:25,000)

構としては方形周溝墓 2 基（弥生時代中期）、井戸 1 基（室町以降）がある。この内 1 基の方形周溝墓は調査区境界で確認したことから、平成 20 年度調査 1 地点に広がることが予想された。平成 20 年度調査 3・4 地点については平成 8 年度に試掘調査、および平成 19 年度に試掘調査を実施している。いずれの調査においても遺物包含層を確認している。出土遺物は山茶碗、茶臼等が主体であり、主に中世の遺構の存在が予想されていた。

平成 20 年度調査については、平成 20 年 4 月 22 日付け中第 1 号にて東海大田川駅周辺土地区画整理事業施行者である東海市より愛知県教育委員会に対して文化財保護法 94 条に基づき埋蔵文化財の発掘調査の通知がなされ、5 月 14 日付けで愛知県教育委員会より発掘調査指示の通知があつた。これを受けて東海市教育委員会に対して 5 月 30 日付け中第 2 号にて発掘調査依頼があつた。このため調査対象区域 840 m<sup>2</sup>について、現地調査、整理作業、報告書作成業務について 7 月 2 日付けで国際航業株式会社名古屋支店と業務委託契約を締結した。用地交渉が当初見込みより遅れたため、調査着手が 4 か月ほど遅れたが、11 月 10 日より現地調査に着手し、平成 21 年 3 月 11 日に現地調査を終了、その後整理作業、報告書作成作業を進め、8 月 7 日付けで成果品の納入を受けた。

（宮澤）



第3図 調査区の位置 (1/2, 500) (遺跡の範囲は東海市遺跡地図による)

## 第2節 遺跡の位置と環境（第4図、図版第19）

畠間遺跡と東畠遺跡は、東海市南部の海岸平野に展開する大規模な砂堆上に形成された遺跡である。

知多半島の伊勢湾岸にはいくつかの海岸平野が発達しているが、東海市の大田町周辺から知多市北部にかけての平地は、もっとも大規模なものである。ここではこれを大田の谷と呼ぶことにする。この大田の谷には、旧海岸線に沿って複数列の砂堆が形成されているが、現在でも西側から3列の砂堆が確認できる（第4図、図版第19）。

もっとも西側の旧海岸線に沿って形成された第3砂堆上には、古代土器製塩遺跡として著名な松崎遺跡や上浜田・下浜田遺跡が存在する。この第3砂堆は、何か所かで丘陵地に水源を發する中小規模の河川で分断されるものの、南に行くにつれて徐々に幅を広め、知多市側では砂堆上に中心的な集落が展開している。

第2砂堆は幅の狭く細長い未発達な砂堆で、名鉄大田川駅から北の大宮神社あたりまで確認でき、後田遺跡（古墳時代）が存在する。

第1砂堆は、真言宗の古利弥勒寺の存在する丘陵と、天台宗の古利である観福寺の存在する木田の丘陵に夾まれた平地のはば中央に展開する大規模な砂堆である。弥勒寺の山腹には戦国期の知多弥勒寺遺跡が、山裾には王塚古墳（古墳時代後期＝消滅）が、その南には今回報告する畠間遺跡や東畠遺跡が展開している。

これらの砂堆の平均的な最高標高は5m前後であり、伊勢湾周辺に於ける縄文海進最高期の海水準が4m前後であったことを考えると、海進期から海退期にかけて、谷奥から順次形成されたものであろう。

現在の大田川は、これら3列の砂堆を東西に直線的に貫通して伊勢湾に注いでいるが、これは江戸時代の改修工事によるものである。すなわち尾張藩二代藩主徳川光友が現在の高横須賀町の地先に潮湯治のための別荘である横須賀御殿を造営する際に改修したものと伝えられている。改修以前の流路は耕地整理以前の航空写真や地形図などから容易に復元することができたが、第1砂堆南端を大きく迂回し、横須賀御殿用地のすぐ脇に河口を開いていた。

この大田の谷は奥で南北に走る断層谷へと分岐するが、大田川源流は南枝に伸びる加木屋の谷方面にある。北枝には荒尾方面から渡内川が流れしており、富木島方面からの短い流れと合流する。これら3河川の合流地は第1砂堆のすぐ西側にあって、常に流路を変化させて長年にわたり後背湿地を形成していたようである。

大田の谷周辺にはさまざまな時代の遺跡が存在するが、現在知られている最古の遺跡は木田の高ノ御前遺跡である。谷奥の丘陵縁辺にあるこの遺跡は縄文時代前期の所産で、小規模な貝塚を伴う。縄文時代中期後期の遺跡は発見されていないが、晩期の土器片は少量が数か所で発見されている。

弥生時代前期の中心的な遺跡は隣接する知多市八幡の砂堆上に多くみられるが（荒古遺跡・細見遺跡など）、畠間遺跡でもこれまでに摂王式条痕文土器とそれに伴う無紋粗製小形平底深鉢形土器が出土し、この時期の土器製塩の可能性が指摘されている（立松・永井2004）。また今回の調査でも遠賀川式土器が発見されたことは新しい知見である。弥生時代中期になると東畠遺跡では方形周溝墓の構築が始まり、後期を通じて營まれていく。



第4図 周辺の遺跡 (1/15,000)

古墳時代から古代前半にかけての遺跡は第1砂堆上にもみられるが、同時に第3砂堆の方にも拡大傾向が顕著に見られるようになる。このような様相は製埴土器の型式変化と同期し、古代を通じて伊勢湾奥部における塙生産の中心地として地位を確立していった。古墳としては、北側の丘陵裾に存在していた王塚古墳（消滅）や、弥勒寺遺跡地内でも古墳石室の痕跡が確認されたが、いずれも詳細は不明である。

古代末から中世の遺跡としての様相は詳らかでなかったが、遺物は砂堆上のいたるところで発見されていた（立松 1997、立松ほか 1998・2004 など）。知多古窯群と呼ばれる古窯遺跡も、いくつかの群をなして谷奥の丘陵地から発見されている。なかでも、今回の調査で加木屋周辺の古窯で生産されたと推測される瓦が大量に発見されたことは、中世の荘園の存在を考える上でも重要な情報である。特に、今回発見された杏葉唐草文の瓦当は極めて独創性に富んだ意匠を持つもので、以前

には観福寺境内、熱田神宮寺、社山古窯、論田古窯からの出土が知られていた（半田市 1993）。

加木屋の社山古窯では京都の法金剛院や鳥羽離宮東殿安楽寿院に供給する瓦が生産されていたことが知られているが、畠間・東畠両遺跡は古窯から最も近い距離に存在する消費遺跡でもある。同時に、知多や瀬戸などで生産された日常雑器も大量に発見されており、各生産地からの製品流通を知る上でも興味深い情報を提供してくれた。

なお、鎌倉時代までの記録に見られる莊園や国衙領の名前としては、荒尾郷、御幣田郷、木田郷、大郷（おおさと＝大里）郷、額石保などがみられる。荒尾郷は現在の荒尾町付近に、木田郷は観福寺の存在する丘陵地周辺に、大郷郷は近世の大里村、即ち第1砂堆周辺に比定されている。

戦国時代から近世にかけての遺跡は、各砂堆上で断片的に存在が知られており、第1砂堆の北、標高 26m 丘陵上に存在する弥勒寺境内の発掘調査では、戦国期に属する生活に伴う鍋などの遺物が大量に発見されており、注目される（立松ほか 1998）。弥勒寺は天平勝宝元年（749）行基によって開基されたという伝説を持つ真言宗の古刹であるが、創建時の様相はよくわかつていない。しかし、秘仏とされる弥勒菩薩座像は平成 20 年に再建された山門の旧仁王像とともに平安時代末期のものとされることなどから、少なくとも平安時代末までには弥勒寺が存在していた可能性が指摘できる。

今回畠間遺跡で発見された中規模の矩形区画溝の掘削は、平安時代末期に開始されたものと思われるが、13 世紀を通じて埋積されていった後にも、同一区画内周辺に仏教的な施設（小規模な仏堂など）が引き続き存在していた可能性が高い。畠間遺跡で発見された礎石群や焼土塊（土壁）の存在は一般的な集落の家屋で用いられていたものとは考えられず、続く戦国期においても同地内でかわらけを集積してまじない供養を行なっていたことから、宗教的色彩の強い空間であり続けた可能性が高い。

なお、畠間遺跡に隣接した常蓮寺は明応 2 年（1493）の開基と伝えられており、かわらけの集積が発見された地点からは指呼の距離にある。鎌倉期に今回の調査区内で検出された区画溝周辺で営まれていた寺院的空間が、戦国時代にすぐ西側に移転した可能性も考えられる。更にそのすぐ西側にある龍雲院は大永 6 年（1526）の開基とされるが、これらの寺院は戦国時代末期には悉く兵火に焼かれたと伝えられる。『横須賀町誌』（石川 1928）には龍雲院について「天文年中火災に罹って全部鳥有に帰し云々」があるが、弥勒寺遺跡で発見された硯には「天文十五年」（1546）という紀年線刻が見られた。弥勒寺の寺伝によれば、往時の七堂伽藍は信長の兵火に罹り頽廃したが、天文 11 年（1542）中興開山第一世顕昌上人により復興とされる。この記録を裏付けるように、発掘調査も焼土塊や廐棄土坑など確認されており、畠間遺跡も一連の歴史的様相から考えていく必要がある。

このように、畠間遺跡や東畠遺跡の存在する大規模砂堆は、そのほぼ全面が現在に至るまでの歴代遺跡であった可能性が高いが、時代による遺物・遺構の濃淡も明らかになりつつある。砂堆の上面は各時代で常に整地・削平され続け、現在にまで至っていたのである。

また、少なくとも近世以前は重要な交通や運搬の手段であった海運を考える場合も、旧河道を念頭に伊勢湾に面した川湊と一体化した集落の様相を考えるべきであろう。特に、京都方面まで運ばれていた瓦の集積や積み出しに関連した施設が、砂堆上の畠間や東畠地内に存在していた可能性は高いのである。

更に、地理的地形的環境から、砂堆上は何度も丘陵地側から押し寄せる洪水の被害を受けた痕跡が認められたが、また同時に海側から台風や高潮の影響も受け続けてきたことだろう。事実、東畠

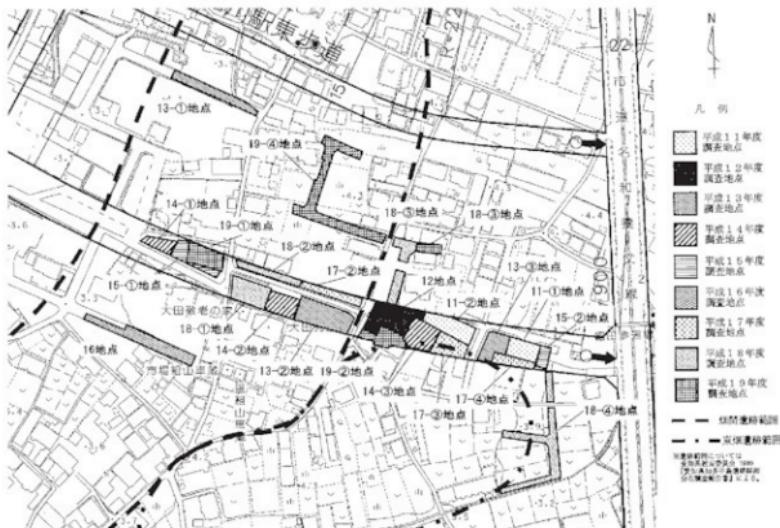
遺跡では遺跡の基盤を為す砂層には、背後の丘陵地粘土層間に存在する鬼板（地中の鉄分が板状に堆積したもの）の摩耗した破片が多く混入していたし、畠間遺跡では中世の遺物包含層や貝層を削り覆う洪水性の砂層が確認されている。

(坂野)

### 第3節 畠間・東畠遺跡における既往の調査（第5図）

畠間遺跡および東畠遺跡の存在は以前より知られていたが（文化庁 1975）、初めて調査されたのは、1996年の東海市教育委員会による中心街整備計画に先立つ事前分布調査においてである。畠間遺跡・東畠遺跡で計16か所のトレンチを試掘し、遺跡の分布範囲と時期を確認した。畠間遺跡では中世を中心とする時期が考えられ、東畠遺跡では弥生時代中期から古墳時代前期と古代・中世の時期が考えられた（立松 1997）。また、平成8年から平成11年に実施された愛知県教育委員会による知多半島詳細遺跡分布調査において、畠間遺跡は土師器、須恵器、製塙土器、山茶碗、鍋などが採集され、古墳時代から中世の散布地として、東畠遺跡は弥生土器、須恵器、灰釉陶器、山茶碗が採集され、弥生時代から中世の散布地として周知されるようになった（長島・柴田 1999）。

大田川駅周辺土地区画整理事業が実施に移されてから、それに関連して道路整備用地に関しては記録保存を図る目的で東海市教育委員会が平成11年より発掘調査を継続して行ってきている（第5図）。それは平成19年度までで発掘総面積7,490m<sup>2</sup>に及ぶ。その結果一部先述したが、弥生時代前期の製塙土器が出土し、弥生時代中期の堅穴住居群、弥生時代中期・終末期の方形周溝墓群、古代の堅穴住居、中世の井戸や土坑が発見され、弥生時代前期から近世にいたる複合遺跡であることが明らかになってきた（立松・永井 2004、永井・宮澤 2007、宮澤 2009）。



第5図 既往の調査地

## 第4節 発掘調査の方法（第6図）

今回の発掘調査地は、土地区画整理に伴う市道建設箇所の発掘調査であり、畠間遺跡と東畠遺跡とで大きく2地点に分かれている。したがってそれぞれにグリッドを設定した（第6図）。

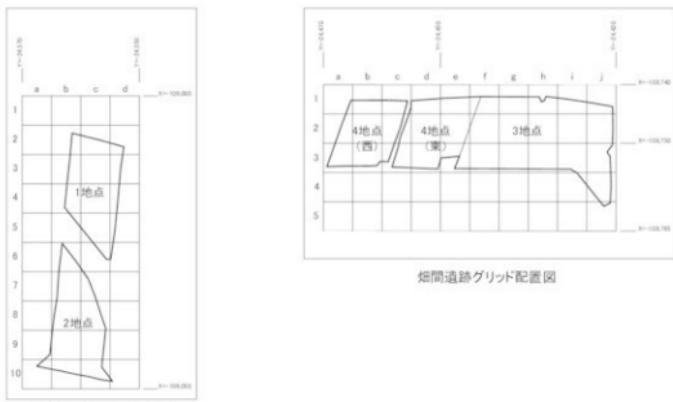
グリッドの設定については、世界測地系の平面直角座標第VII系の座標に基づく5mグリッドを設定した。すなわち東西・南北ともに座標値の1の位が5ないし0のラインを使い、調査区に5mの方眼で覆い、調査区を含む範囲の西北隅の交点をグリッドの原点とする。これよりX軸上の5mおきの点にアルファベット、Y軸上の5mおきの点にアラビア数字を順に割り振った。これらの交点は数字とアルファベットの組み合わせとして示すことができ、これを交点の名称とした。例えば原点では1aである。そしてこの交点の南東の方眼（グリッド）の名称もこれを使用することとした。逆に言えばグリッドの名称はその西北隅の杭の名称を使用した（第6図）。

東畠遺跡の地点は、9m道路の予定地であるが、調査対象地の中央を生活道路が通っており、それを避けて1地点、2地点と2つの地点に分かれている。1・2地点については幅9m南北の長さ40mの1連の調査地として発掘調査等を行うこととし、グリッドを設定した。グリッドは（X=109,000, Y=-24,570）の点を原点とし、東西方向へa～d列を、南北方向で1～10列を設定した。

畠間遺跡の地点では、調査区を半分にして反転して調査を行った。先行する東半部が3地点、後で調査を行う西半部が4地点である。また、4地点では使用中の水道管、ガス管を埋設したまま、調査を行うこととなつたため、4地点の中央を南北にアゼを残すこととなつた。そこで、4地点については、便宜的にこのアゼの東側を「4地点東区」、西側を「4地点西区」として、地区名としてグリッドと併用した。グリッドは（X=-108,740, Y=-24,470）の点を原点とし、東西方向へa～j列を、南北方向で1～5列を設定した。

ほか、発掘調査および整理については基本的に愛知県埋蔵文化財センター編集・発行『埋蔵文化財の調査・研究に関する基本マニュアル2002』に基づいている。

遺跡の略号については畠間遺跡を「HM」、東畠遺跡を「HH」とした。



第6図 グリッド配置図

遺構について、番号は遺構の種類に関わらず通し番号を付した。そしてその末尾に記号を付し、遺構の種類を表した。今回の調査で使用した遺構の種類を表す記号は以下のとおりである。

溝：SD 井戸：SE 土坑：SK 柱穴・ビット：SP 貝塚：SM 集積遺構：SU 不明遺構：SX  
墳丘墓：SZ 自然流路：NR

### 第5節 調査経過（図版第38）

畠間・東畑遺跡発掘調査業務委託は平成20年7月2日に契約を締結し、翌3日に着手したが、発掘調査地にあった既存の建物及び生産地の移転が進んでおらず、すぐに調査に入れない状態であることが判明した。そこで東海市教育委員会と国際航業株式会社の協議を行い、7月14日の協議にて工程の変更を行い、既存建物が取り壊される10月以降に調査に入り、工期は当初計画どおり9ヶ月で、納期を3月末から延長することで合意した。10月31日に再び打合せを行い、現場の状況や現場事務所の予定地を確認した後、11月10日より現地調査に入ることで合意した。その後、詰所・仮囲いの設置、調査区の位置出し、周辺住民に対する挨拶等、準備工を行い、予定通り、11月10日より現地の発掘調査を開始した。

調査は畠間遺跡の3地点から着手した。機械表土掘削を11月13日まで行い、12日からは作業員を入れて調査区の壁面清掃など整備を行った。近代の大きな搅乱が東半にあったが、その壁面の清掃中に包含層50cmほど堆積している下に幅5m以上の溝状の遺構が少なくとも3本切り合っていることを確認した。14日からは包含層掘削を開始し、12月1日から溝状遺構の掘削を開始する。12月2日には、溝状遺構の中から、かなり広がりがある貝層（026SM）を検出する。サンプリングしつつ、掘削する。溝状の遺構のうち、最も新しい遺構は流水性の堆積を示しており、自然流路（022NR）と判断した。これは調査区を完掘した後の土層の再検討で洪沢砂層として捉え直した。青磁・白磁・瓦が目立って出土した。12月3日には区画溝024SDの存在が判明し、4日にかけて掘削する。最下層は腐植物を多く含むシルト層であり、中世の陶磁器類のほか、木製品などが多く出土した。4日には完掘し、全景写真の撮影を行った。

12月8日から15日に、3地点の埋め戻し及び仮設駐車場の設営、4地点の機械表土掘削を行った。16日から作業員を入れて調査区の整備をした後、包含層の掘削を開始する。3地点と同様瓦の出土が目立つ。また、25日には墨書が施された土師器皿が出土した。12月26日に包含層掘削を終了。冬休みの後、1月5日より調査を再開し、遺構掘削を行う。奥野絵美氏による昆虫化石サンプリングを1月5日と8日に行った。6日には溝034SD内に土師器皿の集積（044SU）を発見した。この中には墨書のある土師器皿が数枚含まれていた。13日には完掘し、同日全景写真の撮影を行った。14日には測量と写真撮影の補足を行い、埋め戻しを開始した。埋め戻しは16日に終了し、同日仮囲い等の4地点からの撤収も完了した。

次に1・2地点の調査に移った。1月19日から23日に機械表土掘削を行い、1月22日から作業員による調査区の整備と包含層掘削を行った。1地点では弥生時代の周溝墓007SZを、2地点では弥生時代の大溝を2本（004SD・006SD）検出した。2月4日から遺構掘削を開始した。2地点の大溝からは弥生土器の集積が見つかり、かつ2本の大溝は同一の方形周溝墓024SZの周溝であることも判明した。一方、1地点では確認されていた周溝墓以外にもう1基、方形周溝墓023SZがあることが確認された。1・2地点は12日に完掘し、翌13日に全景写真の撮影を行った。そして16日から

19日に埋め戻しを行い、19日に仮囲い等の撤収も行い、現場作業を終了した。

整理作業は1月14日より開始した。現場事務所にて遺物洗浄を行い、3月3日に終了した。現場作業終了後、現場事務所では写真整理、図面整理、台帳類・書類の作成を行い、3月13日に撤収した。

その後は清須市の中部調査事務所に遺物と記録類を持ち帰って整理作業を進めた。ジェットマークにより遺物に注記した後、遺物台帳登録・実測・デジタルトレース・遺物写真撮影を行った。5月23日には東海市平洲記念館にて遺物検討会が行われた。愛知県内外あわせて18名もの研究者が集まり、活発で有意義な議論が交わされた。この後報告文執筆や図版作成など報告書の作成作業を8月7日までに行い、本書を刊行することとなった。

発掘調査及び整理の体制は以下のとおりである。

調査監督員 宮澤浩司（東海市教育委員会社会教育課）

主任調査員 桐山秀徳（国際航業株式会社中部調査事務所所長）

調査員 坂野俊哉（国際航業株式会社主任研究員）

調査補助員 西野順二（国際航業株式会社研究員）（発掘調査では平成20年12月1日から平成21年1月9日まで）

計測員 内田恭司（国際航業株式会社測量技師）

上田誠人（国際航業株式会社測量技師）

渡辺智（国際航業株式会社測量技師）

管理技師 足立勤（国際航業株式会社協力員）

発掘作業員・整理作業員

神野攻一・神野満喜夫・杉江功・中村勇夫・馬場翔子・原田剛男・平野幸治・三輪式尾・森岡鉢一・山盛愛子・百合草陳之・吉田悠歩（50音順・敬称略）

（桐山）

## 第2章 東畠遺跡の調査

### 第1節 概要と基本層序（第7～12図、巻頭図版第1、図版第20・24上）

東畠遺跡1・2地点は第1砂堆上の遺跡であるが、砂堆の南西端に近く、南側に大田川の旧河道を擁する。基本層序は以下のとおりである（第7～11図）。

I層：表土層。近現代の耕作土ないしは盛土である。

II層：近世・近代の耕作土層。

1地点の1の7.5YR4/4褐色砂、2地点西壁土層1の10YR3/3暗褐色砂、2の7.5YR3/3暗褐色砂、3の10YR3/2黒褐色砂の各層がこれにあたる。有機質を含み黒色化しているが、これは耕作に由来するものであろう。

III層：遺物包含層

7.5YR3/2黒褐色砂層がこれにあたる。

遺跡の基盤層は粗砂主体の砂層であるが、その表面近くには周辺の丘陵地由来の鬼板片（地中の酸化鉄分が板状に凝固したもの）が多く含まれており、畑間遺跡の3・4地点では見られない特徴である。

大規模な搅乱を含む表土層以下、遺物包含層はやはり全て砂層中に完結するが、基盤層を掘削して構築された弥生・古墳時代の遺構（多くは方形周溝墓の周溝）を充填する埋土だけはより黒色が強ひさびい。しかし、ここでは溝埋土中にシルト層や泥炭層の形成はみられないことから、より透水性の高い粗砂の性質に由来する特徴である可能性が高い。

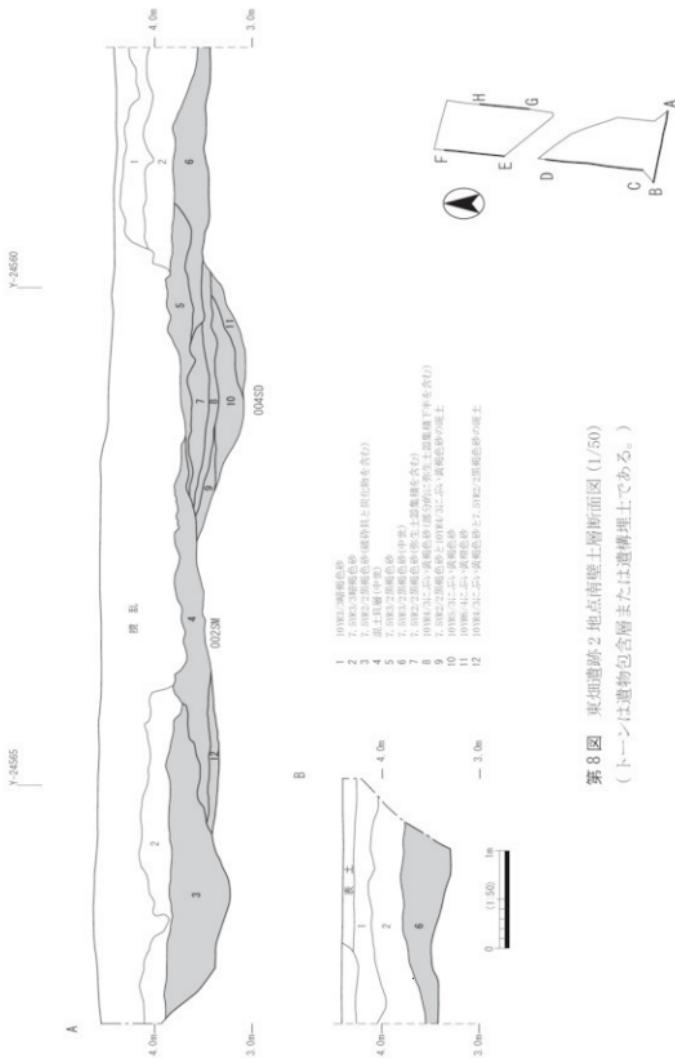
2地点南部で検出された004SDは024SZ方形周溝墓の周溝であるが（中期後半）、掘削後直ちに粗砂を主体とした砂で埋積されており、やはり洪水などの自然性の原因が想定される。その埋積層は再掘削されることなく、浅いままで大量の土器が供献（廃棄）されたのちに廃絶するが、弥生時代の加工面のほとんどは中世に搅乱されており、遺物の混合がみられる。

なお、中世の地業によって周溝墓の墳丘はほとんど削平されてしまったようだが、1地点の007SZや023SZの場合はごく僅かに墳丘基部の残存が観察できた。しかし、各セクションにおける遺物包含層の分離は難しく、弥生時代と中世の境界は色調を除き明瞭ではない。

東畠遺跡1・2地点では、ごく少量の古代の土師器・須恵器が出土していることを除けば、遺構の主体は弥生・古墳時代と、中世という2時期に大別される。今回発見された遺構は、弥生・古墳時代の方形周溝墓3基、中世の溝4条、土坑3基、地点貝塚1基、土器集積遺構2基、ピットである（第7図、巻頭図版第1、図版第20）。

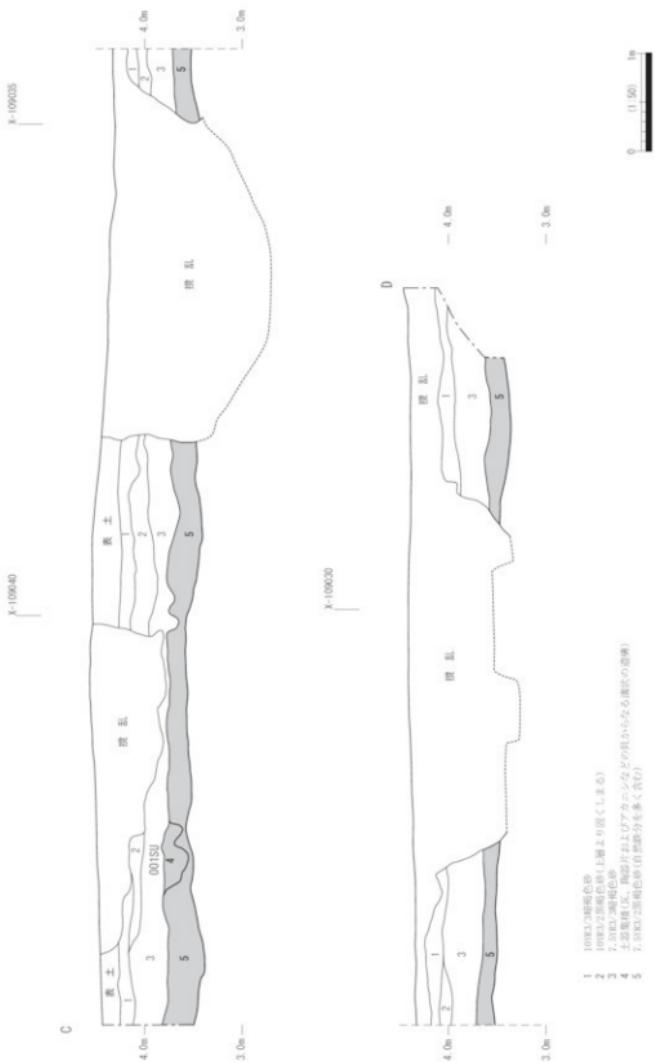
既に過去の東海市教育委員会の調査で、この周辺には弥生時代の方形周溝墓が、密度はさほど高くないが、群を為して展開する様相が知られており、該期の墓域として理解することが出来よう。なお、居住域に相当する傾向は未発見である。

主に2地点で集中的に発見された瓦は、後述の畑間遺跡3・4地点で発見されたものと同質のものであり、本来は莊園などの産物としての流通品であろう。東畠遺跡周辺に寺院が存在し

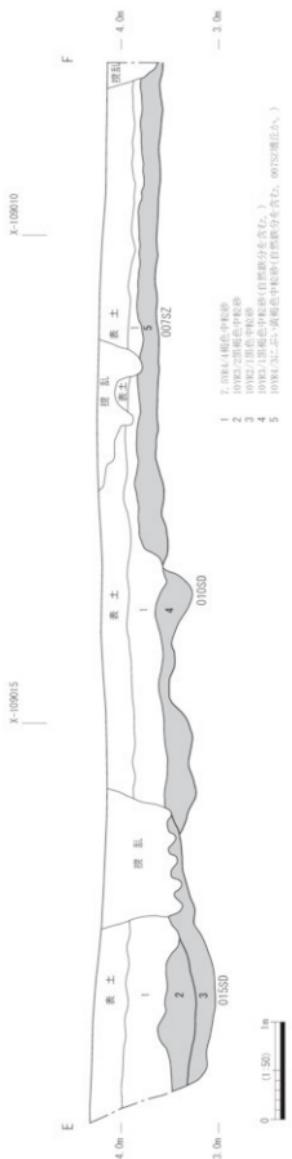


第7図 東畑遺跡1・2地点土層断面図の位置  
(A～Fは第9～第13図の土層断面図と対応する)

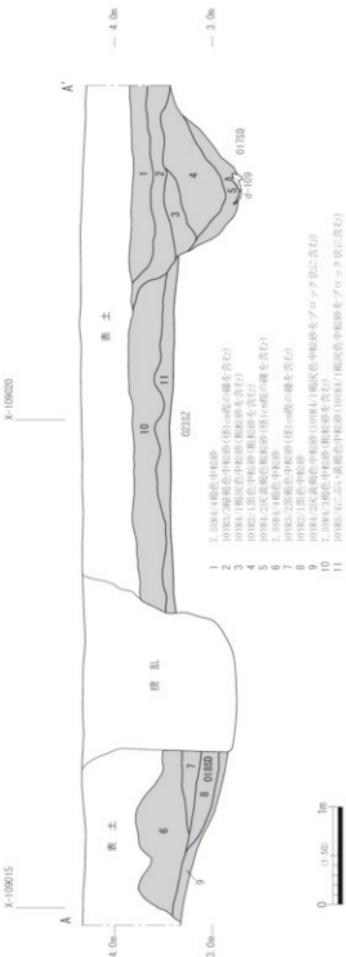
第8図 東畑遺跡2地点南壁土層断面図 (1/50)  
(トーナーは遺物包含層または遺構埋上である。)



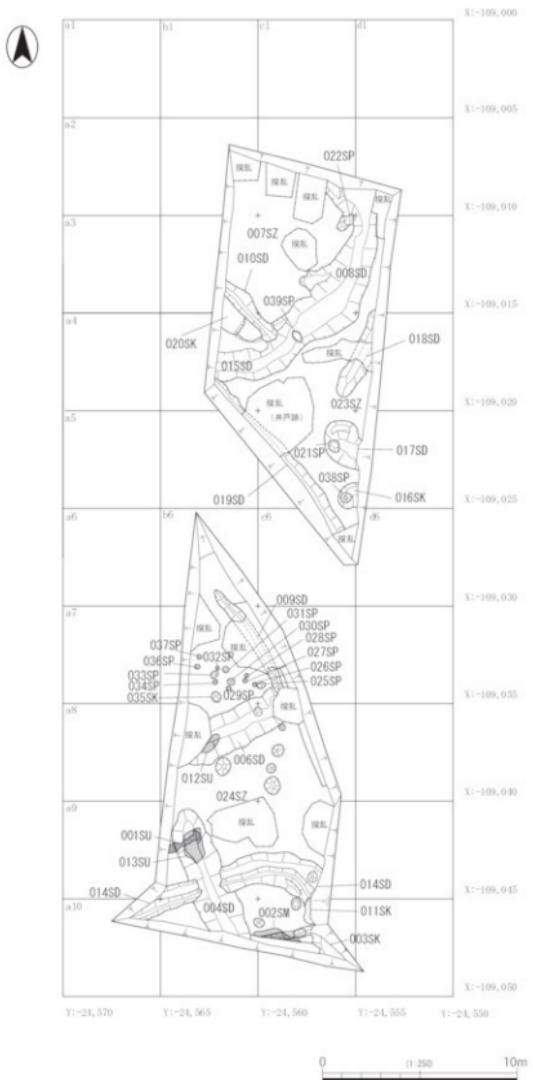
第9図 東畠遺跡2地点西壁上層断面図(1/50)  
(トーンは遺物包含層または遺構埋土である。)



第10図 東畑遺跡1地点西壁上層断面図 (1/50)  
(トーンは遺物包含層または遺構埋土である。)



第11図 東畑遺跡1地点東壁上層断面図 (1/50)  
(トーンは遺物包含層または遺構埋土である。断面の位置は第16図参照)



第12図 東烟遺跡1・2 地点調査区全体図 (1/250)

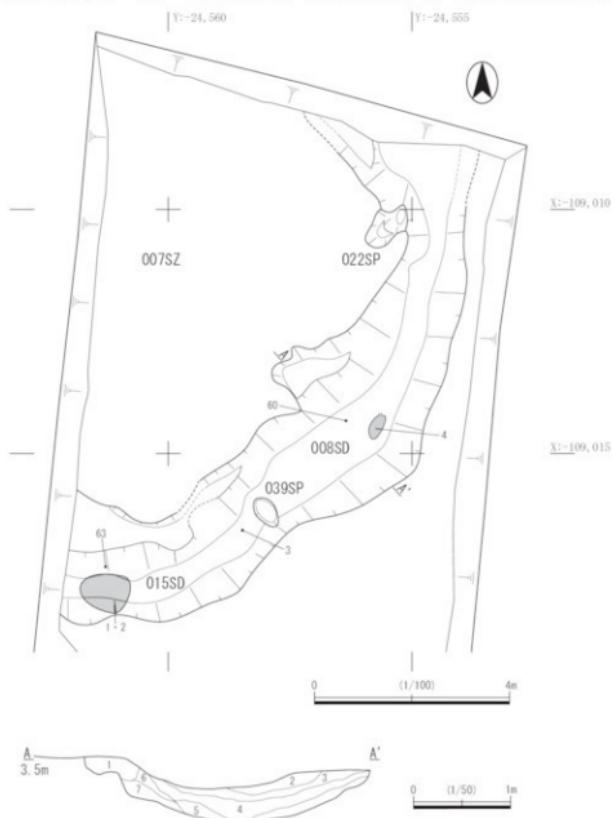
た可能性も否定できないが、現状ではやはり旧河道に隣接した地理的環境などから、製品としての瓦の集積や積み出しに伴った遺構である可能性もある。

## 第2節 遺構（第13～20図、図版第21～25）

## A 弥生・古墳時代

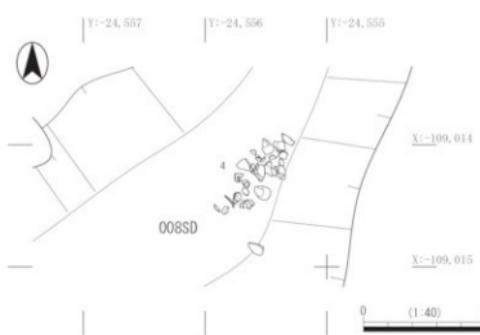
## 方形周溝墓

007SZ：1 地区の北半、b～d2～4 区に位置する方形周溝墓で、008SD と 015SD が周溝として伴

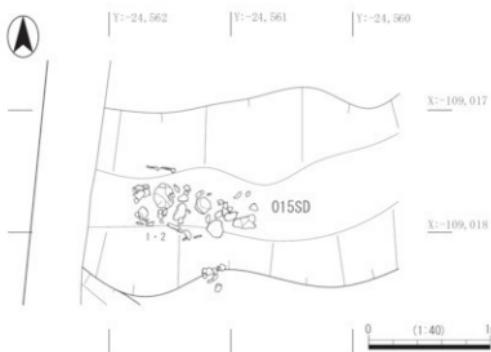


- 1 2, 5/4/3オリーブ褐色中粒砂(2, 5/4/6オリーブ褐色中粒砂ブロックを下部に含む。根の痕跡)
- 2 10YR2/1黒色中粒砂
- 3 10YR2/2黒褐色中粒砂
- 4 10YR1, 7/2黒色細砂含む中粒砂
- 5 10YR1, 7/2黒褐色中粒砂(10YR5, 3に似る)い黄褐色中～粗粒砂ブロックを含む)
- 6 10YR3/3暗褐色粗砂含む中粒砂(礫、10YR1, 7/2黒色中粒砂ブロックを含む)
- 7 2, 5/4/2暗灰黄色中粒砂(礫含む)

第13図 東畠遺跡 007SZ 平面図・断面図（平面図1/100, 断面図1/50）



第14図 東畠遺跡008SD遺物(4)出土状況図(1/40)



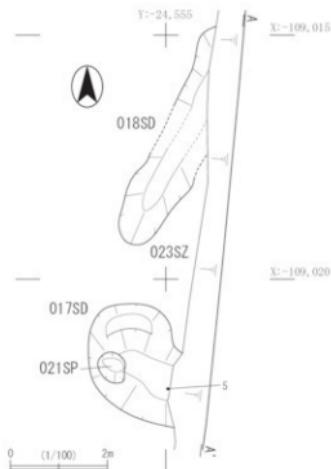
第15図 東畠遺跡015SD遺物(1・2)出土状況図(1/40)

径 60cm の平面梢円形を呈し、深さ 47cm で埋土はオリーブ褐色砂である。地山ブロックを含み、これを抜き取り痕ととらえれば、柱などが立てられていた可能性が考えられる。しかし、このほかの遺構、すなわち主体部などの遺構は検出できなかった。このことから、主体部が未調査区域で見つかる、あるいは搅乱により既に消失した可能性もあるが、本来的に主体部がなかった可能性も否定できず、その場合は墓ではなく祭祀にかかる壇状遺構ということになろう。推定規模は長径 11.5m 以上、短径 9m 以上である。なお、墳丘本体の加工面である地山砂層表面には、周辺の丘陵地の粘土層中にふつうにみられる鬼板層の破片が多く含まれており、基盤層形成のプロセスを垣間見ることができる。

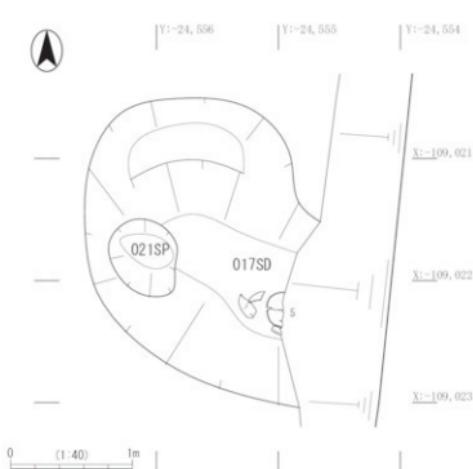
ついで周溝について、008SD と 015SD がある。008SD と 015SD は連続するが、当初切り合いの可能性も考慮して、010SD と交わる部分で遺構を分けて掘削した。ここではとりあえずそのままにしておく。008SD は c・d2 ~ 4 区に位置し不規則な幅で湾曲している。幅は 1.2 ~ 3.4m で、形状も安定しないが、深さは 60cm 前後で安定している。断面形状についても、幅が狭いところでは立ち上がりが急で、断面 U 字状を呈するが、幅が広いところでは、立ち上がりも緩やか

う（第13図、図版第21）。北に隣接する昨年度の東海市教育委員会の調査区では、これの一部と考えられる弥生時代の溝が調査されている。今回の調査では、弥生時代中期後葉に構築され、その後埋没するが、古墳時代前期に一部が再掘削され利用された遺構と考えられた。

まず墳丘について、平面形状は梢円形に近いが整っていない。昨年度の調査では見つかった周溝の一部から方形周溝墓の可能性が指摘されたが、今回の調査結果では具体的には梢円形に近い形状であるころが明らかになった。長軸は北東-南西方向である。中世以降に削平されているが墳丘盛土は約 20cm の高さで残存する。周溝底から約 74cm 残っている。墳丘からは c3 区でピットが 1 基検出されている。022SP で墳丘斜面を抉り込むように穿たれたピットである。長径 109m、短



第16図 東畠遺跡 023SZ 平面図 (1/100)



第17図 東畠遺跡 017SD 遺物 (5) 出土状況図 (1/40)

(A-A' 断面については第12図参照)

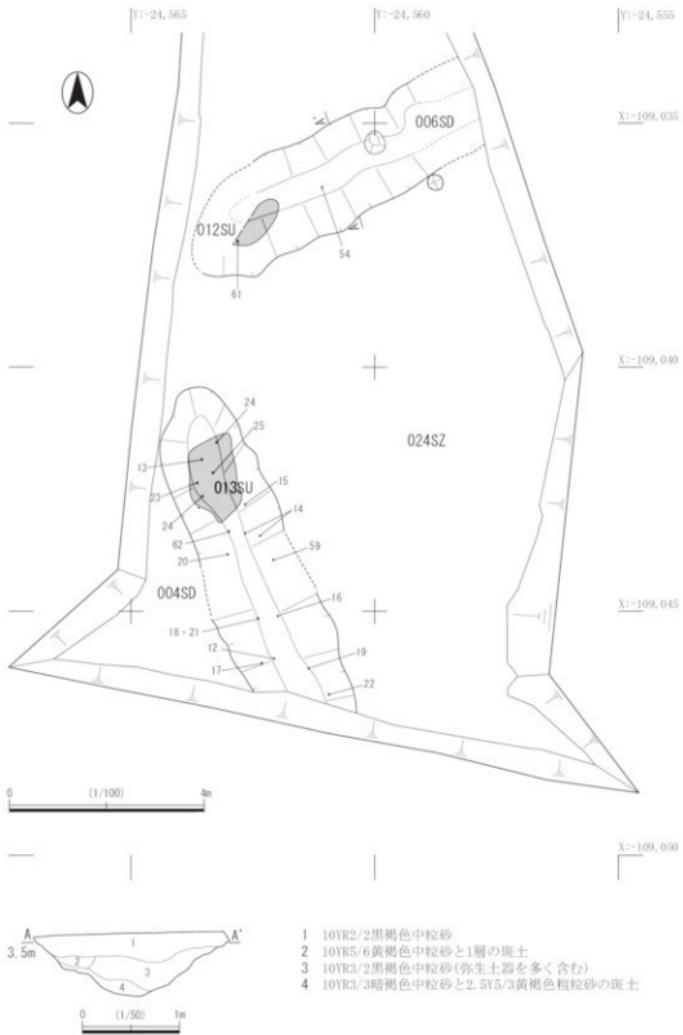
で断面碗状を呈する。008SD の断面では1回の再掘削が認められる。そして再掘削後の堆積層から出土する遺物は古墳時代前期の土器が中心で、部分的に供獻を思わせる集積をみる(第14図、図版第23)。ただし、出土した土器の風化が進んでおり、遺存状態はよくない。埋土は黒色砂層で、泥炭の成熟などは見られなかった。昆虫化石抽出用のブロックサンプリングを行ったが、昆虫化石は検出できなかった。c4区の008SD底には梢円形の小土坑039SPがある。長径71cm、短径31cm、深さ30cm。埋土はオリーブ褐色砂である。性格は不明である。

015SDはb・c4区に位置し、幅2.4~3.4mと比較的の一定しており、深さは60cm前後である。断面形状は碗状である。埋土は黒色砂層。西端に数個体からなる土器集積が認められたが、これは弥生時代中期後葉の所産である(第15図、図版第23下)。しかし、少し離れた地点からは古墳時代前期初頭に特徴的な長頸壺を含んでいた(図版第23下)。この長頸壺は008SDで指摘した再掘削後の遺物と考えたい。遺構の構築時期が弥生時代中期後葉と考えられるが、その後周溝については、古墳時代前期に再掘削されており、何らかの利用がなされていた可能性がある。

また、同じ場所から紡錘車が1点発見されており、墳墓への供獻という観点で考えると興味深い発見である。このほか、石斧破片などが出土している。

**023SZ:** 1地点南半、c・d4・5区に位置する方形周溝墓で周溝として017SDと018SDが伴う。出土土器から所属時期は古墳時代前期である。今回の調査区では隅を部分的に検出したが、遺構は調査区外にさらに広がっている(第12・16図、図版第22・23上)。

まず墳丘について、平面形状は、周溝017SDと018SDに区画された部分を周溝墓の隅の部分と考えれば、2m以上×5m以上の方形と推測される。その場合墳丘の主軸は、周溝から類推すれば、北西-南東方向と推測される。またその部分は中世以降の削平を受けているが墳丘盛土



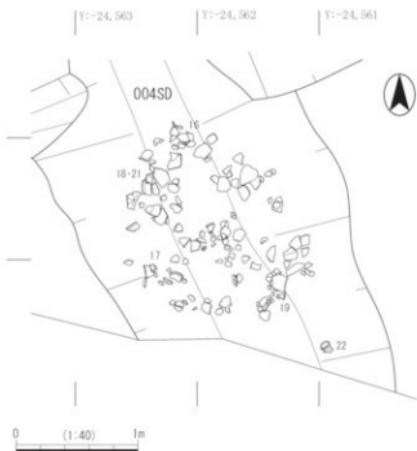
第18図 東畠遺跡 024SZ 平面図・断面図（平面図 1/100, 断面図 1/50）

は約50cmの高さで残存する。周溝底からは約1.2mで残っている。墳丘から遺構は見つかっていないが、未調査区域で主体部が見つかる可能性が充分にある。

ついで周溝について、017SDは方形周溝墓023SZの南西辺を画する周溝である。c・d5区に位置し北西-南東方向の溝で検出された長さ2.3m、幅1.6m、深さ70cmで断面碗状を呈する（



第19図 東畠遺跡 013SU 遺物出土状況図(1/40)



第20図 東畠遺跡 004SD 遺物出土状況図(1/40)

の1か所が切れたタイプで、1辺の規模は5mを上回る可能性が高い。

024SZ : 2地点、b・c8～10区に位置する方形周溝墓で004SDと006SDが周溝として伴う。出土器から所属時期は弥生時代中期後葉である。今回の調査区では約2/3を確認したが、残りの部分は調査区外に広がっている(第18図)。

墳丘について、盛土は中世の削平や掠奪によって消滅しており確認できなかった。周溝004SDと006SDに区画された部分が墳丘部分として、8m以上×10m以上の方形周溝墓と推測される。その場合主軸は北北西-南南東方向である。主体部など遺構は残存していない。

第17図、図版第22・23上)。埋土は褐灰色砂ないし黒色砂であるが底近くは灰褐灰色砂が堆積する。溝の南東側終点は調査区外にあり、北西側の溝の終点については円形に収束し、擂鉢状に落ち込む。溝底からは古墳時代前期の壺が発見されており、墳墓への供献が想像される。溝斜面部分に021SPを伴う。021SPは017SD末端斜面に穿たれたビットで、周溝墓に伴う柱穴である可能性が考えられる。長径64cm、短径56cm、深さ64cmで断面碗状を呈する。埋土はオーリーブ褐色砂である。墳丘への祭祀か、出入り口に関連したものかもしれない。018SDは方形周溝墓023SZの北西辺を画する周溝である。c・d4区に位置する。撹乱で分断された部分もあるが、北西-南東方向の溝で検出された長さ3.5m、幅1.1m、深さ45cmほどである。溝の北東側終点は調査区外にあり、南西側の溝の終点については、平面では徐々に細く丸く収束し、底からは緩やかに立ち上がる。017SDと018SDは直角を呈する方向にあるが、離れて収束しており、つながっていない。

以上からこの方形周溝墓について四隅が切れたタイプまたは周溝

周溝について、004SDと006SDがある。004SDは2地点南部西側で北北西-南南東の方向に延びる溝である。検出部分は長さ7m弱、幅は2mほどで、深さは40cm前後。北北西側の終点は平面形で丸く、底からは緩く立ち上がり収束する。南南東側の終点は調査区外である。断面形状は緩やかに立ち上がる碗状である。埋土は上層と下層の2層に分けられる。上層は10YR4/3にぶい黄褐色砂、下層は10YR5/3ないし6/4にぶい黄褐色砂である。上層は下層に比べやや暗い。そして埋土上層には大量の弥生土器の集積がみられたが下層には遺物がほとんど含まれていない状況であった。これは埋積状況に特徴があり、溝の掘削直後に大量の砂で埋没した様子が観察でき、土器集積(013SU)も含む大量の弥生土器は溝が半分以上埋積されてから廃棄されている。なお、この溝の北半、b9区の上層中に広がっていた弥生土器の集積について013SUとして記録して取り上げた。高藏式の時期の弥生土器で大型破片や完形土器を含んでいる(第19・20図・図版第25)。

006SDは2地点b・c8区、すなわち2地点のほぼ中央を東北東-西南西の方向に横断する溝で、溝の主軸方向が先の004SDと直交することなどから、一連の方形周溝墓の溝であると判断した。両端が搅乱によって失われているため全長は不明だが、検出部分は長さ3.5m、幅2m、深さ40cm前後である。断面形状は碗状を呈する。埋積状況は004SDと多少様相を異にし、埋土下半はやはりほとんど遺物を含まない砂であったが、弥生土器の集積が部分的にあり、埋土上半には大量の中世陶器が含まれていた。この弥生土器の集積を012SUとして記録し取り上げた。高藏式の時期の弥生土器で、土圧による破碎が著しく細片が多い(図版第25下)。

以上からこの方形周溝墓について四隅が切れたタイプまたは周溝の1か所が切れたタイプで、1辺の規模は10mを上回る可能性が高い。

#### B 中世

##### 地点貝塚

**002SM**: 2地点最南端、b10区で検出された中世の貝層で、破碎されていない保存の良いシオフキ・ハマグリなどの貝殻を多く含む(図版第24上)。長さ2.5m、幅0.9mを検出したが、貝層はさらに調査区外に広がっている。貝層の中心は調査区外南方のようである。出土遺物には山茶碗の小皿がある。なお、この周囲の包含層中からは小形の管状土錐が多く発見されている。土器集積遺構

**001SU**: 2地点南西、b9区に位置する土器集積遺構である。検出された範囲は長さ1.7m、幅20～50cmほどで、東北東から西南西方向に延びていたが、調査区外西方にもこのまま続いている(図版第24下)。土層断面で分かるように本来は溝に遺物がまとまって廃棄された状態の遺構である。出土遺物は極めて特徴的な内容を示す。三巴文の軒丸瓦瓦当を筆頭に、丸瓦の破片、伊勢型錐などの土器類、土錐などの他、大きなアカニシを中心とした、貝塚でみられるような自然遺物が渾然一体となって帶状に展開していた。出土遺物より中世、鎌倉時代の遺構である。

##### 溝

**009SD**: 2地点b6・b7・c7区、すなわち2地点北辺に沿って検出された細い溝で、中央部や端部を搅乱によって消失している。北西-南東方向の溝で、ゆるやかに湾曲がみられるが、幅は50cm前後、断面形状は逆三角形に近く、深さは30～40cmほどある。出土遺物には土師器錐、

山茶碗、常滑、弥生土器がある。中世の所産である。

010SD : 1地点中央西側、b3、b4、c4区に位置する北西 - 南東方向の溝である。検出された全長 3.5m、幅 60 ~ 80cm、深さ 30cm 以下で、断面逆台形を呈する。008SD や 015SD を切るが、c4 区で収束する。北西側は調査区外に延びる。当初 007SZ の填丘との関連から周溝ではないかと思われたが、遺物や検出状況を検討した結果中世に属することが判明した。出土遺物には弥生土器、中世土師器鍋、山茶碗、常滑の甕や釜、土錐がある。

014SD : 2 地点南部、a・b10 区及び b・c9 区に位置する。a・b10 区及び b9 区ではほぼ西南西 - 東北東の方向の直線的な溝であるが、c9 区では緩やかに折れ曲がり北西 - 南東方向に向きを変える。溝は東西とも調査区外に延びる。004SD を切る。溝の北岸は 60cm 前後の犬走り状の平坦部分を伴う。幅 1.1 ~ 1.8m、深さ 20 ~ 40cm。断面形は段が付いた逆台形である。出土遺物には弥生土器、須恵器、中世土師器の皿や鍋、山茶碗、常滑の甕や片口、瀬戸美濃がある。所属時期は中世である。周辺から管状土錐の出土が多い。

019SD : 1 地点 b4・5 区および c4・5 区、すなわち 1 地点南辺に沿うように延びた細い溝で、中央部は近代の井戸で大きく搅乱されている。北西 - 南東の方向の溝でゆるやかに湾曲がみられるが、幅は 60cm 前後、断面形状は逆三角形に近く、深さは 20 ~ 30cm ほどある。出土遺物には山茶碗、常滑、弥生土器などがある。中世の所産である。遺構の形態や規模、主軸方向が一致し、出土する遺物の特徴や時期が共通することから、2 地点の 009SD と関連する可能性がきわめて高い。

#### 土坑

003SK : 2 地点最南端の東側、b・c9・10 区に位置する土坑で、平面形は不整形で、ゆるやかな播鉢状の断面形状を呈し更に東側に落ち込んでいく。直径 2.9m、深さ 41cm。出土遺物には弥生土器、須恵器、中世土師器鍋、山茶碗、常滑甕がある。遺跡基盤の地山砂層を大きく抉るように掘り込まれているが、中世の遺構である。

016SK : 1 地点南端、c・d5 区に位置する不整形な土坑で、溝状に展開する可能性がある。一部調査区外に広がるがほぼ平面梢円形を呈し、長径 12m、短径 11m である。断面形は浅い皿状を呈し深さ 27cm である。埋土は褐灰色砂である。底に 038SP を伴う。038SP は 016SK の斜面にあるピットである。直径 50cm で西側に中段を持ち、最深部分は地表から 1m 近くに達する。それは抜き取りの痕跡と考えられるので柱穴である可能性が高い。

020SK : 1 地点西部の b3・4 区に位置する曖昧な輪郭を持つ浅い土坑である。遺構は調査区外に広がっているが、平面形は不整形で東側を 010SD に切られる。南側は 015SD を一部切っている。長辺 1.6m 以上、短辺 1.2m 以上を測る。断面形は立ち上がりがかなり緩やかな浅い逆台形を呈し深さ 9cm である。埋土は黒褐色砂である。出土遺物には中世土師器鍋、山茶碗がある。ほか軒平瓦の瓦当部分が出土している。中世の遺構である。

#### ピット群

025 ~ 037P : 2 地点北部の b・c7 区、006SD 北側にピット群が集中する。性格は不明である。深さは 50cm に達するものもいくつかあり、柱穴群のような印象を受けるが、その並びに規則性は見出せなかった。

(坂野)

第1表 東畠遺跡1・2地点における遺構出土土器・陶磁器の組成

種類	弥生土器	土師器	須恵器	中世 土師器	瓦器	瓦質土器	山茶碗	常滑	瀬戸美濃	合計
破片数	3710	122	5	157	1	1	795	104	4	4899
	3710	122	5				1062			4899
比率	75.7%	2.5%	0.1%				21.7%			100.0%

## 第3節 出土遺物（図版第1～6・第39～42、第1表・第9～13表）

出土遺物はコンテナにして20箱出土した。その内訳は、弥生土器、土師器、須恵器、中世土師器、瓦器、瓦質土器、山茶碗、常滑、瀬戸美濃、製塙土器などの土器・陶磁器、瓦類、土錐、陶丸、加工円盤、土製紡錘車などの土製品、石斧、敲石、台石、軽石などの石器・石製品、鉄釘などの鉄製品である。第1表は遺構から出土した土器・陶磁器の組成である。このうち、弥生時代の土器が最も多く、全体の7割を占める。ついで中世の土器・陶磁器がある。土製紡錘車や石器は弥生時代に、瓦や管状土錐など土製品は中世に属する。この2つの時期の遺物は遺構に伴うものも多い。なかでも瓦は、コンテナ2箱分出土しており、かなり多い印象がある。しかし、古墳時代の遺物も少数ではあるが遺構に伴ってまとまって出土している。奈良時代のものも、極少数であるが後世の遺構に混入して出土している。以下、遺物の種別、時代別に報告するが、畑間遺跡出土遺物も含め報告および遺物観察表における出土遺物の分類と編年はこれまでの研究成果に準拠して整理を進めた。それは巻末に引用参考文献として掲げた。なお、自然遺物については、自然科学分析の章で、一括して報告する。また、今回、須恵器や製塙土器など古墳時代・奈良時代の遺物は図化に堪えうる遺物はなく、割愛した。

## A 弥生土器・土師器

007SZ 出土土器：弥生土器の壺(1・2)と土師器の長頸壺(3)と広口壺(4)がある。このうち1と2は015SD西の土器集積から出土したものである。また、3も同じく015SDのそれに近いところから単体で出土した。4は008SDの土器集積から出土したものである。

1は弥生土器の太頸壺の口縁部から体部上半である。全体に摩滅が著しく、調整や文様は残っていない。口縁は外反するが、口縁外側はやや内湾気味である。頸部はすぼまるが、体部にかけて大きく広がり肩がやや張り気味である。頸部下に粘土接合痕がみられる。器形から古井式の太頸壺と判断した。弥生時代中期後葉のものである。2は弥生土器の壺の体部から底部である。胴から腰にかけて張り気味で底部に至る。底部は平底である。外面にはタテハケが残存する。器形から高藏式の細頸壺の底部ではないかと思われる。弥生時代中期後葉のものであろう。3は土師器の長頸壺である。口縁部はかなり摩滅しており、本来の形状を留めていない可能性がある。頸部から口縁部は内湾しつつ立ち上がる。体部は中央より下に胴部最大径がある。下膨れであるが、丸みを帯びた形状である。底部は丸底であるが、中央に浅いくぼみがある。調整について、外面は全体に縱方向のヘラミガキが施されるが、体部に横方向のヘラミガキがその後施されている。また、内面は体部下半に板ナデが施される。いわゆる内彎長頸壺ないし内彎口頸壺といわれるものである。器形と調整から古墳時代前期初頭の廻間II式のものと考え

られる。4は土師器の広口壺の体部である。頸部下には突帯が1条巡り、その上に刺突紋が施される。体部は中央よりやや下に最大径があるイチジク形を呈する。外面は縦方向のヘラミガキが施され、内面には縦方向のハケメが残る。これも器形と調整から古墳時代前期初頭の廻間II式のものと考えられる。

007SZ から出土した土器について大きく2時期ある。まずは弥生時代中期後葉、古井式の時期であり、もうひとつは古墳時代前期初頭の廻間II式の時期である。

023SZ 出土土器：土師器の広口壺(5)がある。017SDの底から出土した完形品である。口縁部は直線的に外に開く。体部は中央よりやや下に最大径があるイチジク形を呈する。底部は外に突出し平底である。外面は縦方向ないし斜め方向のハケメが施される。内面について口縁部から頸部にかけては横方向のハケメ、体部については縦方向ないし斜め方向の板ナデが施される。器形と調整から古墳時代前期初頭の廻間II式のものと考えられる。

024SZ 出土土器：弥生土器の壺(12～16・23)と甕(18～22・24・25)、高坏(17)が出土した。すべて004SDからの出土であるが、23～25は特に土器集積013SUからの出土である。

12は太頸壺の口縁部から頸部である。受口状口縁で、口縁の立ち上がりに強いナデが1周し、しっかりと立ち上がりを作り出しているが、やや外に開く。口縁端部には全面に押圧が施されている。頸部から口縁部は大きく外反する。頸部から体部にかけては緩やかに開くが、中位あたりでやや外に膨らむ。また、頸部から体部にかけての外面にはヘラによる斜格子紋が3つの帶状に施され、その間を2条単位の櫛描直線紋により区画されている。斜格子紋について1番上の斜格子は左下がりの斜線を施した後、右下がりの斜線を施しているが真ん中の斜格子と下の斜格子は逆で左下がりの斜線が後である。内面は口縁部がナデにより仕上げられている。器形と紋様から弥生時代中期後葉の古井式のものである。13は細頸壺の完形品である。袋状口縁で、体部の最大径が中央よりやや下あたりにあり、強く張る。口縁外面には凹線紋が4条巡る。頸部上半には櫛原体による刺突紋が2段施されている。頸部から体部上半にかけてはタテハケの後4本1単位の櫛描直線紋が12条施され、その下位、体部最大径あたりに同じ櫛原体による波状紋が施される。高藏式の凹線紋系土器群の土器であり、弥生時代中期後葉のものである。14は太頸壺の体部である。体部の最大径は底部に近い下位にあるが、体部上半は丸みを持って大きく外に張る。底部にむかっては急にすぼまるようで、残っている体部の下部はむしろ底部の一部ともみることができる。体部上半には16本単位の櫛描直線紋と波状紋、ヘラによる斜格子紋が施される。これはまず斜格子紋が施され、ついで櫛描直線紋により画され、最後にあいたところに櫛描波状紋が施されている。斜格子紋は左下がりの斜線が先で右下がりの斜線が後である。体部最大径の部位以下には横方向のヘラミガキが施される。内面はナデが施されている。体部最大径の部位に粘土接合痕が見られる。器形と紋様から弥生時代中期後葉の古井式のものである。15は太頸壺の口縁部である。受口状口縁で、口縁の立ち上がりも大きく外に開く。口縁端部には14個単位の部分押圧が施される。これも器形・紋様から弥生時代中期後葉の古井式である。16は細頸壺の体部である。体部中央より下に最大径があるが、丸みを帯びた器形である。肩部には2本単位の櫛描直線紋の後にその上下に沈線による斜線が施され羽状に施紋されている。またその下3条単位の櫛原体による斜格子紋が施され、これは後で上下に3条単位の櫛描直線紋によって画される。なお、この斜格子紋は右下がりの斜線の

後左下がりの斜線が施される。このような紋様は知多半島含め愛知県内には類例が見当たらず、他地域の影響を受けた土器と見られる。胎土について、風化は進んでいるが、他の土器と大きな違いは見えない。器形や紋様から弥生時代中期後葉のものと考える。17は高环の口縁部である。鉗状口縁であるが、口縁端部は肥厚しない。坏部底部からの立ち上がりは直線的に開く。調整について、口縁部がヨコナデにより仕上げられている以外は、摩滅のためはよくわからぬ。器形から弥生時代中期後葉の高蔵式のものであろう。18～22は弥生土器の台付甌である。口縁部は短く外反する。口縁端部について18・20はハケの原体らしきものを当てていて、19と21は板状の原体で刻目を入れている。体部は最大径が上位にあり緩やかに底部につながる。底部は、18～21は欠損しているが、22のような台が付く。調整について、18・20・21・22では、外面はタテハケの後タタキが施され、最後に体部下半にタテハケが再度施される。20は体部中位に横方向のタタキ痕の上からさらに左上がりのタタキ痕がある。19はタタキ痕について口縁外面と体部に一部残存する。これは口縁を外反させる前にタタキ調整を施していたことを示す。そしてタタキの後、タテハケが施される。内面はいずれも口縁部にヨコハケ、体部上半にはタテハケでその後、下半に上方向のケズリが施される。器形・調整から18～22はいずれも弥生時代中期後葉の高蔵式のものである。23は細頸壺の体部から底部である。体部最大径は体部のほぼ中位にあり、全体に丸みを帯びている。頸部下には簾状紋が一部残る。その下には2本単位が2単位で1組となる複合櫛描紋による直線紋が12単位施される。その下、ほぼ最大径の位置にこれも2本単位が2単位で1組となる複合櫛描紋による波状紋が施される。体部下半はヨコハケの後タテハケが施される。内面については、体部上半はタテハケ、下半は縦方向の板ナデが施される。器形・調整から23は弥生時代中期後葉の高蔵式のものである。24・25は弥生土器の甌である。底部が欠損しているが、台が付く。24・25とも、口縁は短く外反するが、口縁端部について24はハケの原体のようなものを当てており、25は板状の原体により刻んでいる。体部の器形は24・25とも体部最大径は上位にある。外面調整について、24はタタキが施された後、タテハケが全体に施される。内面についてはともに、口縁部ヨコハケ、体部上半タテハケ、下半に上方向のケズリが施される。どちらも器形・調整から弥生時代中期後葉の高蔵式のものである。

024SZから出土した土器について、古井式と高蔵式があるが、弥生時代中期後葉の時期に限定される。

**中世の遺構・包含層出土土器：**中世の遺構や包含層から出土した特徴的な弥生土器・土師器を取り上げる。弥生土器では条痕紋系土器の深鉢(6・8・10)、内傾口縁土器(7)、壺(9)、土師器には器台(11)がある。6は深鉢の口縁部である。調整はナデのみで条痕等は特に認められないが、口縁端部が内外面に拡張する。おそらく弥生時代前期の条痕紋系土器に伴うものであろう。8は深鉢の底部である。右下がりの条痕が施される。体部の立ち上がりが底部から上方へ直線的に立ち上ることから弥生時代中期に入るものと考えられる。10は深鉢の体部の破片である。外面に縦位の羽状条痕が残っている。弥生時代前期の水神平式のものである。7は内傾口縁土器の口縁部で端部が肥厚し丸く収められている。外面には条痕が残る。弥生時代前期のものであろう。9は壺の体部の破片である。上半には横方向の条痕紋が、下半には左下が

りの条痕が残る。これも弥生時代前期の条痕紋系土器に伴うものと推測される。11は土師器の器台の坏底部と脚部上半部である。坏部は水平な底面から一旦上方に立ち上がり、そして湾曲して外に大きく開く。脚部はわずかに外に開くようである。外面には細かなヘラミガキが残る。坏底部のみ横方向で、あとはほぼ縦方向のミガキである。器形から古墳時代前期の廻間II式のものである。

### B 中世の土器・陶磁器

001SU出土土器・陶磁器：瓦質土器鍋(26)と瓦器碗(27)が出土している。26は、断面を観察したところ、表面は黒色化しているが器壁内部は白く還元しており、瓦質土器とした。受口状口縁の鍋である。体部はわずかに内湾しつつ立ち上がる。頸部で一旦大きく外に開くが、口縁は再び上方に屈曲して短く立ち上がる。口縁端部はわずかに肥厚して、平坦な面を形成する。外面調整は、頸部に指頭圧痕があるほかは摩滅のため残っていない。内面は板ナデである。外面にはススが付着し、使用痕は良く残っている。27は、内面に黒色化とヘラミガキが施されていることから一応瓦器の碗とした。しかし断面の観察から赤く発色しており十分に還元焰焼成はなされていない。しかし中世畿内の瓦器碗の影響を受けているものと考えている。碗の底部である。内面にはジグザグ状のヘラミガキが施される。外面は黒色化せず、かつヘラミガキも残っていない。高台は付高台で低くややつぶれ気味である。

このほか山茶碗の碗や小皿が出土しているが、知多窯産の中野編年で4型式から6a型式が主である。したがって13世紀第1四半期から第3四半期の時期が考えられる。

002SM出土土器・陶磁器：山茶碗の小皿(28)が出土している。知多窯製品で時期は中野編年の5型式である。この遺構からはこの前後の時期の山茶碗が出土している。

その他の遺構・包含層出土土器・陶磁器：中世土師器、山茶碗、常滑、瀬戸美濃が出土している。順に説明する。

中世土師器については、伊勢型鍋(29)が出土している。29は鍋の口縁部から頸部である。北村編年のA4a類に当たる。

山茶碗については、耳皿(30)、小碗(31～35)、小皿(36～42)、碗(43～45)、片口鉢(46)が出土している。30は耳皿である。薄く高い高台が付く。藤澤編年の尾張型第3型式である。31～35は小碗である。31は高台が薄く高く整えられているが、32～35は断面三角形状になっている。35にはモミ圧痕が残る。31は胎土がよく、猿投窯産である。藤澤編年の尾張型第3型式である。32～35は知多窯産で、32は中野編年の1b型式、33は同じく2型式、34・35は藤澤編年の尾張型第3型式である。36～42は小皿である。このうち36～39・41が知多窯産である。36・37は中野編年の4型式、38・39は5型式、41は6a型式。40は内面が板状工具により整形されている。瀬戸窯産で藤澤編年の尾張型第6型式。42は産地不明の小皿である。ほかと比べて器高が高い。また底部は突出するようで、中央にくぼみがある。中野編年の3型式に併行すると考えることもできる。43～45は碗である。43・44は瀬戸窯産の碗である。43は藤澤編年の尾張型第9型式か。44は第10型式である。45は東濃型の碗である。藤澤編年の東濃型第10型式、すなわち大洞東1号窯式である。46は片口鉢の底部である。体部は底部から斜め上方へ直線的に立ち上がる。外面の体部高台付近は回転ヘラケズリが施されている。内面は自然釉が多量に付着している。使用の痕跡が認められない。知多窯産で中野編

年の5型式である。

常滑については小形盤(47)、甕(48・49)、片口(50)がある。47は小形盤で、全体の1/6の破片である。ほかの遺跡ではあまり見かけない器種である。48は甕の口縁部である。口縁は外反するのみで端部は薄く丸く收まる。中野編年の3型式である。49は甕の口縁部から頸部で、口縁端部をN字状に成形している。頸部と拡張した口縁部との間に隙間がわずかにあく。押印がある。中野編年の6b型式である。50は片口の口縁部から体部である。全体に丸い器形で外面下半にはヘラケズリが施される。中野編年の6a型式である。

瀬戸美濃について、古瀬戸の平碗(51)がある。51は平碗の底部である。高台内に御目が施されている。内外面には灰釉が施されるが、高台内のみ露胎である。藤澤編年の古瀬戸中Ⅰ期のものである。

#### C 瓦

軒丸瓦(52～56)、丸瓦(57)、器種不明の瓦片(58)が出土している。

52～56は軒丸瓦である。いずれも瓦当部分の破片である。右巻きの三巴文で、珠文を巴の周囲に配する。内区が完存する52では珠文は24個ある。52ではまた范傷が上の中央やや左側の珠文のあたりと、下の中央やや右側の珠文にみられる。この范傷は53にも見られ、52と53は同范であることがわかる。54と55は他と比べると瓦当が若干薄い。いずれも硬質緻密に焼きあがっており、一部灰釉が掛かる。知多窯産の瓦で、12世紀後半のものである。ただし、56のみ比較的焼成が甘く、灰色を呈する。巴文も厚みがなく平面的である。若干時期が新しく考えられる。52と55は001SU、54は006SD、53・56は包含層から出土した。

57は丸瓦の挟端部側の約1/2片である。玉縁がなく行基葺きの丸瓦である。釘孔がある。凸面は、灰釉が掛かり明確ではないが、おそらくナデにより仕上げられている。凹面には布目痕が残る。側面は凹面側、凸面側とともに面取りをする。挟端面は凹面側のみ面取りをする。硬質緻密に焼きあがっている。知多窯産の瓦である。001SUから出土した。

58は、上方を欠く破片で、他の瓦と同様に硬質緻密に焼きあがっており、知多窯産の瓦の1種と思われるが、種類については不明である。側面三角形状に残り、1辺はケズリにより面があるが、それ以外はナデおよびユビオサエにより整形されている。包含層から出土したが、同様の遺物は他にもう1点ある。

#### D 土製品

紡錘車(63)、管状土錐(64～68)、陶丸(69)、加工円盤(70)が出土している。

63は紡錘車である。円盤状の中央に孔があけられている。64～68は管状土錐である。64は一部欠損するが、ほかは完形である。土師質に焼きあがる。64のように大形のものと、65～68のように小形のものがある。69は陶丸で、知多窯産である。70は山茶碗を打ち欠いて作った加工円盤である。63は弥生時代、64から70は中世のものである。63は015SD、64・66・69・70は006SD、67は014SD、68は002SM、65は包含層から出土した。

#### E 石器

抉入柱状片刃石斧(59)、両刃石斧(60)、敲石(61)、台石(62)が出土している。

59は抉入柱状片刃石斧の基部の破片である。全体に研磨されているが、製作時の剥離痕がところどころくぼみとして残る。抉りは浅いが、この部分のみよく研磨されている。60は一

部欠損した両刃石斧である。刃部はやや丸みをおびた弧状を呈する。基部は特に加工が施されていない。全体に研磨されているが、体部には製作時の剥離痕、敲打痕が残る。61は完形の敲石である。棒状礫の上下の端部に敲打痕の面が残る。石器製作用の敲石である。62は完形の台石である。表面と裏面には使用によるとみられる摩耗痕が認められる。

ともに出土した土器からこれらは弥生時代のものと考えられるが、59の抉入柱状片刃石斧のみはその形状から弥生時代でも前期のものであろう。59は004SD、62は006SD、60・61は包含層から出土した。

F 鉄製品

所属時期は不明で実測図や写真を掲げていないが、鉄釘や鉄片が出土している。

(桐山)

## 第3章 番間遺跡の調査

### 第1節 概要と基本層序（第21～26図、巻頭図版第2、図版第26～36）

3・4地点の北セクションに見られるように、現代の表土層以下、基盤層の一部を除き全て砂層である。基本層序は以下のとおりである（第21～24図、図版第28）。

I層：表土層。近現代の盛土ないしは耕作土である。

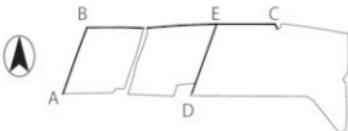
II層：遺物包含層。8の10YR3/3暗褐色砂層以下の砂層がこれに当たる。

III層：基盤層。10YR5/4にぶい黄褐色砂層で地山層である。この下に固結シルト層がある。

3地点の東半は大規模な搅乱によって基盤層まで全て消失していたが、10～40cmの表土層下は直ちに暗褐色砂の遺物包含層となる。

時期の安定した遺物が見られるのは、  
013SM貝層に伴う硬化面（8層）以下であり、  
おおむね中世に収斂される。

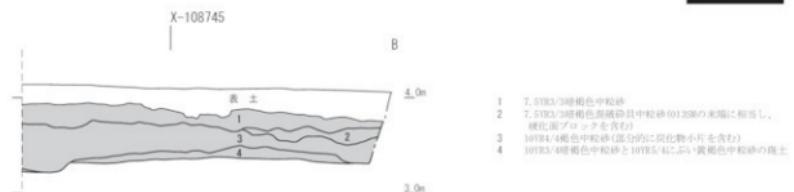
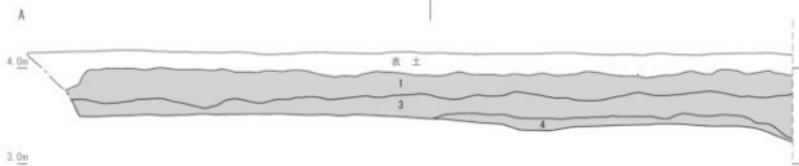
貝層013SMより下の砂層は、より黒色を強め、部分的に純貝層や泥炭層が含まれている。  
また、3地点西セクションで明らかなるよう、  
基盤砂層下のシルト層まで掘削された024SD  
埋土には、部分的に洪水性の砂層の堆積がみ



第21図 番間遺跡3・4地点土層断面図の位置

(A～Eは第22～24図の土層断面図と対応する)

X-108750



- 1 7.5YR3/2暗褐色中粒砂
- 2 7.5YR3/2暗褐色粗礫含中粒砂(013SMの末端に相当し、硬化面ブロックを含む)
- 3 10YR4/4褐色中粒砂(底部に炭化物小片を含む)
- 4 10YR3/4褐色中粒砂と10YR5/4にぶい黄褐色中粒砂の複合

第22図 番間遺跡4地点西壁土層断面図(1/50)

(トーンは遺物包含層または遺構埋土である)

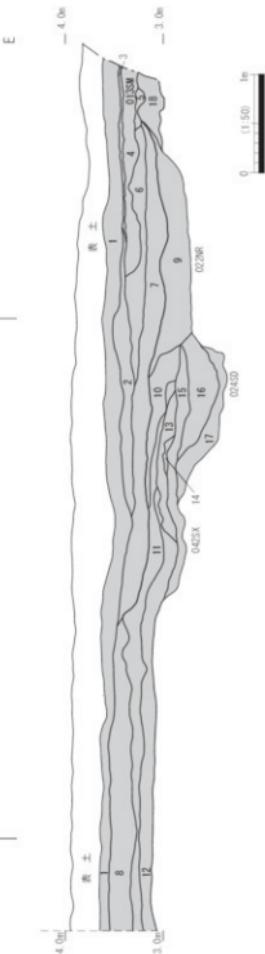
D



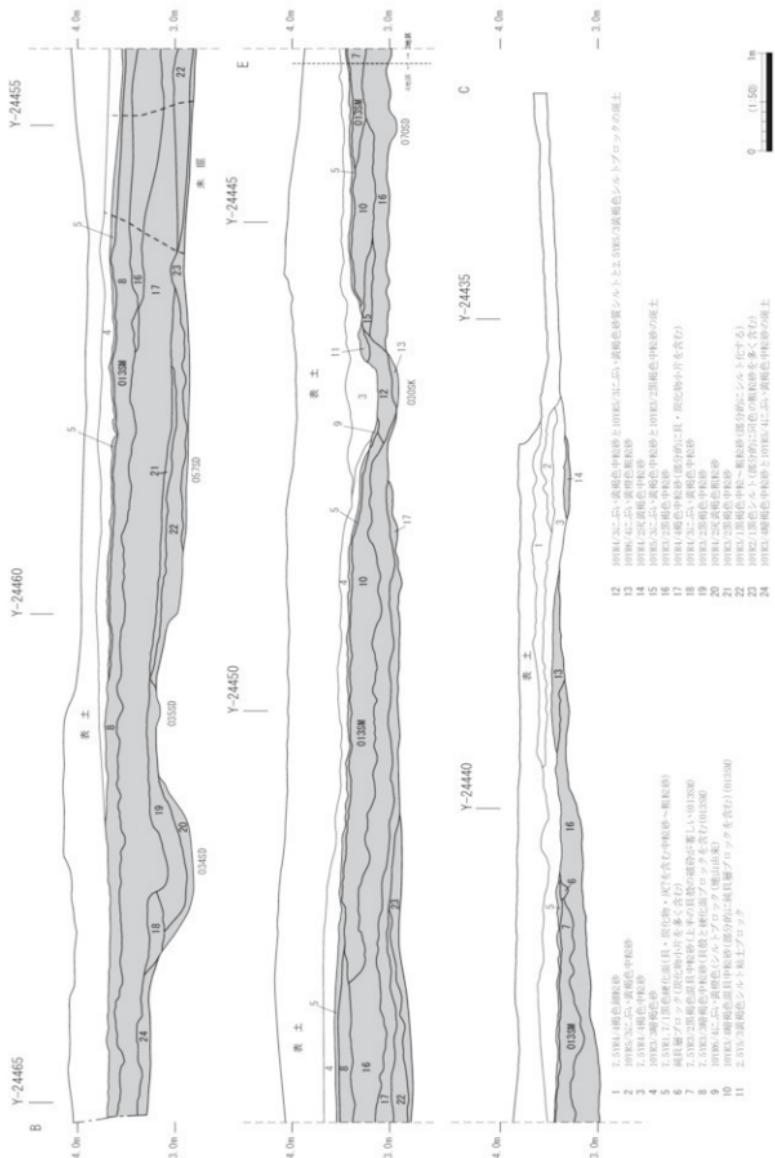
- 1 7.1081(褐色土中層)  
1082(褐色土中層) (貝殻・貝壳少量含む)  
2 7.1081(褐色土中層) (貝殻・貝壳多量含む) 中層約~4.0m  
3 7.1081(褐色土中層) (貝殻・貝壳多量含む) 多量含む  
4 1082(褐色土中層) (貝殻・貝壳多量含む) 中層約~4.0m  
5 1082(褐色土中層) (貝殻・貝壳多量含む) 多量含む  
6 1082(褐色土中層) (貝殻・貝壳多量含む) 中層約~4.0m  
7 1082(褐色土中層) (貝殻・貝壳多量含む) 中層約~4.0m  
8 1082(褐色土中層) (貝殻・貝壳多量含む) 中層約~4.0m  
9 1082(褐色土中層) (貝殻・貝壳多量含む) 中層約~4.0m  
10 1082(褐色土中層) (貝殻・貝壳多量含む) 中層約~4.0m  
11 1082(褐色土中層) (貝殻・貝壳多量含む) 中層約~4.0m  
12 1082(褐色土中層) (貝殻・貝壳多量含む) 中層約~4.0m  
13 1082(褐色土中層) (貝殻・貝壳多量含む) 中層約~4.0m  
14 1082(褐色土中層) (貝殻・貝壳多量含む)  
15 1082(褐色土中層) (貝殻・貝壳多量含む)  
16 1082(褐色土中層) (貝殻・貝壳多量含む) 中層約~4.0m  
17 1082(褐色土中層) (貝殻・貝壳多量含む) 中層約~4.0m  
18 1082(褐色土中層) (貝殻・貝壳多量含む)

X-108750

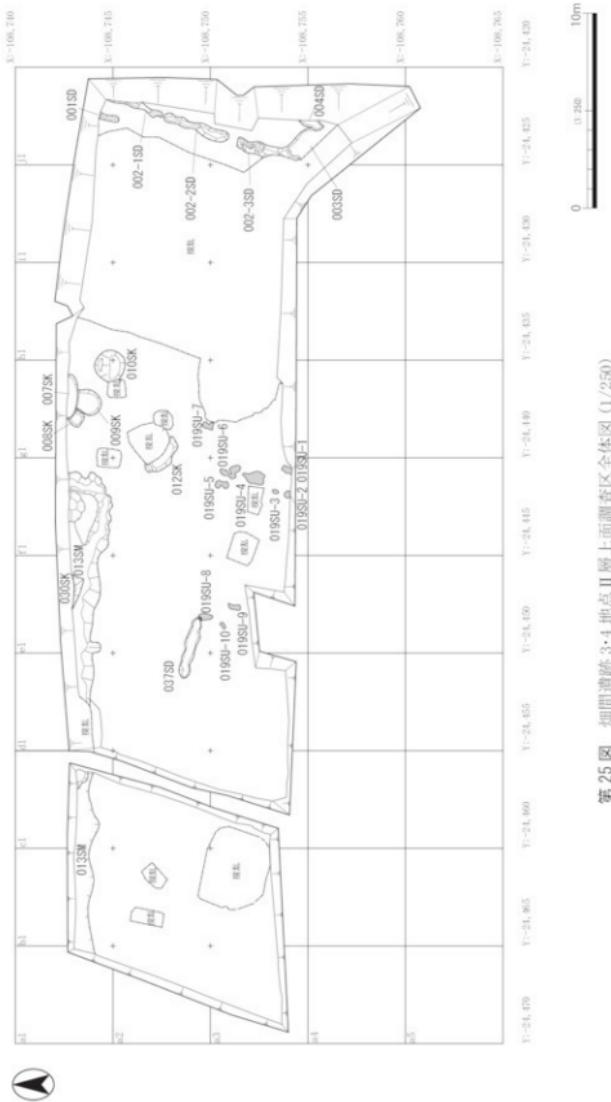
X-108745



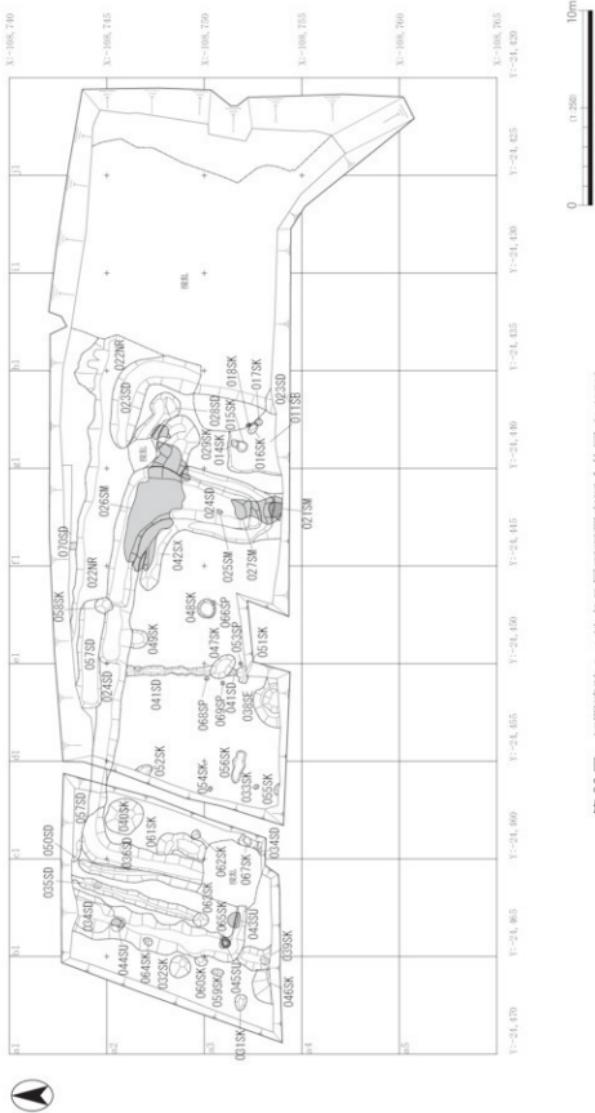
第23図 番間遺跡3地点西壁土層断面図 (1/50)  
(トーンは遺物包含層または遺構理上である。)



第24図 煙問遺跡3・4地点北壁上層断面図(1/50)(→は遺物含層または遺構上である。)



第25図 煙間遺跡3・4 地点II層上面調査区全体図 (1/250)



第26図 煙問遺跡3・4地点II層下面調査区全体図(1/250)

られる。この洪水層は南北に展開する遺跡の存在する砂堆に対しほぼ垂直に、東側の後背湿地方面から流入し、遺物包含層を削り取ったことが推測されるものであるが、これ以外にもラミナ状の構造を持つ砂層が部分的に見られることから、砂堆東辺は何度も洪水に見舞わされていたようである。

024SD 本体下半は急角度でシルト層まで掘り込まれていたが、溝下半には泥炭層がみられたことから、掘削後一定期間は滞水していたのであろう。しかし、深い掘削は区画溝全体には及んでおらず、西半では基盤砂層内で完結していた。

遺跡の存在する大規模砂堆（第1砂堆）の平均的な標高は4～5mであるが、調査範囲内では西側（4地点）に向かって次第に標高を高める傾向にある。

現在、3地点より東側には県道を隔てて水田が展開しているが、標高2m前後の水田地帯が大田川の旧河道に相当する。多くの場合、洪水は周辺の丘陵方面から旧河道に沿って砂堆に向かって発生し、河道湾曲部を閉塞させて砂堆上にあふれ出していくのだろう。

第1砂堆はちょうど佐渡島のような中央が斜めに括れた形状を呈しているが、ほぼ中央の括れ部分東端に位置する番間遺跡での観察結果から、この形状自体もいく度もの河道の変化や洪水による結果である可能性が高い。

番間遺跡3・4地点では、遺物に弥生土器・土師器・須恵器が少量混じるが、遺構としてはほぼ中世に限られる。今回見つかった遺構は、竪穴建物跡1基、井戸1基、溝15条、土坑35基、貝層5基、土器集積遺構3基、焼土集積遺構10基、ピット3基、洪水砂層1条である。

しかし、調査結果としてはII層の上面と下面において遺構をとらえており、遺構面としては2面認識している（第25・26図、巻頭図版第2、図版第26・27）。

II層上面の遺構は貝層1基と溝5条、土坑5基、焼土集積遺構10基があるが、007SK・008SK・010SK・012SK・030SKの5基は木の根の攪乱で特に報告しない。また、溝の内001SD・002SD・003SD・004SDの4条は3地点東端部で検出した溝で、いずれも現代に近い時期の耕作に係わる溝である。これも特に報告しない。

II層下面の遺構については、竪穴建物跡1基、井戸1基、溝10条、土坑30基、貝層4基、土器集積遺構3基、ピット3基、洪水砂層1条である。これらは次節報告する。

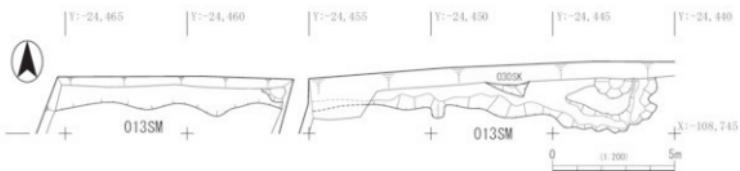
砂堆上に展開した遺跡は各時代での濃淡は見られるが、基本的に中世以降近代に至るまでの歴代遺跡であり、各時代で常に整地や掘削が行われていたようである。

## 第2節 遺構（第27～39図、巻頭図版第3、図版第29～36）

### A II層上面の遺構

#### 地点貝塚

013SM：3地点・4地点調査区の北辺に沿って東西に直線的に延びる、貝層を伴う遺構である（第27図、図版第29～31）。b1～f1区に位置する。f1区に東端があり、約25mの長さで確認されたが、西へ調査区外にさらに続く。幅については調査区外にも続くが、2.14m以上ある。つまり約2.1m以上の幅で細長く西北西に延びる遺構である。またこの横断面は浅い皿状を呈する。埋土について上面は炭化物や脱灰した貝殻などを多く含みほぼ水平な硬化面を形成している。含まれる貝層中にはまったく破碎を受けていない純貝層部分もあるが、貝層上面は踏み



第27図 畑間遺跡013SM平面図(1/200)

しめられたように破碎がみられ硬化していた(図版第31上)。この遺構を硬化面で捉えれば、硬化面が帯状に延びる遺構である。こうした場合、道路遺構の可能性を指摘することはきわめて自然であろう。

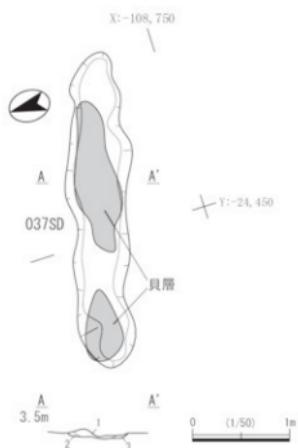
また001SD、002SD、037SDなど、この遺構とほぼ平行ないし直交する方向の溝が複数あり、II層上面において一定の地割の原理が働いていたと推測される。あるいは、この013SMの延長上には、現在幅3mほどの小道が同一直線上に乗ってくる。この道は明治時代の地籍図にもある古い道である。したがって、013SMが道かどうかという問題は、調査区内で収束する仮説ではなく、調査区外の地割も含めて検討されるべきものもある。言い換えれば、013SMについては、まずこうした地割のルールの上に形成された遺構であることは指摘できよう。そのうえで上面の硬化面から道路遺構の可能性が指摘できる。その上で規模や形状から推測すれば貝殻を用いた道路の舗装である可能性もある。それには、路面を硬化させる材料のひとつとして貝殻を意図的に土に混ぜたのではないかという想定も含む。なお、4地点西区では貝層の縁辺部に相当するようで、貝殻の密度は低い。また、貝類の分析によれば、出土した貝類はハマグリとシオフキが9割を占めている。

ただし、埋土については愛知県埋蔵文化財センターの鬼頭剛氏により軟X線による土壤構造分析も行っている(第4章第1節参照)。そこでは埋土中の貝の残存度について上面に近いものは脱灰しているが、下部のものは脱灰せず貝の形状が保たれているという興味深い指摘がある。しかし鬼頭氏はこの貝殻の脱灰と土壤の硬化については、二酸化炭素を含んだ水(雨水)により貝殻の炭酸カルシウムが酸性炭酸塩となって砂層に溶出し、それが堆積物を固化したのではないかとしている。硬化面が踏み固めた結果ではなく、別の要因が作用した結果なので、分析結果から道路遺構とはいえないと言鐘を鳴らしている。傾聴すべき意見である。しかし、この貝殻を混ぜた土が路面を硬化させるための人為的な技術としたらどのようになるのであろうか。路面の構築方法として認識できないであろうか。これには鬼頭氏も指摘するように考古学的証拠を積み重ねるしか方法はなさそうである。今後の課題である。

遺物は貝殻と同様、埋土に含まれる形で出土している。土師器、山茶碗、常滑、瀬戸美濃がある。その中には常滑三筋壺も含まれている。出土した貝類の分析は自然科学分析の節で別途報告する(第4章第3節参照)。

#### 溝

037SD: 4地点東区の中央、d2・e2区に位置する。全長約3.2mで平均的な幅は50cm前後の溝状の遺構である。断面形について浅い皿状を呈するが、下位への掘り込みはほとんどなく、むしろプランに沿って埋土の混土貝層が盛り上げられていた(第28図、図版第31下)。遺構の方



第28図 番間遺跡037SD 平面図・断面図 (1/50)  
1. 5Y3/1オリーブ褐色中粒砂(シルト含む)貝を多量に含む  
2. 2.5Y3/1黒褐色中粒砂(シルト含む)固くしまる  
3. 2.5Y3/1黒褐色中粒砂(シルト含む)炭化物と焼けた貝を含む。固くしまる

第28図 番間遺跡037SD 平面図・断面図 (1/50) 011SB : 3地点南辺のf3・g3区に位置する。ほぼ正方形のプランを呈する堅穴建物跡と考えられる(第29図、図版第32)。遺構の東側を搅乱と023SDに切られており、また南辺は調査区外である。東西3.32m、南北2.79mで深さは26cmである。断面形は箱形を呈する。遺構は基盤層であるにぶい黄褐色砂層に構築され、埋土は6層に分けられる。この内3層までが遺構が埋没する過程の堆積土である。この中に焼土が含まれていることから、焼土は流れ込みであることがわかる。4の暗褐色中粒砂層はシルトを含みやや粘土質で締まる。木質の痕跡と考えられ壁材や床の柱材の痕跡ではないかと考えられる。5・6はブロック土を含み、人為的に置いた土であろう。ただし、締まっていないので貼り床の土とは断定しがたい。

この遺構の底面から5基の小土坑014～018SKを確認した。このうち017SKは柱穴での掘方、018SKは柱の抜き取り穴である可能性が高い。するとこの堅穴建物は主柱2本である可能性が高い。

II層上面で検出し掘り下げたが、北セクションでもわかるようにこのあたりは地山が高くなっている、本来II層下面で検出されるべき遺構がII層上面で検出されている。それはまた011SBが023SDに切られている事実からも011SBは本来II層下面の遺構とすべきことが明らかである。

なお出土遺物には弥生土器、中世土師器、山茶碗がある。いずれも小破片であり、時期を決定する根拠としては難しい。

以上から011SBは、方形で主柱2本の堅穴建物であると考えられた。それは、遺物から所属時期を決めるのは困難であるが、遺構の切り合い関係から少なくとも023SD掘削以前である。井戸跡

向は東南東-西北西で013SMと平行する。013SMで指摘したような何らかの関係が推測される。出土遺物には山茶碗と貝類がある。013SMと時期的にも近いと考えれば、出土した土器・陶磁器はすべて混入である。貝類について、詳細は自然化学分析の章で報告されるが、最も多いのはシオフキ、ついでハマグリでこの2種類で9割以上を占めている。生活残滓を廃棄したように推測される。

#### 焼土集積遺構

019SU-1～10：一連の焼土塊群で、e3・f3・g3区にかけて広く分布する。焼土塊の中にはかなり分厚く、スサやコマイの痕跡を残すものもみられる事から(図版第31下・第44下)、建物の土壁が火災などによって被熱したものである可能性が高い。

#### B II層下面の遺構

##### 堅穴建物跡

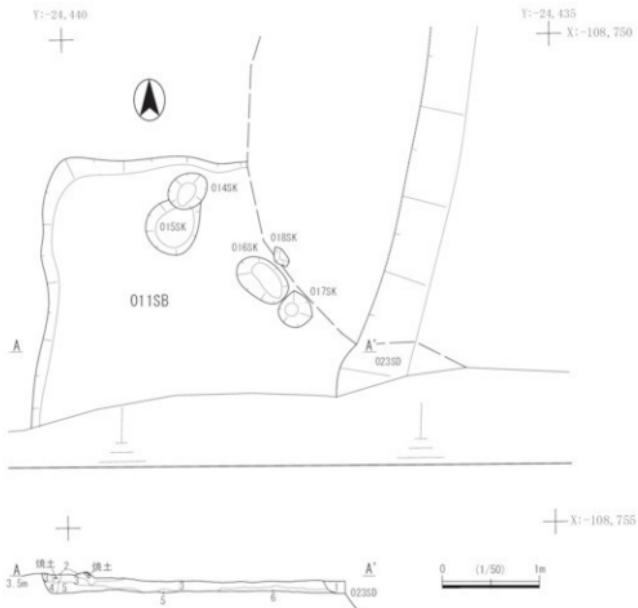
011SB : 3地点南辺のf3・g3区に位置する。ほぼ正方形のプランを呈する堅穴建物跡と考えられる(第29図、図版第32)。遺構の東側を搅乱と023SDに切られており、また南辺は調査区外である。東西3.32m、南北2.79mで深さは26cmである。断面形は箱形を呈する。遺構は基盤層であるにぶい黄褐色砂層に構築され、埋土は6層に分けられる。この内3層までが遺構が埋没する過程の堆積土である。この中に焼土が含まれていることから、焼土は流れ込みであることがわかる。4の暗褐色中粒砂層はシルトを含みやや粘土質で締まる。木質の痕跡と考えられ壁材や床の柱材の痕跡ではないかと考えられる。5・6はブロック土を含み、人為的に置いた土であろう。ただし、締まっていないので貼り床の土とは断定しがたい。

この遺構の底面から5基の小土坑014～018SKを確認した。このうち017SKは柱穴での掘方、018SKは柱の抜き取り穴である可能性が高い。するとこの堅穴建物は主柱2本である可能性が高い。

II層上面で検出し掘り下げたが、北セクションでもわかるようにこのあたりは地山が高くなっている、本来II層下面で検出されるべき遺構がII層上面で検出されている。それはまた011SBが023SDに切られている事実からも011SBは本来II層下面の遺構とすべきことが明らかである。

なお出土遺物には弥生土器、中世土師器、山茶碗がある。いずれも小破片であり、時期を決定する根拠としては難しい。

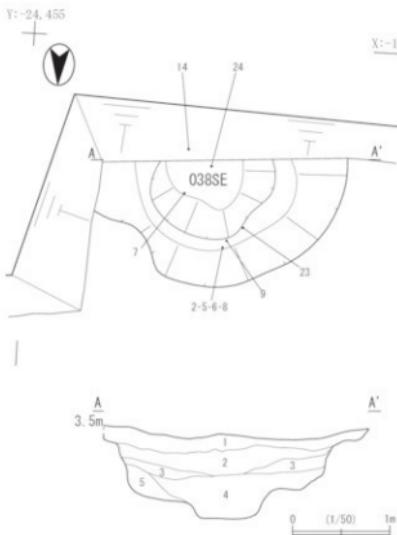
以上から011SBは、方形で主柱2本の堅穴建物であると考えられた。それは、遺物から所属時期を決めるのは困難であるが、遺構の切り合い関係から少なくとも023SD掘削以前である。井戸跡



- 1 2.5Y3/1黒褐色中粒砂(023SD埋土。10R5/8赤色練土粒を微量含む)
- 2 7.SYR3/3黒暗褐色中粒砂(2.5YR4/6赤褐色練土粒を含む)
- 3 10YR3/1黒褐色中粒砂(10YR4/2灰褐色砂を少量含む)
- 4 10YR3/3暗褐色中粒砂(粘土質が強い)シルト含む。ややしまる)
- 5 10YR3/1黒褐色中粒砂(7.5YR5/6暗褐色粘土質シルトを微量含む。10R6/1褐色灰色砂を含む)
- 6 2.5YR8/4淡黄色中粒砂と10YR3/1黒褐色中粒砂の斑土

第29図 畑間遺跡 011SB 平面図・断面図(1/50)

038SE : 4 地点南辺、d3 区に位置する井戸跡である(第30図、図版第33)。調査区の範囲には北半のみで、南半は調査区外である。平面形はほぼ円形であり、半円状に遺構を掘削した。東西 2.66m、南北 1.3m を計る。この遺構の底面は直径 77cm の円形で、深さ 18cm ほどさらに深く掘りくぼめている。この部分は本来井戸枠が据えられていた部分と考えられる。したがって断面形は2段落ちの箱形であるが、1段目の底面までの深さは 73cm、2段目の底面までは 91cm である。基盤砂層下のシルト層まで掘り抜かれており、砂層とシルト層の境が湧水点である。埋土は5層に分かれるが、1層は最終段階の埋土、堆積状況から2~4層は井戸枠抜き取り時の埋土である。シルトブロックを多く含むのは、もともと井戸を掘削して掘りあげた土で、井戸掘り方の埋土であったものが、抜き取りの際に再度井戸の中に堆積したためである。5層はシルトブロックの量が少ないが、2~4層に切られていることからもともとの井戸の掘り方埋土である。井戸枠については抜き取られてないので形状等よくわからない。なお 038SE の東側には本体プランより浅く帯状に延びる掘り込みが見られるが、この上には掘り方埋土の残存層が堆積しており井戸の掘削時の痕跡であると考えられる。



- 1 7.5YR3/3黒褐色中粒砂と7.5YR2/2黒色砂の斑土  
(7.5YR8/2のシルトブロックを少し含む)
- 2 7.5YR3/2黒褐色中粒砂と7.5YR7/1明褐色中粒砂の斑土  
(7.5YR8/2のシルトブロックを多く含む)
- 3 7.5YR4/1黒褐色中粒砂と7.5YR2/1黒褐色中粒砂の斑土  
(7.5YR8/2のシルトブロックを多く含む)
- 4 7.5YR1.7/1 黒色中粒砂  
(7.5YR8/2のシルトブロックを含む)
- 5 7.5YR1.7/1 黒色中粒砂  
(7.5YR2/2のシルトブロックを少し含む)

第30図 煙間遺跡 038SE 平面図・断面図(1/50)

そして西に向かって4mほどの地点、g2区で消滅する。その状況から洪水砂層022NRによって削られた可能性が高い。南側については調査区外へさらに延びる。断面形状はU字状または逆台形で、基盤層である砂層に掘り込まれている。幅1.59m、深さ40cmである。屈曲部周辺の底部には植物遺体の堆積が薄くみられるが、流水の痕跡となるような砂の堆積は認められなかつた。したがって滯水はしていたが、水流はなかったようである。また、西岸の一部に杭が打ち込まれた痕跡がみられ、護岸または何らかの施設が設けられていた可能性もある。

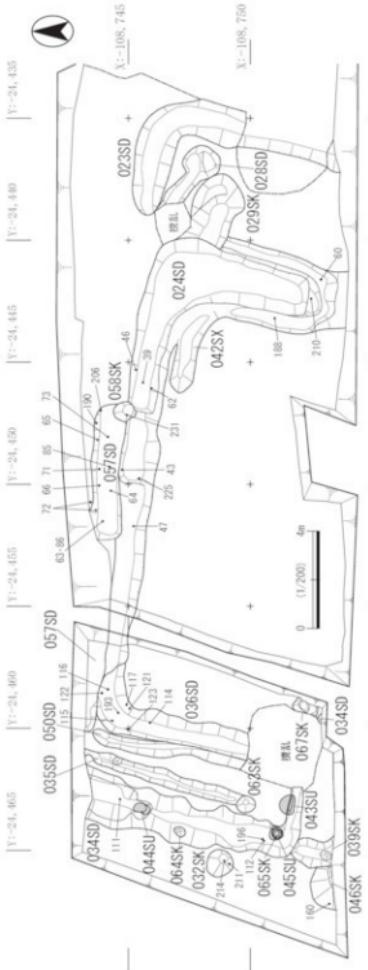
出土遺物には弥生土器、須恵器、灰釉陶器、中世土師器、瓦質土器、山茶碗、常滑、瀬戸美濃がある。時期を明確に示す資料に乏しいが、中野編年6a型式や藤澤編年第8型式を示す山茶碗も小破片ながら存在するので、後述する024SDより新しい様相である。そして最終的な遺構プランの検討と出土遺物の時期から、023SDは区画を示す溝で、次に述べる024SDが東側に約5m拡張されたものと考えられる。

**024SD・042SX：** 024SDは3地点・4地点の中央、c1・e2・d1・d2・e1・e2・f2・f3区に位置するL字状に曲がる溝である。042SXはその西側に溝に沿って走る犬走り状の遺構である(第31図、図版第26・27)。024SDはf3区南端から、北北東-南南西の方向に延び、f2・g2区において

出土遺物には弥生土器、土師器、中世土師器、綠釉陶器、山茶碗、常滑、瀬戸美濃が出土している。特に綠釉陶器火舎香炉の一部が出土していることは特筆される。この破片はほかに024SDと3地点の包含層から出土しており、それらは接合した。このほか土器は地元の古窯で生産された山茶碗の碗や小皿が主体であるが、型式的には中野編年の2型式から4型式までと時間幅が広いことが特徴である。ただし、5型式や6a型式の碗や小皿も出土しているが、埋土1層出土であり、混入の可能性が高い。遺構の時期はしたがって、12世紀後半から13世紀の第1四半期であり、12世紀後半に掘削・構築され、13世紀第1四半期に廃棄されたと考えることができよう。

#### 溝

**023SD：** 3地点のほぼ中央、g2・g3・h2・h3区に位置するL字状に曲がる溝である。g3区では搅乱に切られる(第31図、図版第26)。g2・g3区では南南西-北北東方向に向かう溝であるが、g2・h2区の境界あたりから90度向きを変え西北西に向かう。



第31図 煙問遺跡・023SD・024SD・024SK・025SD・034SD・034SK・035SD・036SD・036SK・037SD・038SD・039SD・044SD・044SK・045SD・046SK・047SK・048SK・049SK・050SD・051SD・052SD・053SD・054SD・055SD・056SD・057SD・058SD・059SD・060SD・061SD・062SD・063SD・064SD・065SD・066SD・067SD・068SD・069SD・070SD・071SD・072SD・073SD・074SD・075SD・076SD・077SD・078SD・079SD・080SD・081SD・082SD・083SD・084SD・085SD・086SD・087SD・088SD・089SD・090SD・091SD・092SD・093SD・094SD・095SD・096SD・097SD・098SD・099SD・0100SD・0101SD・0102SD・0103SD・0104SD・0105SD・0106SD・0107SD・0108SD・0109SD・0110SD・0111SD・0112SD・0113SD・0114SD・0115SD・0116SD・0117SD・0118SD・0119SD・0120SD・0121SD・0122SD・0123SD・0124SD・0125SD・0126SD・0127SD・0128SD・0129SD・0130SD・0131SD・0132SD・0133SD・0134SD・0135SD・0136SD・0137SD・0138SD・0139SD・0140SD・0141SD・0142SD・0143SD・0144SD・0145SD・0146SD・0147SD・0148SD・0149SD・0150SD・0151SD・0152SD・0153SD・0154SD・0155SD・0156SD・0157SD・0158SD・0159SD・0160SD・0161SD・0162SD・0163SD・0164SD・0165SD・0166SD・0167SD・0168SD・0169SD・0170SD・0171SD・0172SD・0173SD・0174SD・0175SD・0176SD・0177SD・0178SD・0179SD・0180SD・0181SD・0182SD・0183SD・0184SD・0185SD・0186SD・0187SD・0188SD・0189SD・0190SD・0191SD・0192SD・0193SD・0194SD・0195SD・0196SD・0197SD・0198SD・0199SD・0200SD



第32図 煙問遺跡044SD遺物出土位置図 (1/50)  
(トマコは044SDの範囲を示す。)

第33図 東細遺跡043SU・045SU遺物出土位置図 (1/50)  
(トマコは043SU・045SUの範囲を示す。)

てほぼ直角に屈曲し、西南西・東南東の方向に直線的に延びる。そしてe1区において036SDと接続する。幅は最大で3.13mあるが、平均的な幅は2m前後で、断面形状は逆台形または箱形である。ちょうど調査区f3区の南端に溝の開始部分が有り、3段の階段状に掘り上げられていた。溝は基本的に遺跡の存在する砂堆の基盤層まで掘り抜かれているが、北東の角部分が最深で、砂層より更に下位に存在するシルト層をほぼ垂直に掘り込まれている。深さは約80cmを計る。これより西側については、北東の角から西に6mのe1区で1段、e1・d1区の境界でもう1段と階段状に約30cm浅くなつて西に延びている。また北東部周辺の区画内側には、042SXとしたが幅約50cm以下の犬走り状の狭い段状地形が造り出されている。このほかに柱穴や土坑などが認められず、溝に付属する柵や塀など遮蔽物の痕跡については見付けられなかった。なお、この024SDの東北隅の最深部には、溝の掘削直後よりかなりの時間滞水していたようで、泥炭層が堆積していた。この泥炭層には多くの植物遺体や自然木、木製品の残欠が含まれていた。昆虫化石も多数見られたため、分析用にサンプリングを行っている。

明らかに北側に展開していく溝057SDとは切り合っており、024SDは057SDに切られている。また溝036SDは、発掘の便宜上分離しておいたが、同一区画の西辺を画する溝で024SDとは一連の溝と考えられる。また、後述するが021SM・025SM・026SM・027SMといった4基の地点貝塚は、この024SDが埋没する過程で形成された貝塚である。

出土遺物には弥生土器、土師器、須恵器、中世土師器、瓦質土器、山茶碗、常滑、瀬戸美濃、青磁がある。また、被熱した人頭大の礫もまとまって出土している。平坦な面を持つ礫であることから礫石に使用された可能性がある。被熱痕はそうした場合、火災によるものと考えることも可能である。遺物の時期は12世紀後半から15世紀後半まであり、量的に多数を占めるのは12世紀後半から13世紀中葉の資料である。また13世紀中葉以降の遺物は上層から出土している。したがつて、溝が機能していたのは12世紀から13世紀中葉までであり、それ以降埋没したと考えられる。

**028SD**：3地点の中央、g2区に位置し、023SDと024SDの間隙に掘られた溝状の遺構である（第31図）。北西・南東方向にやや湾曲しつつ延びる遺構で、南東端は円形に収束する。円形部分からは犬の頭骨が発見されたが、埋葬されたような状況は看取できなかった。溝の北西端は、022NRによって消滅している。断面形は碗状で、幅は東南端が最大で1.49m、深さは最深で27cmを計る。出土遺物は山茶碗の破片が少量出土しているのみである。13世紀中葉以降の遺構であろうと推測される。

**034SD(043SU・044SU・045SU)**：溝034SDの報告であるが、溝の埋没の過程で土器集積遺構が形成されており、溝の時期を考える上で必要な情報となることから、ここでまとめて報告する（第31～34図、巻頭図版第3、図版第27・36下・37上）。034SDは4地点西辺に沿つて南北に展開する溝で、南端は東側に屈曲する。グリッドではa3・b1・b2・b3・c3区に位置する。b1区からb2区でやや東に振れるが南北方向に延び、a3・b3区の境界で直角に屈曲し東に向きを変える。北には調査区外へさらに延びる。また、東端については攪乱に切られるが、c3区で再び現れ、調査区外へ延びる。幅は最大2.12m、平均1.5m前後で、深さは最深で48cmである。断面形状は碗状を呈する。埋土上半には遺物集積が3か所見つかったほか中世遺物を多く含むが、下半には少ない。下半の埋土は粗砂が目立つことから、降雨や洪水などの理由で短期間に

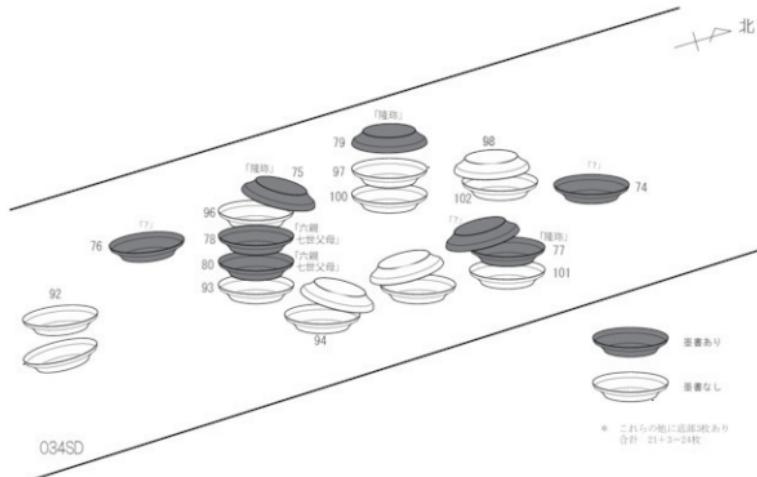
埋積された可能性も考えられる。溝の方向は北北東-南南西で、024SDなど隣接する他の溝遺構と同方向である。

次に土器集積遺構を順に説明する。

043SUはb3区034SDの北岸に形成された土器集積である。034SDが埋没する過程で形成された。東西85cm、南北64cmの範囲に広がる。瀬戸美濃の古瀬戸祖母懐壺や常滑の甕の破片、ロクロ調整土師器皿などがある。祖母懐壺は体部の破片のみで図化しなかつたが、およそ古瀬戸後期IV期のものである。そのほかもほぼこれに近い時期のものと見られる。したがって15世紀中葉の遺構と考えられる。土器はすべて破片であまり接合しない。破片を廃棄した遺構である。

044SUはb2区034SD中央に形成された土師器皿の土器集積である（第31・32・34図、巻頭図版第3、図版第27・36下）。034SDがほぼ埋没した段階で、土師器皿を少なくとも25枚近く用い、いくつかの山に重ね置き構築したものである。南北71cm、東西39cmの範囲に広がる。ほとんどの土師器皿はロクロ調整で極めて丁寧に仕上げられており、底面には糸切りの痕跡が顕著である。その底面に墨書きを持つものが多く、「隆珍」という人名と思われるもの他に、施餓鬼経からの供養文である「六親（眷属）・七世父母」が見られる。いくつかの山は数枚から5枚ほどのかわらけを積み置いたものだが、いちばん上のものは底を上にして蓋のように置かれており、中に何か供物が置かれていた可能性もある（第34図）。こうした状況から単なる土器集積遺構ではなく、まじないなどの祭祀遺構と考える必要がある。土師器皿のみの出土で、その形態からおよそ15世紀後半から16世紀の所産と見られる。

045SUはb3区の034SDの屈曲部分の内側に位置する土器集積である。これも溝の埋積が進んでから形成された遺構である（第31・33図、図版第37上）。径61cmの範囲に広がる。特徴的な遺物としては、常滑の壺口縁部、瀬戸美濃の平碗・卸皿・甕・桶、ロクロ調整土師器皿などがあるが、とりわけ赤色に発色した土師器皿が含まれる。常滑の壺（103）は16世紀後半のもの



第34図 番間遺跡 044SU 土師器皿集積遺構の構造（模式図）

のとされる。おおよそ15世紀中葉から16世紀の時期にまとまっている。

ほか034SDの出土遺物には弥生土器、土師器、須恵器、中世土師器、瓦質土器、山茶碗、常滑、瀬戸美濃、青磁がある。土器集積遺構の遺物も含め遺物の時期は概ね13世紀中葉から16世紀後半のものであるが、土器集積遺構が形成されかつ遺物量が多いのは15世紀中葉から後半である。先述の024SDよりも新しい様相で、023SDと併行する可能性が高い。13世紀中葉から14世紀の遺物は少なく小破片で、混入したものかどうか判断が付かない。したがって掘削の時期を特定することは難しい。少なくとも15世紀中葉には機能しており、15世紀後半あるいは16世紀後半に埋没したと考えることができる。

035SD：4地点西区中央、b1・b2区に位置する溝である（第31図、図版第27）。北北東-南南西方向の溝である。034SDの東側にほぼ平行して走る細い溝であるが、034SDよりも東に振る。北は調査区北壁でほぼ取束にする。南は063SKに切られ、その先に続かない。断面形は浅い皿状を呈し、幅約60cm、深さわずかに10cm前後である。出土遺物はない。溝の方向から考えれば、024SDや034SDとは異なり、023SDや057SDに近い。これらと関係する遺構と考えたい。

036SD：4地点西区中央、b1・b2・c1・c2区に位置する溝で、北北東-南南西方向の溝である（第31図、図版第27）。先述したように024SDと接続し、それと一連の遺構である可能性が高い。その場合方形区画の西辺を画する溝である。南端は搅乱によって消滅しているが、その先に続かず、調査区南辺方向には貫通しないようである。断面形は逆台形を呈し、幅1.12m、深さ46cmを計る。

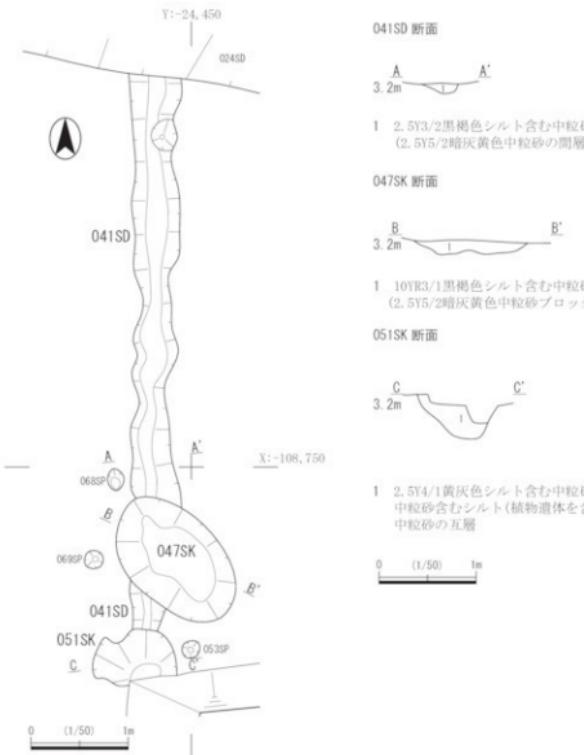
出土遺物には弥生土器、中世土師器、瓦質土器、山茶碗がある。多数を占めるのは13世紀前半から中葉のものであり、遺構の時期もその時期である。

041SD：4地点東区中央、d2・d3区に位置する溝で、ほぼ正南北方向の溝である（第35図、図版第37上）。断面形は碗状を呈する。埋土には流水の痕跡はなく、自然埋没であることを示す。この溝は南側で047SK、051SKに切られる。他の遺構が真北に対して東に20度ほどの傾きをみせるのに対し、この溝は正南北方向に直線的に延びているのが特徴である。また、この溝の東西で面の標高が異なる。西側が東側に比べ5cm高い。

出土遺物には弥生土器と山茶碗がある。山茶碗は小破片ばかりであるが、中野編年の3型式から4型式が主のようである。時期を明確に示す遺物に恵まれないが、遺構の切り合いから考えても古い段階の遺構であると推測される。

050SD：4地点西区中央、b1・b2区に位置する溝で、北北東-南南西方向の溝である（第31図、図版第27）。035SDの西側にほぼ平行する細い溝であるが、035SDほど東に振れない。むしろ034SDに方向は近く、これとの関連を考えたい。断面は浅い皿状を呈し、幅62cm、深さ28cmを計る。先述の035SDと規模は近似している。036SDを切る。出土遺物はない。したがって遺構から時期を推測することになるが、先に指摘したように034SDと関連が指摘できることから034SDと近い時期が推測される。

057SD：4地点調査区北辺、b1・c1・d1・e1区に位置する溝で、西北西-東南東方向の溝である。断面は逆台形を呈し、幅1.32mを計る。上部は洪水砂層022NRに切られてよくわからない。024SDの地山のシルト層を掘り抜いた部分の終点の北隣から始まり直線的に西に延びる。この溝も東端から6m西の地点、d1区までは溝の最深部にあたりシルト層まで掘り込まれている。



第35図 煙問遺跡041SD・047SK・051SK平面図・断面図(1/50)

残存する深さ21cmである。それより西は20cmほどの段差で溝の底面が高くなっている。このような段差を有する溝の底面は024SDと共に通するが、この理由についてはよくわからない。なお、ここでの調査は当初057SDの一部を024SD上層として掘削してしまっている。最終段階になつて024SDと重なっていることが判明し、別の遺構として捉えなおした。

出土遺物について、中世土師器、山茶碗が出土している。12世紀後半から15世紀後半のものまである。024SDからの混入もあろうが、15世紀後半の遺物など024SDよりも新しい時期の遺物が含まれている。また057SDは023SDの西に向かう延長線上に位置し、方向もほぼ共通であることから一連の溝である可能性が高いと考えられる。このように考えた場合057SDは024SDを北に拡張した区画溝ととらえることができる。遺構の時期も024SDよりも新しい時期で023SDと同時期と考えて、13世紀後半以降の掘削で、15世紀後半ごろの埋没を考えたい。

070SD:4 地点調査区北辺に短く残る南北溝である。f1区に位置する。断面形は浅い皿状を呈し、幅35cm、深さ15cmを計る。北には調査区外にさらに延びるが、南については022NRに切られで続かない。自然埋没した遺構である。出土遺物はない。調査できた範囲が断片的で遺構の性

格や時期等についてはよくわからない。

#### 洪水砂層

022NR : 3 地点ほぼ中央から 4 地点北辺にかけてみられた流水堆積の砂層で当初は自然流路ととらえていた。しかし、當時流水があったような砂礫の堆積は認められず、一過性のものと考えられるようになり、最終的には洪水による堆積物と判断した。ただし、遺構の記号はそのままにしている。d1・e1・e2・f1・f2・g1・g2・h1・h2 区に広がり、幅 4.09m、厚さは 54cm を計る。023SD や 024SD のような下層に存在した溝を覆うように砂層が堆積しており、あるいはこの砂層に切られている。洪水の流れが低いところに狙って、東から西に向かって急激に流れたものと考えられた。また、この砂層に覆われた 022NR の北岸からは大中小の亀化石が一箇所からまとまって発見されているが、その様子は洪水砂によって一気に埋没したような状況であった。出土遺物には弥生土器、土師器、須恵器、中世土師器、山茶碗、常滑、瀬戸美濃、中国産陶器がある。これらは洪水時にあたりの遺物を巻き込んで再堆積したものである。洪水の時期を特定するような遺物は見つかっていない。ただし、層位的にはほとんどの遺構を覆う形で堆積しており、砂層の上に 013SM が形成されていることから 15 世紀後半か 16 世紀以降で近世以前の堆積と思われる。

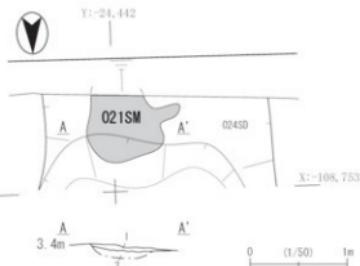
#### 地点貝塚

地点貝塚から出土した貝類の分析は自然科学分析の節で別途報告する（第 4 章第 3 節参照）。

021SM : 3 地点調査区の南端、f3 区に位置する小規模な地点貝塚である（第 36 図、図版第 36 上）。024SD 内にあり、024SD がある程度埋没した状態で遺構が形成された。東西 63cm、南北 72cm であるが、南は調査区外にさらに続く。断面形は浅い皿状を呈し、本来の貝層の厚さは 6cm である。その下に貝がまばらに混じる層があるが、これは 024SD の埋土に 021SM の貝が混入した部分である。この断面形から、021SM は人為的に掘削してきた遺構ではなく、貝類を廃棄して形成された遺構であることがわかる。

構成する貝類はシオフキが最も多く、全体の 4 割を占め、ついでハマグリ、アサリ、ヤマトシジミが多い。この 4 種でほぼ 9 割以上を占める。規模や形状、遺物の内容からすれば生活残滓の廃棄と考えられよう。ほか出土遺物には弥生土器と山茶碗の小片があるが、024SD からの混入の可能性がある。時期決定の証拠とはなりにくい。

025SM : 3 地点調査区の南西、f3 区に位置する小規模な地点貝塚である（図版第 36 上）。024SD 内にあり、024SD がある程度埋没した状態で遺構が形成された。東西 36cm、南北 17cm で平面形はいびつな楕円形を呈する。断面形は浅い皿状を呈し、本来の貝層の厚さは 4cm である。この断面形から、025SM は廃棄して形成された遺構であることがわかる。貝類についてはサンプルを採取しなかつたので詳細は不明であるが、他の地点貝塚と同様、シオフキ、ハマグリ、ア

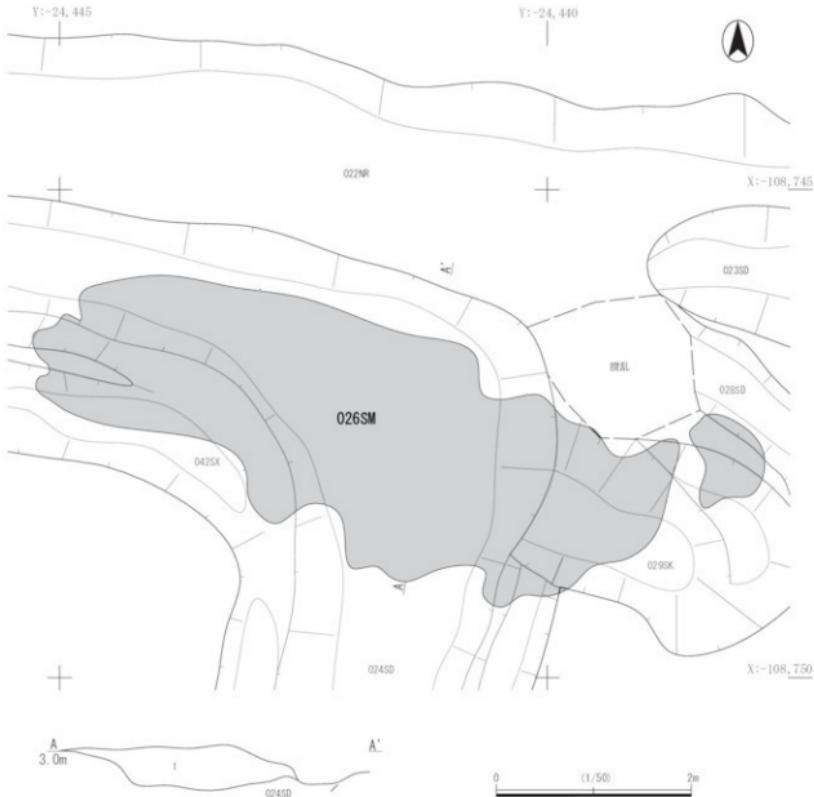


1 2. 5Y3/2 黒褐色中粒砂(シルト多く含む)。貝多く含む。  
粘性あり  
2 5Y2/1 黒褐色中粒砂(シルトを極微量含む)。貝少量含む。  
粘性弱い。024SD埋土)

第 36 図 畑間遺跡 021SM 平面図・断面図 (1/50)

サリ、ヤマトシジミが目に付いた。規模や形状、遺物の内容からすれば生活残滓の廃棄と考えられよう。ほか出土遺物はなく時期については遺物からは決められない。

026SM : 3地点調査区の西側中央、e2・f2・g2区に位置する比較的規模の大きい貝塚である（第37図、図版第34・第35）。024SDが半分ほど埋没したところで、その窪地を利用して廃棄されたと考えられる貝塚である。東西方向に帯状に広がり、長さ7.61m、幅2.53mを計る。中心部は純貝層で、最大層厚45cm以上を確認した。ブロックサンプリングを行い、構成する貝類の分析を行っている。その詳細は自然化学分析の章に譲るが、主体となる貝類はシオフキ、ハマグリ、アサリ、ヤマトシジミ、ウミニナ類であるが、これらが地点や層位ごとに偏る傾向があり、種類別に大量に処理し廃棄した可能性がある。また、貝類ばかりでなく、魚類の骨も出土している。こうした状況で、比較的短期で形成された貝塚を想定するならば、それは日常生活の残滓などというものではなく、もっと特別なにか大量生産する必要に迫られた事情を



1 純貝層 (026SM)

第37図 畑間遺跡 026SM 平面図・断面図 (1/50)

背景に考えるべきであろう。出土遺物には弥生土器、灰釉陶器、中世土師器、山茶碗、常滑、瀬戸美濃、白磁がある。遺物の時期から遺構の時期を考えると14世紀前半と考えられる。

027SM：3地点調査区の南端、f3区に位置する比較的規模の大きな地点貝塚である（図版第36上）。024SD内にあり、024SDがある程度埋没した状態で遺構が形成された。また、021SMより下位で検出しており、層位的にも021SMに先行する貝塚である。東西1.4m、南北2.65mであるが、南は調査区外にさらに続く。断面形は浅い皿状を呈し、本来の貝層の厚さは10cmほどである。この断面形から、027SMも貝類を廃棄して形成された遺構であることがわかる。貝類についてはサンプルを採取しなかったので詳細は不明であるが、他の地点貝塚と同様、シオフキ、ハマグリ、アサリ、ヤマトシジミが目に付いた。規模や形状、遺物の内容からすれば生活残滓の廃棄と考えられよう。ほか出土遺物は弥生土器、中世土師器、山茶碗、常滑がある。1点実測図を掲載したが（図版第13の152）、024SDからの混入の可能性がある。時期決定の証拠とはなりにくい。

#### 土坑

029SK：3地点調査区の中央、g2区に位置する土坑である（第31図）。024SDの北東角の外側に重複する不整形な土坑で長径3.01m、短径2.05mを計る。断面は擂鉢状を呈し、深さは56cmである。024SDとの切り合は認められず、埋土は共通なので、同時に存在した遺構で、ほぼ同時に埋没した遺構と考えられる。出土遺物には灰釉陶器、山茶碗、常滑がある。遺物の時期は12世紀後半から13世紀中葉であり、024SDの時期と近い。遺構の性格については024SDと関係すると考えられるが、それ以上はよくわからない。

031SK：4地点西南隅のa3区で検出された小規模な土坑である（第26図）。調査区西端であるこの辺りの基盤層の標高は3.4m前後であるが、024SDで区画された部分より20cm以上高い。平面形はややいびつな楕円形を呈し、長径83cm、短径59cmを計る。断面形は碗状を呈するが、深さは16cmである。出土遺物には連珠文の軒平瓦や三巴文の軒丸瓦など、14世紀から15世紀前葉の遺物を多く含む。なお、周辺にも同時期の遺物が多く分布していた。

032SK：4地点西端のa2区に位置する土坑である（第31図）。平面形は円形を呈し、長径1.13m、短径1.1mである。基盤砂層に掘り込まれている遺構で、断面形は擂鉢状を呈し、深さは26cmである。中世土師器や山茶碗のほか、石鑓やチャート製の敲石、両刃石斧など弥生時代の遺物も多く出土している。

033SK：4地点東区西南隅、e3区に位置する土坑である（第26図）。平面形は直径20～30cmのほぼ円形を呈するが、断面形はU字状で、深さは36cmもある。柱穴であった可能性もある。出土遺物には知多窯産山茶碗の破片がある。資料に乏しく時期は限定できない。

039SK：4地区南西隅近く、034SDの延長線上に位置する土坑だが、南側の未調査区に溝状に展開する可能性もある（第31図）。中央部にピット状の掘り込みがあるが、性格は不明である。南北1.81mで、南にさらに延びる。東西1.16mで深さ41cmを計る。断面形は擂鉢状を呈するが、中央にピットがあるので2段落ちになる。出土遺物には弥生土器、中世土師器、山茶碗、常滑、瀬戸美濃、製塙土器が出土している。このうち瀬戸美濃の卸皿1点は045SUの卸皿と接合した。この卸皿は古瀬戸後IV期古段階のものである。山茶碗はこれより古く、藤沢編年の尾張型第6型式から第8型式までである。したがって遺構の時期は瀬戸美濃の卸皿の時期に近づけて考え

て、15世紀中葉としておきたい。

046SK：4地点西区北東隅、c2区に位置する土坑である（第31図）。平面形はややいびつな円形を呈し、長径2.03m、短径1.92mである。断面形は播鉢状を呈し、深さは38cmである。出土遺物はない。遺構の時期、性格ともよくわからない。

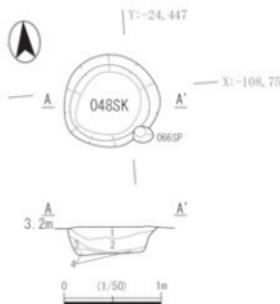
046SK：4地点西区南西隅に位置する土坑である（第31図）。039SKに東側が切られ、また遺構の南辺については調査区外である。東西1.84m、南北0.95mを計る。播鉢状の断面形状を呈し深さは43cmである。南側に展開する溝状遺構の一部である可能性もある。

出土遺物には中世土器、山茶碗、常滑、瀬戸美濃がある。12世紀後半から15世紀中葉の時期のものである。部分的な発掘で断定できないが、遺構も掘削から埋没までがその期間である可能性がある。

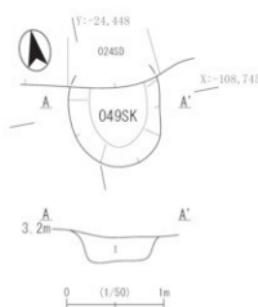
047SK：4地点東区南辺、d2・d3区に位置する土坑である（第35図）。041SD南端を切っている。平面形楕円形の土坑で、長径は1.34m、短径は0.93mを計る。断面形は浅い皿状を呈し、深さ18cmである。出土遺物には山茶碗がある。12世紀第4四半期のものであるが、041SDからの混入の可能性もある。遺構の底面は一定ではなく、立ち上がりもゆるやかであることから、人為的な掘削の痕跡を見出していく。木の根の痕跡の可能性がある。

048SK：4地点東区東辺、e2・e3区に位置する土坑である（第35図、図版第37）。直径1m弱、深さ31cmの円形土坑で、断面形状は箱形である。埋土は自然埋没を示している。出土遺物には弥生土器と山茶碗がある。山茶碗は13世紀第1四半期のものであり、その時期の遺構と考えられる。廃棄土坑か、あるいはさほど深い土坑ではないが、湧水点レベルには達しており、小規模な水溜めとして利用されていた可能性もある。

049SK：4地点東区東辺、e2区に位置する土坑である（第39図、図版第37）。直径93cm、深さ



- 1 2.5YR2/1黒褐色中粒砂  
(2.5YR6/2明褐色中粒砂を少し含む)
- 2 10YR1.7/1黒色中粒砂と2.5YR6/2明褐色中粒砂  
の互層(しまってない)  
泥炭含む)
- 3 2.5YR5/3 黄褐色中粒砂  
(しまってない) 色は地山よりやや暗い)
- 4 10YR1.7/1黒色中粒砂と2.5YR6/2の斑土  
(しまってない)



- 1 10YR4/2灰黄褐色中粒砂と  
10YR2/2黒褐色中粒砂の互層  
(しまってない)

第39図 番間遺跡049SK平面図・  
断面図(1/50)

第38図 番間遺跡048SK平面図・断面図(1/50)

33cm の円形土坑で断面は箱形である。北側は024SDによって切られている。埋土は自然埋没を示している。出土遺物はない。規模や形状、出土遺物がほとんどない点は048SKに類似する。遺構の性格が近似しているのか、または何らかの関連が想定される。時期は048SKに近い時期が想定できよう。

051SK：4地点東区南端、d3区に位置する土坑である。041SDを切る小規模な土坑で、不整形なプランを呈する（第35図）。南辺は調査区外である。長径 85cm、深さ 45cm で断面形は逆台形を呈する。埋土は自然埋没を示し、出土遺物はない。時期や性格についてはよくわからない。

052SK：4地点東区西端、c2区に位置する土坑である（第26図）。浅い楕円形の土坑で、埋土に少量の貝層を含む。長径 67cm 以上、短径 63cm、深さ 15cm で断面浅い皿状を呈する。出土遺物には山茶碗が少量ある。13世紀第1四半期のものであり、遺構もその時期のものである。廃棄土坑の可能性がある。

055SK：4地点東区南西隅、c3区に位置する小土坑である（第26図）。南半は調査区外にある。平面形はおそらく楕円形、断面形浅い皿状を呈する。長径 62cm、深さ 13cm である。出土遺物はない。出土遺物には山茶碗が少量あるが、時期を明確にできるほどの資料ではない。時期や性格についてはよくわからない。

056SK：4地点東区西辺、c3・d3区に位置する小土坑である（第26図）。平面形は長細い不整形をしており、断面形は浅い皿状を呈する。長さ 1.69m、幅 0.61m、深さ 13cm である。出土遺物には山茶碗が少量あるが、時期を明確にできるほどの資料ではない。

058SK：4地点東区、e1・e2区に位置する土坑である。024SDの深掘り部分の終点北側に付随するように存在する円形の土坑である（第31図・図版第37）。直径 90cm 前後、深さ 29cm で、断面碗状を呈する。埋土は024SDと続いている、同時に埋没したと考えられる。底面標高はシルト層を掘り抜いた底面より 10cm 前後高く、溝とは別遺構である可能性が高い。木製品でたたりの未製品が出土した。こうした木材の水漬けの遺構である可能性がある。そのほかの出土遺物はない。埋土の状況から024SDと特に時期差はないと考えられる。

059SK：4地点西区、a3区に位置する小土坑である（第26図）。平面形は楕円形で断面形は碗状を呈する。長径 64cm、短径 35cm、深さ 28cm である。出土遺物はない。時期や性格についてはよくわからない。

060SK：4地点西区、a2・a3区に位置する土坑である（第26図）。直径 55cm 前後の円形土坑で、断面形は碗状、深さ 30cm である。一部を034SDによって切られている。出土遺物はない。時期や性格についてはよくわからない。

061SK：4地点西区、c2・c3区に位置する土坑である（第26図）。036SDから東側に分岐したように曲がる溝状の遺構で、南端は搅乱に切られている。断面形は皿状である。長さ 2.48m が残り、幅は 1.02m で深さ 34cm である。出土遺物はない。時期や性格についてはよくわからない。

062SK：4地点西区、c2区に位置し、061SKに隣接する小土坑である（第26図）。直径 50cm 前後の円形土坑で、断面形は碗状、深さ 25cm である。出土遺物はない。時期や性格についてはよくわからない。

063SK：4地点西区、b2・b3区に位置する土坑である（第26図）。035SD 南端を切る。直径 70cm 前後の円形土坑で、深さは 29cm、擂鉢状の断面形状を呈する。出土遺物はない。時期や

性格についてはよくわからない。

064SK：4地点西区、b2区に位置し、034SDの西側斜面にある小土坑である（第26図）。平面形はややいびつな円形を呈し、長径50cm、短径38cmを計る。断面形は碗状を呈し深さは27cmである。出土遺物はない。時期や性格についてはよくわからない。

065SK：4地点西区、b3区に位置し、045SUの真下に存在した小土坑である（第31図）。直径約70cmの円形の土坑で、断面形は浅い皿状、深さは034SD底面より18cmである。しかし、045SUとひとつつの土坑を構成する可能性もある。その場合、周辺の地山面から掘り込まれることになり、その深さは約35cmとなる。065SKを認識し掘り下げた限りでは、出土遺物はない。時期や性格についてはよくわからない。

067SK：4地点西区東南隅のc3区に位置し、中心となるプランを搅乱に切られており、036SDか034SDのどちらと関連するのかは遺構ではよくわからない（第31図）。残存する長さ35cm、幅35cm、深さ15cmで断面形は碗状である。いずれかの溝の一部であるとしても、これより東側には連続しないので、土坑として収束する可能性も残されている。

出土遺物には中世土師器、山茶碗、常滑がある。東濃型山茶碗が出土しており、その時期は藤澤編年の第7～第8型式で13世紀中葉から後葉のものである。ほか、遺物は小破片で時期決定の難しい資料であり、とりあえずこの時期としておきたい。  
（坂野）

### 第3節 出土遺物（巻頭図版第4、図版第7～18・第43～47）

出土遺物はコンテナにして40箱出土した。その内訳は、弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、山茶碗、縁軸陶器、常滑、瀬戸美濃、白磁、青磁、中国陶器、製塙土器などの土器・陶磁器、瓦類、土錘、陶丸、加工円盤などの土製品、石鐵、石錐、石斧、敲石、礫石錐、砥石、輕石、石鍋などの石器・石製品、錢貨、鉄釘などの鉄製品、木球、板材、折敷底板、柄、たたり未製品などの木製品である。遺物の時期は中世の土器・陶磁器、瓦などの土製品が最も多く、全体の9割を超える。この時期の遺物は遺構に伴うものも多い。しかし、弥生土器、古代の土師器・須恵器、灰釉陶器はまったく少数であるが中世の遺構に混入して出土している。遺構出

第2表 番間遺跡3・4地点における遺構出土土器・陶磁器の組成

種類	弥生 土器	土師器	須恵器	灰軸 陶器	縁軸 陶器	中世 土器	瓦質 土器	山茶碗	常滑	瀬戸 美濃	白磁	青磁	中国 陶器	合計
破片数	339	15	31	3	1	519	12	3426	583	71	1	5	1	5007
	339	15	31	3						4619				5007
比率	6.8%	0.3%	0.6%	0.1%						92.3%				100.0%

第3表 番間遺跡3・4地点における遺構出土中世土器・陶磁器の組成

種類	中世 土師器	瓦質土器	縁軸陶器	山茶碗	常滑	瀬戸美濃	白磁	青磁	中国陶器	合計
破片数	519	12	1	3426	583	71	1	5	1	4619
比率	11.2%	0.3%	0.0%	74.2%	12.6%	1.5%	0.0%	0.1%	0.0%	100.0%

土の土器・陶磁器について集計した結果は、第2表および第3表とのおりである。遺構出土土器・陶磁器の9割以上を占める中世の土器・陶磁器に限ってみれば、山茶碗が最も多く74%を占め、ついで常滑の12.6%、中世土師器の11.2%である。白磁・青磁は合わせても1%に満たず、特に目立つわけではない。こうした組成を見た場合、それほど特殊とはいえず、通有の中世の遺跡である。しかし、瓦の出土量は多く、正確に数えていないが、コンテナにして6箱出土しており、特徴的である。以下、遺物の種別、時代別に報告するが、東畠遺跡出土遺物の報告時と同様に整理を進めた。弥生土器や古代の土師器・須恵器・灰釉陶器も主要なものは報告する。また、自然遺物については、自然科学分析の章で一括して報告する（第4章第3節参照）。

#### A 中世の土器・陶磁器

**038SE 出土土器・陶磁器：**山茶碗の小皿（1～12）、碗（13～22）、輪花碗（23）、緑釉陶器火舎香炉（24）、常滑壺（25）、常滑擂鉢（26）が出土している。

1～12は山茶碗の小皿である。すべて知多窯産である。1は中野編年の2型式、3～8は3型式、9は4型式、10と11は5型式、12は6a型式である。13～22は山茶碗の碗である。これもすべて知多窯産である。21・22が中野編年の2型式、13・14と17～20は3型式、15・16は4型式である。23は輪花碗である。高台は付高台で断面三角形状を呈する。知多窯産であるが胎土が良い。藤澤編年で第4型式である。24は緑釉陶器の火舎香炉である。尾野善裕氏のご教示によれば、ロクロの回転方向は右回転で、胎土は山茶碗の胎土に酷似しているので、まずは日本で生産された陶器であり、そして猿投あるいはその周辺で製作された可能性が高い。また、緑釉は斑があるがこれは釉薬が十分に磨れていないためであり、12世紀の緑釉陶器生産の終末期にはこのような特徴がでてくるとのこと。また、山本信夫氏からは、12世紀の中国産の緑釉陶器であれば、黒色粒子等が胎土に含まれるが、そうしたもののが一切含まれていないので中国産ではないとご教示を得た。以上のようなことからこの遺構の時期に猿投あるいはその周辺で生産された緑釉陶器の火舎香炉として報告する。3点の破片の接合資料であり、038SEのほか、024SD下層と3地点の包含層から出土した。したがって038SEと024SDの同時存在を示す資料でもある。口縁は鈙部からの粘土が折り返されて作り出されている。短く立ち上がる。また、体部下位には沈線が2条めぐる。1か所粘土が剥がれた痕跡が認められるが、脚の痕跡であろう。25は常滑の壺の口縁部である。三筋壺の可能性がある。中野編年の3型式である。26は常滑の擂鉢である。内面にはかなり細い櫛状工具により19条単位の擂目が付けられている。使用により内面がよく摩滅している。中野編年の7型式である。

038SEから出土した遺物の時期は中野編年の2型式から7型式になる。しかし、6a型式の12の資料は出土レベルが高く、あるいは4型式の3の資料も上層から出土している。おそらく最終の埋没時期を示す資料になると考えられる。一方、2型式・3型式の資料は遺構の下層や底面近くからの出土が多く、井戸の機能時や廃絶時を示す資料となろう。

**023SD 出土土器・陶磁器：**瀬戸美濃の卸皿（27）と常滑の三筋壺（28）が出土している。27は古瀬戸卸皿の底部である。内面には卸目が格子状に付けられている。内外面とも露胎である。28は常滑三筋壺の体部下半から底部である。体部中位には3条の沈線がめぐる。これには013SMから出土した体部片が接合した。中野編年の2型式である。

023SDからはこのほか山茶碗の碗が出土しており、その中には中野編年の6a型式の知多窯

産山茶碗や藤澤編年の尾張型第8型式の瀬戸窯産山茶碗の破片が含まれている。したがって出土遺物の時期は12世紀から13世紀後半を中心とする時期が考えられる。

**024SD・057SD 出土土器・陶磁器:** 4地点の調査では057SDの一部を024SDとして掘り下げており、024SD上層として取り上げた遺物がある。地点を記録して取り上げた遺物については見直して057SD出土のものを分けた。こうした経緯からここでは併せて報告する。

024SD出土遺物には中世土師器の皿(29~32)、羽釜(53)、山茶碗の小皿(33~42・84)、碗(43~52)、常滑の鉢(56)、盤(57)、羽釜(58)、広口瓶(59)、壺(60)、甕(61・62)、瀬戸美濃の四耳壺(55)、青磁の碗(54)がある。

29~32は土師器の非ロクロ調整皿である。いずれも024SDの下層から出土している。33~42・84は山茶碗の小皿である。38と84の底部外面には墨書痕がある。42と84が瀬戸窯産で、あとはすべて知多窯産である。33は中野編年の4型式、34は5型式、35~41は6a型式である。42は藤澤編年の尾張型第6型式、84は尾張型第7型式である。39・42は024SD上層出土、これ以外は下層出土である。43~52は山茶碗の碗である。43~47は知多窯産、48~51は瀬戸窯産、52は東濃型である。43~45は中野編年の4型式、46・47は6a型式、48~51は藤澤編年の尾張型第7型式、52は藤澤編年の東濃型第10型式、大洞東1号窯式である。43・44・46・47・52は024SD上層出土、これ以外は下層出土である。53は土師器の羽釜の口縁部から体部である。口縁部はやや内傾しつつ上方に立ち上がる。口縁端部は外に若干拡張される。北村編年の羽釜A2に当たる。下層から出土。54は青磁碗の底部である。底部内面には草花文、外面には蓮弁文がある。竜泉窯系青磁碗IIc類である。下層から出土。55は瀬戸美濃の四耳壺の体部から底部である。体部内面にへラ状工具による搔き上げ痕が残る。古瀬戸戸前Ib期である。下層から出土。56は常滑の鉢である。使用により内面がよく摩滅している。中野編年の6a型式である。57は常滑の盤である。中野編年の5ないし6a型式であろう。下層から出土。58は常滑の羽釜の体部である。使用により被熱している。中野編年の3型式である。下層から出土。59は常滑の広口瓶の口縁部から頸部である。中野編年の2型式である。60は壺の口縁部から肩部である。肩部に花文の押印がある。中野編年の6a型式である。61・62は常滑の甕の口縁部である。61は中野編年の5型式、62は6a型式である。61・62は下層から出土した。

以上より遺物の時期は、知多窯産山茶碗と常滑では中野編年の2型式から6a型式まで、尾張型・東濃型山茶碗の藤沢編年では第6型式から第10型式である。これらは12世紀前半から15世紀後半までの時期にあたる。しかし、数的にみれば15世紀後半の資料はわずかで12世紀後半から13世紀中葉の遺物にまとまる傾向があるともいえる。

057SDの出土遺物については、中世土師器の皿(63・64)、山茶碗の小皿(65)、碗(66~70)、瀬戸美濃の直線大皿(72)、常滑の甕(73)、青磁の皿(71)が出土している。63・64は土師器のロクロ調整皿である。64には黒斑がある。65は山茶碗の小皿である。知多窯産で中野編年の6a型式のものである。66~70は山茶碗の碗である。66~69は知多窯産で、70は瀬戸窯産である。66~68は中野編年の4型式、69は3型式である。70は藤澤編年の尾張型第7型式である。70の内面にはススが付着している。71は青磁皿の底部である。同安窯系青磁皿Ib類である。72は瀬戸美濃の直線大皿の口縁部から体部である。内外面に灰釉が施される。古瀬戸戸前I期のものである。73は常滑の甕の口縁部である。中野編年の10型式である。

以上より遺物の時期は、知多窯産山茶碗と常滑では中野編年の3型式から10型式まで、尾張型・東濃型山茶碗の藤沢編年では第7型式から第8型式（後Ⅰ期）である。これらも12世紀前半から15世紀後半までの時期にあたる。しかし、024SDと比較すれば14世紀から15世紀後半の資料が若干多い。057SDが024SDを切ると考えられることから、遺構の時期は13世紀後半から15世紀後半を考える。

**034SD・043SU・044SU・045SU 出土土器・陶磁器**：034SDの出土土器・陶磁器の報告に併せて043SU、044SU、045SUの遺物の報告も行う。

まず034SDの出土遺物について、中世土師器の皿（110）、瓦質土器の花瓶（111）、山茶碗の碗（120）、青磁の碗（112）、常滑の鉢（109）がある。109は常滑の鉢の口縁部から体部である。片口が付いている。中野編年の10ないし11型式である。110は土師器の非ロクロ調整皿である。外面はユビオサエにより仕上げている。109と110は下層から出土した。111は瓦質土器の花瓶の頸部である。外面は縦方向のヘラミガキが施される。また上位には雷文のスタンプが2個づつ2か所押され、その下には針状の工具で引っ搔いたような細い線で花弁のような紋様を施している。これはおそらく中国古銅器の花瓶を模倣したものではないかと考えられる。なお、111は二次焼成か、あるいは焼成不良かわからないが、赤色に発色しており、表面も黒色ではない。しかし、花瓶という器種で、古銅器の模倣をした器形であり、外面に丁寧なヘラミガキが施されている。瓦質土器の特徴を備えていると考えることができ、このように分類した。112は青磁碗の底部である。底部内面には花文がある。全面施釉した後、高台内の釉を搔き取っているが、露胎は赤く発色している。竜泉窯系青磁碗で上田分類II類である。120は東濃型山茶碗である。内面はよく摩滅しており、赤色顔料が付着している。この赤色顔料は蛍光X線分析の結果ベンガラと判明し、ベンガラを磨ったと考えられる（第4章第2節参照）。藤澤編年の東濃型第11型式、脇ヶ島3号窯式である。このほか図化しなかつたが知多窯産山茶碗で中野編年の6a型式に相当するものがいくつか含まれている。

次に土器集積遺構の遺物を順に報告する。

まず043SUであるが、体部の破片資料ばかりであり、図化しなった。古瀬戸後期IV期の祖母懷壺の破片が含まれている。

044SUについては、遺構で説明があったように、墨書した土師器皿を埋納した可能性が強い。墨書のある土師器皿（74～81）、墨書のない土師器皿（87～94・96～98・100～102）が出土している（巻頭図版第4、図版第10）。74～81は墨書のある土師器皿であるが、全てロクロ調整皿である。墨書についてみてみると、75・77・79は以下の墨書である。

隆珍

三口

「隆珍」は僧侶の名前かと思われる。78と80は以下の墨書である。

六親

七世父母

□□

「六親」は「六親眷属」のことであろう。仏教経典の一節と考えられる。

このほか74・76・81は墨痕で、判読不可能であった。

墨書のない土師器皿について、87～89は非ロクロ調整皿である。ヨコナデがなくユビオサエで仕上げられている。90～102はロクロ調整皿で、95・99は045SUの出土遺物であるが、これも含めて法量で大中小の3つに分けることができる。90・91は小サイズのロクロ調整皿である。体部は底部から直線的に立ち上がる。92～96は大サイズのロクロ調整皿になる。体部は底部から外湾しつつ立ち上がる。墨書土師器皿の74～80もこのタイプである。97～102は中サイズのロクロ調整皿である。体部がわずかに外湾しつつ立ち上がるも(97～99)と底部から直線的に立ち上がるも(100～102)がある。墨書土師器皿の77はこのサイズの後者のタイプである。

045SUの出土遺物について、中世土師器の皿(95・99)、常滑の壺(103・104)、瀬戸美濃の平碗(105)、鉢皿(106)、甕(107)、桶(108)がある。95・99の土師器のロクロ調整皿は先述した。103は常滑の茶壺写しの壺の口縁部から肩部である。中野編年の12型式である。しかしこれのみ年代が極端に異なる。104は玉縁口縁の壺の口縁部である。中野編年の10型式である。105は瀬戸美濃の平碗である。内外面に灰釉が施されるが、高台およびその周辺は露胎である。古瀬戸後IV期古段階のものである。106は鉢皿の口縁部である。これは039SK出土の破片と接合した。口縁部内外面に灰釉が掛けられる。底部内面にはヘラにより鉢目が付けられている。古瀬戸後IV期古段階のものである。107は瀬戸美濃の甕の口縁部である。外面には灰釉が施される。古瀬戸後III期ないしIV期のものである。108は瀬戸美濃の桶の口縁から体部である。内外面とも鉄釉が施されている。これも古瀬戸後IV期古段階のものである。

034SD出土土器・陶磁器の時期について、中野編年の6a型式から12型式まで、藤澤編年の山茶碗の第11型式、古瀬戸の後期IV期古段階までである。しかし中野編年12型式とした常滑壺が1点のみあり、それ以外の常滑は10型式までとなる。多数は実年代としては15世紀後半までの時期が考えられるが、16世紀後半まで新しくなる可能性がある。

**036SD 出土土器・陶磁器：**中世土師器の皿(113)、山茶碗の小皿(114～116)、碗(117～119)、瓦質土器鍋(121・122)、常滑の片口(123)が出土した。113は土師器のロクロ調整皿である。体部は底部より直線的に立ち上がる。114～116は山茶碗の小皿である。いざれも知多窯産で、114・115は中野編年の5型式、116は6a型式である。117～119は山茶碗の碗である。いざれも知多窯産で、117・118は中野編年の5型式、119は6a型式である。121・122は瓦質土器の鍋の口縁部から体部である。受口状口縁で口縁端部が平坦面になっている。外面は121ではタテハケの後、下半を横方向のヘラケズリ、内面は121・122ともヨコハケが施されている。123は常滑の片口の口縁部から体部である。中野編年の6a型式である。

以上から遺物の時期は中野編年の5型式から6a型式である。実年代にして、13世紀第2四半期から第3四半期である。

**022NR 出土土器・陶磁器：**山茶碗の小皿(124～127)、碗(128～134)、片口鉢(135)、常滑の片口碗(136)、甕(137)、中国産陶器茶入(138)が出土している。124～127は山茶碗の小皿である。124～126は知多窯産で、127は瀬戸窯産である。124は中野編年の4型式、125は5型式、126は6a型式である。127は藤澤編年の尾張型第7型式である。128～134は山茶碗の碗である。128～131が知多窯産、132・133が瀬戸窯産、134は東濃型である。128は中野編年の5型式、130が2型式、129・131が6a型式である。132・133は藤澤編年の尾張型第7型式、134は東濃

型第10型式の大洞東1号窯式である。130は底部内面に黒色物が付着している。転用窯の可能性がある。135は片口鉢の底部である。断面三角形状の高台が付く。知多窯産で中野編年の1b型式である。136は常滑の片口碗である。中野編年の5型式である。137は壺の体部破片である。車輪文の押印が付く。138は中国産茶入の体部である。いわゆる唐物茶入である。なで肩になるが肩衝になろう。器壁が大変薄く、中国産と判断した。外面に鉄釉が掛かり黒色を呈する。

遺物の時期は古くは中野編年1b型式の片口鉢、新しくは藤澤編年の東濃型山茶碗第10型式で、実年代では12世紀第2四半期から15世紀前葉である。

013SM 出土土器・陶磁器：山茶碗の小皿（139～141）、碗（83・142～146）が出土した。139～141は山茶碗の小皿である。いずれも知多窯産で、139、140が中野編年の5型式、141が6a型式である。142～146は山茶碗の碗である。142～145は知多窯産で、142が中野編年の4型式、143が5型式、144・145が6a型式である。83は墨書のある山茶碗の碗の底部である。底部外面に「寺」の墨書がある（巻頭図版第4、図版第10）。瀬戸窯産で、藤澤編年の尾張型第10型式である。146は東濃型山茶碗で、藤澤編年の東濃型第10型式、大洞東1号窯式である。以上から出土遺物の時期は、古くは中野編年の4型式、新しくは藤澤編年の尾張型・東濃型第10型式の山茶碗から、実年代で13世紀第1四半期から15世紀前葉である。

026SM 出土土器・陶磁器：中世土師器の鍋（147）、羽釜（148）、皿（149）、山茶碗の碗（82・150）、白磁碗または皿（151）が出土した。147は土師器の伊勢型鍋の口縁部から体部である。口縁部の折り返しの幅が広くなり、頸部が長くなっている。体部外面にはヨコハケが施される。北村編年の鍋A5に当たる。148は土師器の羽釜の口縁部である。口縁は短く立ち上がり、口唇は内側に肥厚する。体部外面にはヨコハケが施される。北村編年の羽釜A2である。149は土師器皿で、非ロクロ調整皿である。全体に摩滅が著しく、調整についてはよくわからない。150は瀬戸窯産山茶碗の口縁部である。藤澤編年の尾張型第6または第7型式である。151は白磁の碗IV類、あるいは碗V類、または碗VI類、もしくは皿II類である。底部外面は露胎である。82は墨書のある山茶碗の碗底部である。高台内に「大日」の墨書がある。知多窯産で、中野編年の4型式である。

遺物の時期は北村編年では鍋A5、羽釜A2はともに山茶碗の藤澤編年でいう尾張型第7・第8型式に併行する。一方、藤澤編年で山茶碗の第6ないし第7型式が出土している。したがって総じて、藤澤編年の第6型式から第8型式あたりの時期が考えられる。実年代では13世紀中葉から14世紀前半にあたる。

027SM 出土土器・陶磁器：山茶碗の碗（152）が出土した。152は知多窯産山茶碗の底部である。中野編年の2型式である。12世紀第3四半期のものである。024SDからの混入の可能性がある。

029SK 出土土器・陶磁器：山茶碗の碗（153～155）、片口鉢（156）が出土している。153～155はいずれも知多窯産山茶碗の碗である。中野編年で153は6a型式、154は3型式、155は2型式である。156は同じく山茶碗の片口鉢の口縁部から体部である。内面は使用によりよく摩滅している。知多窯産で中野編年の3型式である。出土遺物の時期は中野編年で2型式から6a型式になる。実年代では12世紀第3四半期から13世紀第3四半期までの時期である。

046SK 出土土器・陶磁器：中世土師器の皿（159）と山茶碗の小皿（160）、瀬戸美濃の御皿（161）

が出土している。159は土師器の非クロコ調整皿である。ヨコナデはなくユビオサエとナデで全体を仕上げている。160は知多窯産山茶碗の小皿で中野編年の3型式である。161は瀬戸美濃の鉢皿の口縁部である。内面に刀子を使用したかと思われる鉢目が内面に付けられている。古瀬戸後IV期古段階のものである。遺物の時期について古くは中野編年2型式、新しくは古瀬戸後IV期古段階になる。実年代で言えば、12世紀第3四半期から15世紀中葉ということになる。

**047SK 出土土器・陶磁器**：山茶碗の小皿（157・158）が出土している。ともに知多窯産であり、中野編年の3型式である。

**048SK 出土土器・陶磁器**：山茶碗の碗（162）が出土している。162は知多窯産山茶碗の碗で、中野編年の4型式である。2次焼成により赤変している。

**052SK 出土土器・陶磁器**：山茶碗の碗（163）が出土している。163は知多窯産山茶碗の碗で、中野編年の4型式である。

**067SK 出土土器・陶磁器**：山茶碗の碗（164）が出土している。164は東濃型山茶碗の碗で、藤澤編年の第7～第8型式、すなわち明和1号窯式～大畠大洞4号窯式である。

**包含層出土土器・陶磁器**：包含層から出土したものうち、主要なものを報告する。瓦質土器の鍋（165）、中世土師器の羽釜（166）、山茶碗の小皿（167～171）、碗（172～175）、片口鉢（176）、白磁碗（177）である。165は瓦質土器の鍋の口縁部から体部である。受口状口縁の鍋であり、口縁端部には水平な平坦面がある。外面は摩滅しているが、内面はヨコハケの後上半ナデが施されている。166は羽釜の口縁部である。扁球状の体部で口縁部は内傾する。口縁端部は外に拡張する。体部外面にはヨコハケが施される。北村編年の羽釜A2である。167～171は知多窯産山茶碗の小皿で、中野編年で167～170は3型式、171は5型式である。172～175は山茶碗の碗で、174は東濃型、それ以外は知多窯産である。中野編年で172・175は3型式、173は5型式である。174は藤澤編年で東濃型山茶碗の第7型式、すなわち明和1号窯式である。176は知多窯産山茶碗の片口鉢の底部である。高台は薄く高い。中野編年の1a型式である。177は白磁碗V類あるいはVI類である。内面に櫛描文が施される。

#### B 弥生土器

弥生土器は調査区全域から出土しているが、包含層や後世の遺構に混入した状態で見つかっている。そのなかで主要なものを報告する。時期としては前期（178～180）、中期（181・182）、後期（183～185）の各時期の弥生土器が出土している。

178～180は前期の弥生土器である。178は遠賀川式の壺の口縁部から頸部である。頸部には無沈線の削出突帯II種が1条巡る。内外面ヘラミガキが施される。前期のものである。179は壺の底部である。外面はタテハケの後ヘラミガキが、内面にもヘラミガキが施される。中期に下がる可能性もある。180は条痕紋系土器の深鉢の口縁部である。口縁端部の上面が平坦になり、外側に少し拡張する。外面は横方向の貝殻条痕が施される。内面はナデが施される。前期の樫王式である。178は包含層、179は024SD、180は023SD下層から出土した。

181・182は中期の弥生土器である。181は受口状口縁の太頭壺の口縁部から頸部である。口縁は内側に拡張して上面に平坦な面を作る。口縁外面には3条単位の細い櫛描直線紋が巡り、その下に凹線紋が2条巡る。外面は摩滅が著しいがヨコハケが一部残る。内面はヨコハケが施されている。弥生時代中期後葉の高藏式のものである。182は壺の底部である。体部は底部か

ら丸みを持って立ち上がり、底部はやや突出する。外面はタテハケ、内面はナデが施される。弥生時代前期か中期のものであろう。181は表採、180は022NRから出土した。

183～185は後期の弥生土器である。183は広口加飾壺の口縁部である。口縁端部は上下に拡張し面を作っている。その面に擬回線紋が施される。また、口縁内側には羽状の刺突が施される。なお口縁端部には部分的に赤彩が残っている。山中式のものである。185も広口加飾壺の体部片である。体部の上位の破片で、6条単位の櫛描直線紋が2条とその間を斜位の刺突が施されている。山中式のものである。184は台付壺の脚部である。外面はヘラミガキで仕上げられている。山中式のものである。183は043SU、184は026SM、185は036SDから出土した。

### C 古代の土器

今回の調査で量的には弥生土器ほどではないが、古代の土器についても少量出土している。土師器、須恵器、灰釉陶器、製塩土器が出土し、時期としては奈良時代から平安時代を中心とする時期の土器である。

186は須恵器の壺身の口縁部から体部である。生焼けで全体に赤っぽく焼きあがっている。体部は丸みを持つつ立ち上がり、口縁部が少し短く外反する。底部には静止ヘラケゼリにより整形されている。黒釜14号窯式のものであろう。187は灰釉陶器の椀の底部である。三日月高台で、底部内面には陰刻花紋の一部が残る。灰釉は認められなかった。黒釜90号窯式のものである。186は038SE、187は包含層から出土した。このほか知多式製塩土器4類の破片がいくつか採集されている。

### D 瓦

調査区全域から瓦が出土しているが、出土した瓦には2種類ある。ひとつは知多窯産の硬質緻密な瓦の一群で、もうひとつは生産地不明の軟質黒色の瓦の一群である。前者をI群、後者をII群として報告する。I群の瓦には軒丸瓦(188～191)、軒平瓦(192～194)、丸瓦、平瓦(200)が出土している。II群の瓦にも軒丸瓦(195)、軒平瓦(196～199)、平瓦、熨斗瓦、面戸瓦(201)がある。

188～191はI群の軒丸瓦である。すべて瓦当面の破片であるが、いずれも右巻きの三巴文にその周囲に連珠を配するものと推測される。188～190は硬質緻密に作られているが、191は胎土に砂を多く含み、あまり緻密ではない。時期的にやや新しくなるものであろう。東畠遺跡出土瓦と同様、知多窯で焼かれていた瓦と同類である。12世紀後半のものと考えられる。188は024SD下層、189は包含層、190は057SD、191は022NRから出土した。

192～194はI群の軒平瓦である。すべて瓦当面の破片であるが、杏葉唐草文の軒平瓦である。同文の瓦は社山古窯、論田古窯で出土している。192は瓦当外縁上端を面取りし、平瓦部の側面凹面側も面取りをする。また頸凸面を面取りしている。193は瓦当外縁上端を面取りしない。また、頸凸面も面取りせず、丸く收める。194は瓦当外縁上端を欠損しており、面取りしたかどうかわからない。また頸凸面を面取りしている。瓦当紋様は同文であるが、破片なので同範かどうかはわからない。しかし、瓦当面の製作技術を少し見ただけでも、三者三様である。製作者が異なることが明白である。瓦当文様から12世紀後半のものである。192・194は包含層、193は036SDから出土した。

200はI群の平瓦の破片である。広端面の左の隅の部分と考えられる。隅をL字に切り取つ

ているが、これは屋根の隅に用いる瓦であるからである。凹面は離れ砂が多量に付着する。凸面は丁寧なナデにより仕上げられている。022NRから出土した。

195はII群の軒丸瓦である。ほぼ完形である。瓦当文様は右巻きの三巴文で周りに珠文を配する。巴は知多窯産の軒丸瓦に比べると頭が丸くなり、尾はそれぞれがつながっている。珠文は14個残存する。瓦当面左上あたりの珠文がなくなっているので、本来珠文の数はもう少しであったはずである。これは瓦缶自体かなり痛んでいたためと思われる。反対側の珠文の崩れ方も著しい。また瓦当に離れ砂が使用されている。丸瓦部について、まず玉縁がない。これはそもそもこの瓦が小型瓦であり、棟を葺くためのものであることに起因する。凹面はナデ。凸面は縦方向のヘラケズリの後ナデが施されている。側面と挟端面はヘラケズリが施された後、凹面側を面取りされている。焼成について表面は黒色化しており、断面観察では内部は白色を呈しているので還元焰焼成がされている。焼き締まっているが、知多窯産ほど堅緻ではない。031SKから出土した。

196～199はII群の軒平瓦である。5点出土し、いずれも連珠文の軒平瓦である。この内196の1点は瓦当面がほぼ完全に近い状態のものである。珠文は15個で界線を巡らす。ほかも同様の界線を持つ連珠文である。珠文の形や間隔を比較すると、いずれも196の瓦当文様にたどり着くので、瓦缶は1つと見られる。瓦当面は瓦当貼り付け技法により接合されている。199は接合面より瓦当面が剥がれた破片である。頭凸面には横方向のヘラケズリが施される。瓦当外縁上端と頭後縁が面取りされる。197の頭裏面にはヨコナデが入る。平瓦部について凹面・凸面ともに離れ砂の付着が顕著で、逆に布目痕がない。凹面は丁寧なナデにより仕上げられている。なお、凸面には弧線圧痕が付いている。側面のヘラケズリはなされるが面取りはされない。瓦当文様の連珠文は13世紀後半に畿内や鎌倉で盛行する文様であるが、頭後縁が面取りされるのは14世紀中葉以降のことである。したがってこの種の軒平瓦の所属時期は14世紀中葉に位置づけたい。焼成については、表面が部分的に黒色化しているが、全体的に赤っぽく焼きあがっている。知多窯産ほど堅緻ではない。196・198は031SK、197は022NR、199は包含層から出土した。

201はII群の面戸瓦で、蟹面戸瓦の完形品である。凹面は板状工具により一部ナデ調整された後全体をナデにより仕上げている。凸面については縦方向のヘラケズリがなされた後ナデにより仕上げられている。側面についてはヘラケズリが施されているが、上端面については、ヘラで切り目を入れて折り取られた痕跡をナデにより調整している。焼成について部分的に黒色化している。焼き締まっているが、知多窯産ほど堅緻ではない。034SDから出土した。

瓦の時期については、以上からI群は12世紀後半であるが、その中でも若干の時期差がみられる。II群は14世紀中葉と考えたい。

#### E 土製品

土製玉(202)、管状土錐(203～205)、陶丸(206・207)、加工円盤(208・209)が出土している。土製玉は一部欠けているが、平面円形、断面六角形を呈する。中央に7mmほどの穴が貫通する。管状土錐はいずれも完形品である。東畑遺跡出土の管状土錐と同様、大形のもの(203)と小形のもの(204・205)がある。陶丸はどちらも完形品である。胎土から206は知多窯産、207は瀬戸窯産と判断できる。陶丸も決して近くばかりでなく、遠隔地からも持ち込まれるという一例

である。208・209は加工円盤である。208は常滑の甕の体部片を、209は山茶碗の碗底部を加工したものである。202・204～206・208は包含層、203は022NR、207は057SD、209は045SUから出土した。

#### F 錢貨

210は景德元寶である。北宋錢で初鋳は真宗の景德元年(1004)である。錢径24.8mm、内径19.9mm、錢厚1.15mm、重量3.2gを計る。024SD上層から出土した。

#### G 石器・石製品

石鐵(211)、石錐(212～214)、両刃石斧(215・216)、敲石(217)、砥石(218・220)、礫石錐(219)、石鍋(221)、軽石(222～224)が出土している。

211は石鐵である。凹基式の無茎石鐵で、下呂石製である。212～214は石錐である。212・213は基部の一部が欠ける。214は錐の先端が欠ける。212・214は下呂石、213はチャート製。215・216はともに両刃石斧の刃部片である。215は斑レイ岩製、216は砂岩製である。217は磨製石器製作用の敲石である。チャート製で完形品である。218・220は砥石である。218の石材は緑色を呈する凝灰岩で、産地は北陸が想定される。220も凝灰岩であるが、地元の石材である可能性がある。219は礫石錐である。紐をかけるところを打ち欠いている。アブライト製である。221は滑石製の石鍋で温石に再加工したものである。口縁部から体部の破片である。口縁部はやや内湾気味で口縁端部は肥厚する。口縁部外面にはノミ痕が残るが、それ以外は研磨されている。口縁部の形態と鏘がないことから、木戸編年のI類ないしII類に相当し、11世紀代の石鍋と考えられる(木戸1995)。222～224は軽石である。これは周辺には転がっていない石材なので人間が選択的に持ち込んだものと考えられる。また遺物の表面には使用による面の形成があり、各遺物とも1面以上の使用面が確認できる。

211・215は032SK、212・214・216・219・221・224は包含層、213は021SM、217は023SD下層、218は022NR、220・222は024SD下層、223は013SMから出土した。211～217・219は弥生時代の遺物であろう。218・220・221は中世の遺物と考えられる。222～224はどの時代でも使用されるので限定できない。

#### H 木製品

木球(225)、板(226)、折敷底板(228)、建築部材(229)、柄(230)、たたり未製品(231)、不明木製品(227)が出土した。

225は木球の1/2片である。使用により表面が荒れている。226は板片であるが、墨痕らしい黒ずみが表面にある。木簡の可能性がある。227は箱物の部品かとみられるものである。別の板材と組み合わせるためのほぞが両端に掘ってあり釘穴も開いている。中央には何か通す穴を開けた上、一方の側縁とつなげている。何かを差し込むためのものであろう。228は折敷の底板で非常に薄い。229は建築部材と思われる。四角柱状の木材の一面に長さ約5cm、幅約3cm、深さ2cmほどのほぞ穴が開けてある。樹種はコウヤマキである。230は柄で端部を丸く仕上げている。樹種はクワ科クワ属である。231は樋上昇氏のご教示によればたたり未製品である。たたりとは糸繩りに用いる道具で糸糸を引っ掛けて糸枠に繰るための台のようなものである。重い樹種を使用するらしいが、樹種鑑定の結果アカガシ亜属であったので、その点矛盾がない。

(桐山)

## 第4章 自然科学分析

### 第1節 番間遺跡で検出された 013SM 硬化面の地質学的検討

鬼頭 剛

東海市の番間遺跡において考古学的に道路と思われる遺構 013SM が検出された。この遺構が道路なのか否かの検討のため、道路遺構を構成する地層の断面観察と軟 X 線写真撮影による内部構造の観察を行なったので報告する。

#### 1. 試料および分析方法

道路遺構は番間遺跡の調査スタッフにより道路の表面と推定されている固結の進んだ硬化面から地下方向へブロック（レンガ）状に試料が切りだされた（第40図）。試料は道路の表面と考えられる硬化面から地下方向へ深さ 16.5cm、幅 10.5cm、厚さ平均 3cm（最大 3.5cm）のブロック試料である。本試料の内部構造を確認するため、地層断面の肉眼観察と軟 X 線写真撮影をもとに検討を加えた。

#### 2. 分析結果

##### a. 地層断面の観察

ブロック試料の断面には、水理条件の変化によって形成される堆積学的に明瞭な層理面は認められない。だが、砂層に含まれる貝殻片の量比、固結度、色調の差異によって便宜的に大きく 3 層に分けられる。下位層より順に記載する。



第40図 番間遺跡 013SM の土壤サンプルの取得位置 (1/500)

最下位層は全体に黄灰色（標準土色帖によるマンセル表記で 2.5Y4/1：以下同様）を呈する。貝殻片の量が上位層にくらべて多く含まれる、貝殻片混じりのシルト質砂層である。層厚は 12.5cm である。砂粒子は中粒砂サイズで淘汰度はよい。含まれる鉱物は石英がほとんどで、堆積学的な砂層の記載方法で表わせば、基質に含まれる泥質分の含有量が少ない石英アレナイト（岡田，1968a, 1968b）状を呈する。砂層に含まれる貝殻片は殻長 3cm ほどの離弁したシジミの貝殻がほとんどで、まれに合弁のものがみられる。これらの貝殻片の内部を埋めるのは中粒砂サイズの砂粒子と貝殻片である。砂層中の貝殻片の配列には規則性はみられず、地層の中であらゆる方向を向いて分散する。さらに小さな径 1～8mm 程度の貝殻の細片も含まれる。本層を覆う上位の地層にくらべると固結度が低く、軽い衝撃や軽く手で触れただけで簡単に破壊され、貝殻片と砂粒子が接する部分では殻の鴻曲部に沿って割れる。

貝殻片混じりのシルト質砂層の上を黄灰色 (2.5Y6/1) を呈する貝殻片混じりのシルト質砂層が覆う。層厚は 5cm である。下位層とは層相に大きな違いではなく、砂層に含まれる貝殻片の量が下位層に比べて少ないことで分けられる。砂粒子は中粒砂サイズで淘汰は良好である。含まれる鉱物は石英がほとんどで、石英アレナイト状を呈する。砂層に含まれる貝殻片は不規則に配列する殻長 3cm ほどの離弁したシジミの貝殻で、さらに径 1～8mm ほどの貝殻の細片が含まれることも下位層

と同様である。本層は下位層に比べると若干固結度が高い。

下位の貝殻片の混じるシルト質砂層の2層を覆っているのが、にぶい黄褐色(10YR5/3)の砂質シルト層である。本層の頂部が道路遭構の検出面となる。層厚は4cm、砂層をつくる砂粒子は中粒砂サイズで石英粒子がめだつ。砂粒子の淘汰度はよい。基質はシルトである。堆積構造は認められない。径1mm程度の砂の粒子や同程度の大きさの貝殻片の細片が混じる。下位の2層に比べると含まれる貝殻片の量は極めて少なくなり、貝殻の形態を示すものは認められなくなる。下位層との層理面は砂層に含まれる貝殻片の量比で便宜的に分けられる。本層は全体に下位の2層にくらべて固結度が高く、頂部の硬化面に近づくほど固結度が高くなる傾向がある。砂の粒子どうしは基質となるシルトを介してお互いが強固に結びついており、軽い衝撃や手で触れただけでは破壊されない。

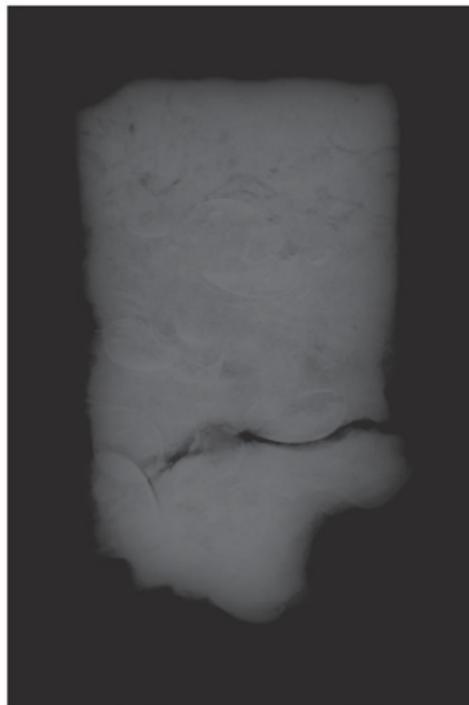
### b. 軟X線写真解析

ブロック試料内部の構造をさらに検討するために軟X線写真を撮影した。撮影にはソフロン株式会社製の軟X線写真撮影装置(SOFRON BST-1505C 6IITV型)を使用し、撮影は電圧45kV、電流2mAで40秒間照射した(第41図)。物体を透過してX線フィルム上に到達するX線の強弱により、写真には白色のつよい明色部と黒色のつよい暗色部の濃淡の差となって現われる。X線がより透過したところは暗色部、逆に透過しなかったところは明色部となる。

透過X線写真をみると、白色を呈し厚さ1mmほどの湾曲した針状を呈する構造がみられる。これは貝殻片の断面である。このブロック試料内部に認められる貝殻片の相対的な量比により、上部・中部・下部の大きく3つの部分に分けられる。下部では殻長3cmほどの貝殻片が不規則に分布する状況がみてとれる。また、ブロック試料中部にも下部と同様に貝殻片が不規則に含まれているが、砂層の中の貝殻片の密度が下部に比べると小さいことがわかる。上部では明らかに貝殻片と思われるものがなくなり、全体に砂粒子が卓越していることがわかる。

### 3. 考察

道路遭構のブロック試料の地層断面の観察では、砂層の中に含まれる貝殻片の相対的な量比から3層に分けられた。透過X線写真でも含まれる貝殻片の量比から3つの部分に分けられ、地層断面の観察結果と透過X線写真の解



第41図 畑間遭跡013SM 土壌サンプルのX線透過写真

析結果から分けられる各部分はそれぞれよく対応する。X線は砂粒子をほとんど透過しないため写真では白色の領域として写る。ここでブロック試料上部をさらに詳細に観察してみると、内部には厚さ1mmで湾曲した針状の暗色部が不規則に並ぶ構造がみられる。暗色部がみられるということは、他の部分よりもX線がより透過した状態、つまり、試料の厚さが薄いか、ブロック試料の内部を埋めているものの密度が小さいことを示す。撮影したブロックは厚さ3cmでほぼ均一といって良いため、暗色の部分は内部に詰まったものが少ないことを意味する。ここで注目したいのは、認められる暗色部の形態である。厚さ1mmほどで湾曲した針状の構造は貝殻片の断面の形態に似ており、もともとは破碎された貝殻片がそこにあった可能性が高い。貝殻は炭酸カルシウム(CaCO<sub>3</sub>)からなる。ふつう固体の炭酸カルシウムは水に溶けにくいが、二酸化炭素(CO<sub>2</sub>)を含んだ水には以下の化学平衡により酸性炭酸塩となってよく溶け出すことが知られている。



もともとブロック試料の上部にも下位層でみられるのと同じように、砂層の中に貝殻片が混じっていたが、雨水に溶けて酸性炭酸塩となり砂層の中に溶脱してしまい、溶け出でなくなってしまった貝殻の跡だけが残されたのであろう。また、細粒な粘土粒子はケイ素(Si)と酸素(O)からなるSi-O四面体構造をなし、それらが積み重なって粘土鉱物をつくっている。粘土の粒子はイオンを吸着する力が強く、カリウム(K)やカルシウム(Ca)イオンなどが粘土に吸着されるとき、前に吸着していたイオンを置き換えて新たに粘土粒子に吸着される塩基交換(base exchange)を行う。貝殻片が密につまつた状態の堆積物であれば溶け出すカルシウムイオンの量も多くなり、塩基交換がより活発に行なわれたと想像される。ブロック試料上部の硬化面の固結度と貝殻片から溶け出すカルシウムイオンが行なう塩基交換、そして塩基交換に伴う堆積物の固化作用とは何らかの相関関係があるようと思われるが、そのメカニズムは不明である。今後の課題としたい。

ところで、ここで慎重に扱わなければならないのは、地層の固結度が高いからといってそれが道路遺構であるとは言えないことである。考古遺跡の発掘調査に従事する方ならば、炉跡などで堆積物が被熱して固結度が高くなった例をご存知であろう。熱を帯びても堆積物は硬化する。堆積物が硬くなることは道路遺構の要素のひとつかも知れないが、それが単純に道路であることを証明することにはならない。道路として証明をするならば、固結度のほかにも遺構の平面形態や他の道路遺構の要素など考古学的な状況証拠がさらに必要であるように思う。残念ながら全国的に道路遺構の検出例や自然科学的な分析例は極めて少なく、比較・検討するための基礎データがない。今回は観察事実のみを提示しておくだけにとどめたい。

## 引用文献

- 岡田博有, 1968a, 砂岩の分類と命名, 地質雑誌, 74, 371-374.  
 岡田博有, 1968b, 砂岩の分類と命名 - 棚遺, 地質雑誌, 74, 617-622.

## 第2節 煙間遺跡出土山茶碗付着の赤色顔料分析

堀木真美子

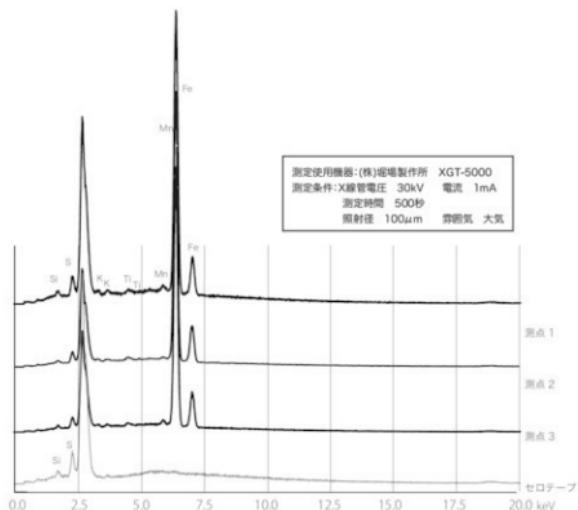
## 1. 試料および分析方法

今回分析を行った試料は、山茶碗（134）の内面に付着していた赤色顔料である。

測定方法は、赤色部分を中心に接着テープを用いて少量採取し、この試料にX線を照射する方法で行った。測定機器は（株）堀場製作所製 XGT-5000、X線管電圧 30kV、測定時間 500秒、照射径 100 μm、雰囲気は大気。接着テープには Si と S が検出される。測定箇所は、採取した試料の異なる 3 点を測定点とした。

## 2. 測定結果

測定結果を第42図に示す。測定の結果、Si, S, K, Ti, Mn, Fe の元素が確認された。測定箇所の違いによる元素の違いは認められなかった。顔料の状況および蛍光X線分析結果より、鉄を主成分とする顔料（ベンガラ）であると判断される。



\*山茶碗 内面の赤色顔料

\*3粒の測定の結果より、Fe（鉄）が明確に検出。

\*他の元素としては、K(カリウム)、Ti(チタン)、Mn(マンガン)、Si(珪素)、S(硫黄)が確認された。

第42図 煙間遺跡出土の赤色顔料分析結果

## 第3節 番間・東畠遺跡における動物遺存体

西野 順二

## はじめに

東畠遺跡及び番間遺跡は、砂堆の東端に位置する。平成20年度の大田川駅周辺土地区画整理事業に伴う発掘調査において、西暦13世紀前後に比定される中世の貝塚が検出された。特に、番間遺跡では良好な貝塚が認められたため、ブロックサンプル及びコラムサンプルを設定し内包する動物遺存体の分析を行った。東畠遺跡ではサンプルが採られておらず、篩選別は行っていないため、取得された貝類及び動物骨について述べることとする。

近年、周辺地域において大草城跡（知多市）や金山屋敷遺跡（常滑市）で中世の貝塚の報告などがあり、中世の貝塚遺跡が確認されつつあるが、出土した動物遺存体に対する詳細な報告は少ない。そこで、本遺跡にて取得した動物遺存体の種別を明らかにし、知多半島における中世の人々の動物資源の利用状況や生業、また当時の周辺環境の解明につなげていきたい。なお、同定及び解析は、筆者がすべて行った。

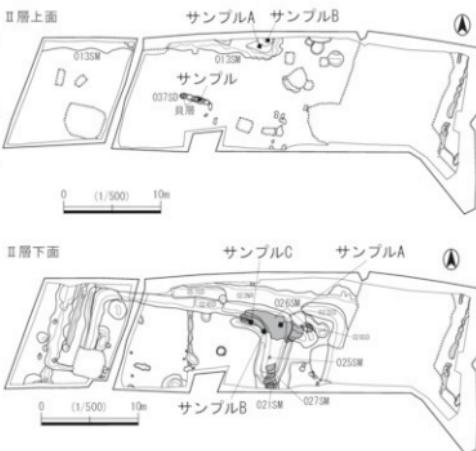
## 1. 試料

東畠遺跡では、集積遺構などから出土した貝類及び獸骨である。ここで採取された貝類に関しては定量的に採取されたものではなく、目に付いたもののみを取り上げているため、選択的な影響が強い。

番間遺跡では、各貝塚における貝層サンプルに含まれる動物遺存体と個別に出土した獸骨である。貝層サンプルは、基本的に40cm四方の範囲で取り出し、026SMサンプルAは貝層が厚く堆積していたため、深さ5cmごとに分け、コラムサンプルとした（第43図）。これらの貝層サンプルは、5mm、3mm、1mmメッシュの網籠で水洗選別を行い、すべての動物遺存体を抽出した。それらの試料については、結果とともに第7表に記す。なお、二枚貝については、すべての蝶番を左右に分けそれをカウントしており、分析には最も多い側を最小個体数として使用している（第7表のゴシック体文字）。

## 2. 分析方法

基本的に参考文献9及び10に従って、試料を現生資料と比較し肉眼で観察し、その形態的特徴から、種類及び部位の同定を行う。また魚類などの微小骨資料については、肉眼で判別できるものののみ抽出し、詳細な分類は行わなかった。なお、哺乳類及び鳥類については名古屋大



第43図 番間遺跡における貝層サンプル取得位置 (1/500)

学大学院情報科学研究科新美研究室所蔵の現生資料と比較し同定を行った。カメ類の一部については、愛知学泉大学の矢部隆氏の鑑定による。

### 3. 結果及び考察

出土した動物遺存体の分類群の一覧を第4表に示す。また本遺跡から出土した動物遺存体については第5・6表にまとめ、写真を図版第48～50に掲げた。さらに、畠間遺跡における貝層サンプルについては、第7表と第44～48図にまとめた。動物遺存体の出土した遺構の詳細は、遺構の章を参照していただきたい。

#### A 東畠遺跡

東畠遺跡では、中世の遺構と包含層から獸骨及び貝類が出土した。

##### 001SU（第5・6表）

土器集積と共に、アカニシが4点と鳥類（種不明）の橈骨が左右各1点出土した。

##### 002SM（第5・7表）

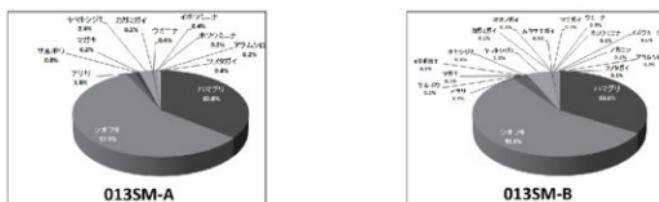
調査区の南端で検出した地点貝塚において、約30×30×10cmのサンプルを採取した。そこには、ハマグリ、シオフキ、サルボウ、アサリ、ヤマトシジミ、カガミガイ、マガキ、イタボガキ、アカニシ、ウミニナ、ツメタガイ、バイガイといった貝類と魚類の骨が含まれていた。ただしこれには細かな水洗選別を行わなかったため、微小な魚骨や小型動物の骨は見つかっていない。

##### 包含層（第5・6表）

1地点では、遺構検出における包含層内から哺乳類の骨の小破片が出土した。一部は、大きさからイヌと思われるが、残存部位が少なく種の同定はできなかった。2地点では、遺構検出における包含層からシカの側頭骨（右）1点と、貝類（ハマグリ、サルボウ、ヤマトシジミ、イタボガキ、アカニシ）が出土した。その他に、種不明の陸生哺乳類の骨片が出土している。

#### B 畠間遺跡

畠間遺跡では、中世の良好な貝層が出土し、いくつかの地点で貝層サンプルを取り、内包する動物種の分析を行った。それらの貝層サンプルでは、中世の貝類利用の解明に重点をおくために貝類の分類を重点的に行った。陸生微小貝、魚類、両生類、爬虫類、小型哺乳類なども確認できたが、種同定及びカウントは行わなかった。それらについては、今後別の機会に報告させていただきたい。貝層サンプル以外にも自然流路や包含層などからイシガメ、イヌ、ウマ、ニホンジカなどが出土した。



第44図 013SMにおける貝類の組成

## 貝層サンプル

### 013SM-A (第44図, 第7表)

サンプルの規模は  $40 \times 40 \times 10\text{cm}$  で採取した。

出土した貝類のほとんどがシオフキとハマグリで占められ、そのほかの種はあまり多くない。若干ヤマトシジミが目立つ程度である。そして、ウミニナ類などの複足綱が少ないという特徴がある。主体は、シオフキである。

### 013SM-B (第44図, 第7表)

サンプルの規模は  $40 \times 40 \times 20\text{cm}$  で採取した。

サンプル 013SM-A よりも多く  
の土量があり、含有する貝類の  
量も多かったが、013SM-A と同  
様の傾向を示す。

### 021SM (第45図, 第7表)

024SD の南端に位置する小規  
模な貝層で全量採取した。

主体はシオフキとなるが、ハ  
マグリ、アサリ、ヤマトシジミ  
も比較的多く検出した。

### 026SM-A (第46・47図, 第7表)

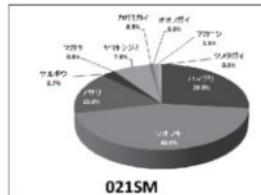
026SM における最も厚く堆積  
した貝層部分を  $40\text{cm}$  四方で深さ  
 $5\text{cm}$  ごとに採取し、結果 11  
層となった。2 ~ 4 層は貝層の  
上層部分で、他の地点と比べると  
ウミニナ、ホソウミニナ、イボ  
ウミニナといったウミニナ類  
が多い。4 層以下は、013SM と同  
様にシオフキとハマグリが大半

を占めている。4 ~ 7 層において

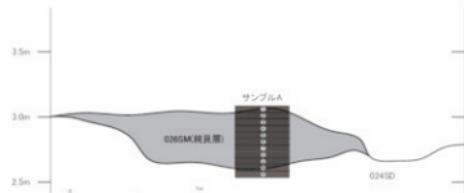
は、シオフキよりもハマグリが  
多く出土し、逆に 8 層 ~ 11  
層では、シオフキが主体となしている。

こうしたことから、層位において貝類の出土傾向に特徴  
があり、シオフキ、ハマグリ、ウミニナ類などといった単  
位ごとに大量に廃棄した可能性がある。

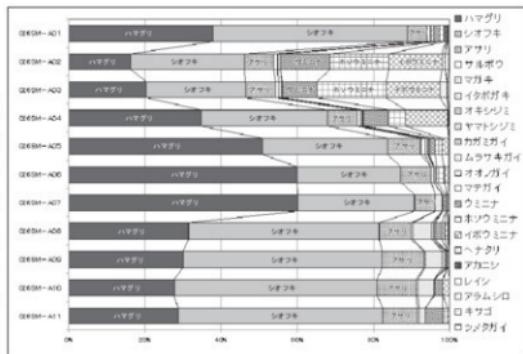
各層をすべてまとめると、ややシオフキがハマグリより  
多く出土しているが、おそらく両方とも主体的に利用さ  
れていたと考えられる。また、アサリの占める割合もやや多



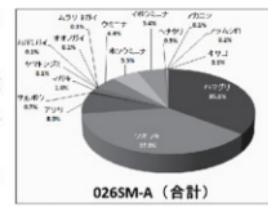
第45図 021SM における貝類の組成



026SM セクション図



第46図 026SM における層位別貝類の組成



第47図 026SM における貝類の組成  
(1)

い。そして、微量ではあるが、サルボウガイ、ヤマトシジミ、マガキ、カガミガイ、ムラサキガイ、オオノガイ、ヘナタリ、アカニシ、アラムシロ、キサゴも含まれていた。

貝類の他に、魚類、爬虫類、両生類などの骨も出土している。

#### 026SM-B (第48図、第7表)

026SM の南端において 40cm 四方で深さ約 5cm の体積で採取した。

同定した貝種はやや少なく、ハマグリ、シオフキ、アサリ、サルボウガイ、マガキ、ヤマトシジミ、オオノガイ、ウミニナ、ホソウミニナ、イボウミニナである。サンプル 026SM-A とは異なり、ハマグリが主体となし、統いてヤマトシジミの割合が多くなっている。おそらく、ヤマトシジミのブロックがあったと思われる。

#### 026SM-C (第48図、第7表)

026SM の南西において 40cm 四方で深さ約 10cm の体積で採取した。サンプル 026SM-B と同様にハマグリが主体となしているが、ヤマトシジミの割合は低く、シオフキ、ウミニナ類、アサリが高い。

#### 037SD (第7表)

溝状構造の上に盛り上げられた混貝土層から 30cm 四方で深さ約 8cm の体積で採取した。細かいメッシュによる水洗選別を行っていないため、微小な貝類や骨は検出されていない。

主体はシオフキで、次いでハマグリが多い。その他はヤマトシジミ、カガミガイ、ウミニナ、ツメタガイで、それぞれ 1~2 点しか含まれていなかった。

貝層サンプル以外

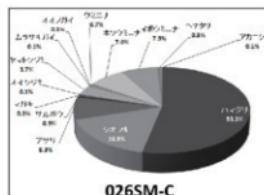
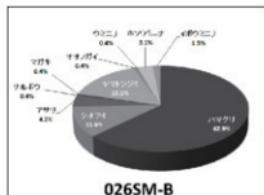
#### 013SM (第5・6表)

貝類に関しては、貝層サンプル以外の種の貝類は含まれていなかった。

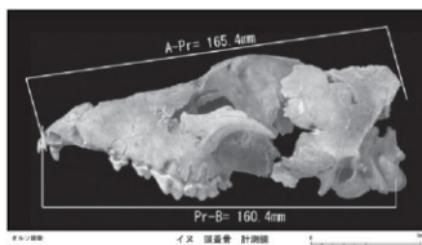
貝層内から数点カメの甲羅の破片とウマの門歯が 2 点出土している。

#### 022NR (第49図、第5・6表)

自然流路の堆積土からウマ、イヌ、イシガメが出土した。ウマは、尺骨・桡骨の中間部が 1 点のみである。イヌは、頭蓋骨がほぼ完存した状態で出土した。しかし、保存状態はあまり良くなく、洗浄後復元をしたが非常に脆いため、オルソ画像による計測を試みた。結果は頭蓋骨最大長 (A-Pr) = 165.4mm、基底全長 (Pr-B) = 160.4mm である。さらにやや地点は離れるが下顎骨、上腕骨、大腿骨も出土している。出土状況において、人為的に埋葬されている様子はなく、部位がま



第48図 026SMにおける貝類の組成(2)



第49図 022NR 出土イヌ頭蓋骨

とまって出土していないため、おそらく死亡してから自然流路によって流され埋積されたものと思われる。大腿骨には、カットマークが残されたものもあり、人為的に殺された可能性があるものも見受けられる。イシガメは、大きさが大、中、小のものが並んで出土した。大と中のものは甲羅が幾分変形しており、埋積過程において大きな圧力がかけられたと思われる。もしかすると、洪水などによって大量の土砂に突然埋まつたことによって、そのまま自然死したかもしれない。

## 023SD (第5表)

同一個体と思われるイヌの環椎、軸椎、寛骨、大腿骨、上腕骨が出土した。

## 026SM (第5・6表)

貝類は、貝層サンプル以外の種は出土していない。イヌの下顎骨(L)が1点出土している。そこに残された歯牙の多くにう歯が認められる。

## 027SM (第6表)

この貝層には、シオフキ、ハマグリ、アサリ、ヤマトシジミ、ウミニナが認められた。

## 028SD (第5表)

イヌの下顎骨(R)と大腿骨(R)が出土した。

## 西トレント (第5・6表)

サルボウガイとシオフキが採取されているが、これらは026SMの貝類である。

哺乳類と思われる長骨が出土したが、摩耗及び風化が激しく種の同定はできなかつた。

## 北壁・西壁 (第5・6表)

ニホンジカの足根骨が1点出土した。

## 包含層 (第5・6表)

3地点では、2面検出時にカメと哺乳類の骨片が出土した。表土から、ウチムラサキが採取されているが残存状態及び出土状況などから、これは現代の廃棄物であると思われる。

4地点では、哺乳類の頭骨片や鳥骨片と思われるものが出土しているが、小破片であることと残存状態が悪いために種の同定はできなかつた。頭骨片に関しては、ヒトの可能性がある。このほかニワトリの大腿骨が3点採取されているが、出土地点が搅乱の真下であることなどから、これは現代の廃棄物である可能性が高い。

## 4.まとめ

東畑遺跡において出土した動物遺存体はあまり多くはなかつたが、001SUにおけるアカニシの出土状況と002SMにおいて比較的アカニシが多く含まれている点が興味深い。アカニシは、内湾の砂泥域に生息する種であり、縄文時代早期からこの地域で利用されていた。他の地域では、戦国時代にアカニシに柄をつけて柄杓として使用されていたところもある（参考文献11）が、今回出土したアカニシは比較的大きな個体が多かつたが、加工した痕跡は認められなかつた。

畠間遺跡においては、良好な貝層が残存していたこともあり、やや多くの動物遺存体が出土したが、貝層における陸獣の含有量は非常に少ない。それに、詳しく分類を行えなかつたが、魚類に関しても経験的に出土量が少ないように感じる。さらに、共伴する土器なども少ない。また026SMの層位によって貝類に出土傾向がみられることなどから、比較的短い期間に貝種ご

とに大量に処理し、廃棄していたのではないかと思われる。

またキセルガイ科などの陸生微小貝が貝層サンプルすべてで確認できしたことや爬虫類の中にはヘビ科と思われるものも見られたため、おそらく貝層が形成されてからすぐに土に埋まるところなく、地表面に晒されていたと考えられる。

さらに、013SMは薄く帯状に検出され、表面が固く締まり、上面の貝層は細かく破碎されていることから道路構造の可能性を指摘されている。この固結した土壤の状況を調べるために土壤分析を行った（第4章第1節参照）。その結果から貝層の貝殻が雨水などに溶けることによって周りの土壤と化学反応を起こし、土壤を硬化させることができることがわかった。このような貝殻の特性を利用した土木工事の痕跡が、知多市の大草城の土塁の調査で確認されている（参考文献2）。この土塁は16世紀末のものであるため時代がやや下るが、土塁築造にあたって大量の貝殻（95%がカキで占められる）を用いて土壤を固く締ませ基盤層を築いていた可能性が指摘されている。すなわち貝殻を含んだ土壤が雨水により硬化するのは自然の化学反応であるが、それを意図して貝殻を土に混ぜたということも推測できる。本遺跡で確認された013SMでの状況は、大草城の土塁で発見された貝塚とは異なり含有する動物遺存体の構成比が多種多様であり、またその貝類の構成比が本遺跡の別時期の貝層と同様にシオフキとハマグリが主体となっている。そして、その貝層の出土状況は、長い間地表面にあったことを示唆するものであるが、土壤の硬化を狙って貝類を混ぜたかどうかはわからない。

基本的に、畑間遺跡で認められた貝層は、シオフキとハマグリがその大部分を占め、それ以外の種は比較的少ない。常滑市の金山屋敷遺跡で多く出土していたオオノガイは、少量ではあるが含まれていた。他には、アサリやヤマトシジミが多く出土している。アカニシは、東畑遺跡のようにまとまった出土ではなく、その大きさも比較的小さい。こうした貝層に含まれている貝類は、今でも伊勢湾沿岸で探ることができますので、当時の環境は今とさほど変わらないのかもしれない。しかし、知多半島において縄文時代早期から晩期にかけて大量に採取されていたハイガイが全くみられなかった。これまでに周辺地域で行われた試掘調査や周辺地域における中世の貝塚などでもハイガイの報告はない。三河湾においてハイガイは近年まで生息していたが、知多半島の伊勢湾沿岸では中世の頃にすでにハイガイは生息していなかったのかもしれない。

陸生哺乳類については、ウマ、ニホンジカ、イヌが出土している。東畑遺跡で出土したシカの側頭骨には角座が残っていたが、人為的に加工された痕跡はなかった。それから、イヌは比較的多く出土した。おそらく3個体は存在すると思われる。中には、カットマークがつけられているものもあり、食用にされていたのかも知れない。それらのイヌの中には、大きさが現在の柴犬よりもやや大きいものもある。

カメについては、イシガメがほぼ形を保った状態で出土し、大きさの異なる3体が平行して出土した状況から、急激な自然現象などによって自然死したものであると考えられる。金山屋敷遺跡では、骨板片に打ち叩いた痕跡があり食用にされた可能性が指摘されているが、ここでは人為的な痕跡は認められなかった。

魚類について、貝層サンプルより少量であるが魚類の骨を確認した。確認できたものの中で椎骨をみると非常に小さく、おそらくカタクチイワシなどのニシン科のものなど数種が含まれ

ている。今回は時間的制約もあり分類することができなかったが、地引網漁法用の大型の土錘や刺網漁法用の小型の土錘が出土していることなどから、当時の漁労活動を知る上でも重要であるため、今後別の機会に報告させていただきたい。

### 5. 謝辞

末筆でございますが、本報告を書くにあたって多くの諸関係者及び関係機関からご助言、ご助力をいただき、厚くお礼申し上げます。また出土したカメの鑑定には愛知県学泉大学の矢部隆教授、そして現生資料を閲覧させていただいた名古屋大学大学院情報科学研究科の新美倫子准教授及び同大学院蜂須賀敦子氏、大谷茂之氏にも、併せてお礼申し上げます。

### 参考文献

1. 常滑市教育委員会 2004 『特養建設用地埋蔵文化財発掘調査報告書 金山屋敷遺跡』(『常滑市文化財調査報告書』第27集)。
2. 知多市教育委員会 2008 『愛知県知多市大草 大草城跡』(『知多市文化財資料』第40集)。
3. 知多市教育委員会 2005 『愛知県知多市八幡 楠廻間貝塚』(『知多市文化財資料』第38集)。
4. 東海市教育委員会 1997 『愛知県東海市 東畠遺跡等試掘調査報告』。
5. 東海市教育委員会 1999 『愛知県東海市 上浜田遺跡発掘調査報告』。
6. 東海市教育委員会 2004 『愛知県東海市 煙間遺跡発掘調査報告』。
7. 東海市教育委員会 2005 『愛知県東海市 松崎遺跡確認調査報告』。
8. 奥谷喬司 2000 『日本近海産貝類図鑑』 東海大学出版会。
9. 松井章 2008 『動物考古学』 京都大学学術出版会。
10. 西本豊弘 松井章 1999 『考古学と動物学』(『考古学と自然科学』②) 同成社。
11. 丸山真史 2007 「中世遺跡に見る『都市的な場』—阪神間の遺跡における動物遺存体の研究—」『動物考古学 第24号』掲載 動物考古学研究会。

## 第4表 検出動物分類一覧

\*括弧内の数字は図版第4Bの番号に対応する

軟体動物門 Phylum MOLLUSCA	バカガイ科 Family Mactridae
複足綱 Class GASTROPODA	シオフキ <i>Mactra veneniforms</i> (10)
前鰓亜綱 Subclass PROSOBRANCHIA	マテガイ上科 Superfamily Solenacea
古複足目 Order Vetigastropoda	マテガイ科 Family Solenidae
ニシキウズガイ上科 Superfamily Trochoidea	マテガイ <i>Solen strictus</i>
ニシキウズガイ科 Family trochidae	ニッコウガイ上科 Super Tellinacea
キサゴ <i>Umboonium costatum</i> (5)	シオサザナミ科 Family Psammobiidae
盤足目 Order Discopoda	ムラサキガイ <i>Soletellina diphos</i> (17)
カニモリガイ上科 Superfamily Centhoidea	シジミ上科 Superfamily Conbiculacea
ウミニナ科 Family Batillariidae	シジミ科 Family Corbiculidae
ウミニナ <i>Batillaria multiformis</i> (1)	ヤマトシジミ <i>Corbicula japonica</i> (12)
イボウミニナ <i>Batillaria zonalis</i> (2)	マルスダレガイ上科 Superfamily Veneracea
ホソウミニナ <i>Batillaria cumingii</i> (3)	マルスダレガイ科 Family Veneridae
フトヘナタリ科 Family Potamidiae	カガミガイ <i>Phacosoma japonicum</i> (14)
ヘナタリ <i>Cerithidea cingulata</i> (4)	アサリ <i>Ruditapes philippinarum</i> (16)
タマガイ上科 Superfamily Naticoidea	ハマグリ <i>Meretrix lusoria</i> (13)
タマガイ科 Family Naticidae	オキシジミ <i>Cyclina sinensis</i> (15)
ツメタガイ <i>Glossaulax didyma</i> (9)	ウチムラサキ <i>Saxidomus purpurata</i>
新複足目 Order Discopoda	オオノガイ目 Order Myoida
アツキガイ上科 Superfamily Muricoidea	オオノガイ亜目 Suborder Myina
ムシロガイ科 Family Nassariidae	オオノガイ上科 Superfamily Myacea
アラムシロ <i>Reficumassa festiva</i> (6)	オオノガイ科 Family Myidae
エゾバイ科 Family Buceinidae	オオノガイ <i>Mya arenaria oonogai</i> (18)
バイ <i>Balyonia japonica</i>	脊椎動物亜門 Subphylum VERTEBRATA
アツキガイ科 Family Muicidae	軟骨魚綱 Class CHONDRICHTHYES
アカニシ <i>Rapana venosa</i> (8)	硬骨魚綱 Class OSTEICHTHYS
レイシガイ <i>Thais bronni</i> (7)	両生綱 Class AMPHIBIA
二枚貝綱 Class BIVALIA	爬虫綱 Class REPTILLIA
翼形亜綱 Sub class PTERIOMORPHIA	カメ目 Order Testudines
カキ目 Order Ostreoida	バタガールガメ科 Family Bataguridae
カキ亜科 Suborder Osteina	イシガメ <i>Mauremys japonica</i>
カキ上科 Superfamily Ostracea	鳥綱 Class AVES (図版第49-3,4)
イタボガキ科 Family Ostreidae	哺乳綱 Class MAMMALIA
イタボガキ <i>Ostrea denselamellosa</i> (20)	奇蹄目 Order Perissodactyla
マガキ <i>Crassostrea gigas</i> (19)	ウマ科 Family Equidae
フネガイ目 Order Arcoida	ウマ <i>Equus caballus</i> (図版第49-5,6)
フネガイ上科 Superfamily Arcacea	鯨偶蹄目 Order Cetartiodactyla
フネガイ科 Family Arcidae	ウシ亜目 Suborder RUMINANTIA
サルボウガイ <i>Scapharca kagoshimaensis</i> (11)	シカ科 Family Crvidae
異歯亜綱 Subclass HETERODONTA	ニホンジカ <i>Cervuss nippon</i> (図版第49-1,2)
マルスダレガイ目 Order Veneroida	ネコ目 Order Carnivora
バカガイ上科 Superfamily Mactracea	イス科 Family Canidae (図版第50)





## 第4節 愛知県畠間・東畠遺跡から検出された昆虫化石について

奥野絵美・森 勇一

## I. はじめに

昆虫は地球上の生物群の中で最も種類が多く、世界で約100万種、日本だけでも約3万種存在しているとも推定されている。生息環境も実に様々であり、池沼や河川などの水中や水面（水生昆虫）、林床や獣の糞・屍体などの地表面（地表性歩行虫）、森林や草原などの植物上（樹上性昆虫）など多岐にわたっている。食性についても、食植性から、食肉性・食糞性・食屍性・食菌性・雑食性など非常に多種多様である。

したがって、遺跡から昆虫の化石（遺体ともいう）が見つかれば、それらの生態的な特徴に基づいて、遺跡の古環境を非常に詳細なレベルで復元することが可能である。日本では、筆者の一人森が中心となり、愛知県を中心とした遺跡で分析を行い、先史時代から歴史時代に至る古環境の復元に大きな成果を挙げている<sup>(1)</sup>。

本論では、愛知県畠間・東畠遺跡でから得られた昆虫化石について、その分析結果の概要を述べる。

## II. 試料および分析方法

畠間・東畠遺跡（愛知県東海市）は、知多半島付け根の冲積地に位置し、太田川右岸の砂堆上に立地する、弥生時代～中世を中心とした集落遺跡である。付近には古墳時代～古代の製塩遺跡として知られる松崎遺跡が存在している。

昆虫化石分析試料は、畠間遺跡で2地点（試料1・2:024SD 第50図）、東畠遺跡で2地点（試料3・4:008SD 第50図）の計4地点で採取されたものである。分析試料の湿潤重量は畠間遺跡が計51.0kg、東畠遺跡の分析試料が約60.0kgであった。発掘調査の成果によれば、試料の相対年代は試料1・2が鎌倉時代前半、試料3・4が古墳時代前期である。

昆虫化石の検出は、畠間・東畠遺跡の発掘調査事務所においてブロック割り法を用いて肉眼で土を細かく砕きながら昆虫化石の検出を行った後、さらに微細な化石を検出するためには水洗浮遊選別法（フローテーション法）にかけて行った。浮遊選別法にあたっては、径200mm、500μmの籃を使用した。



第50図 東畠遺跡・畠間遺跡における昆虫サンプリング位置 (1/500)

第8表 番間遺跡から出土した昆虫化石

生態	和 名	学 名	試料1	試料2	小計
水生 食植性	ガムシ科	Heteropteridae	P1 11		3
	セミガムシ ヒメガムシ	Cochetomidae	82	2	7
	タライハムシ科	Sternopygidae	P1	1	1
	ホウズキムシ科(食植性)	Bronchiidae	11	1	1
地表 食肉性	エンマコガネ属	Sciaridae (Laparocerini)	P1		1
	ロブツルムシマコガネ	Dipteridae sp.	RD P1 36 T1 45	17	
	マグソコガネ属	Dipteridae atripinnis Waterhouse	11	1	25
	マグソコガネ	Ephydidae	11	1	1
	テラヌキムシ科	Acalyptratae	P1 12 11	3	
	テラヌキムシ科(食植性)	Oscinellidae	P1 11	P1	1 1
	カブトムシ科	Carabidae	19 40 P1 11 T1 13 16 19	11	90
	ミズギワタゴムシ属	Bembidion sp.	11	1	
陸生 食植性	ツバヒラタゴムシ属	Elmidae sp.	11	13	2
	ヒラタゴムシ族	Platyninae	12	2	37
	ナガヒラタゴムシ族	Scaritidae pacificae Baud	P1	1	
	ハネカクシ科	Staphylinidae	P1 12 12	3	
	カブトムシ科(食植性)	Carabidae (Pterostichini)	P1 15 12 12	11	
	タカラコガネ属	Agonum sp.	RD P1 19 T1 16 15	11	
	ドウガネイブイ	Amara caprea Boop	12	2	
	ヒコガネ	Amara rufocincta Motschulsky	19 33 P10 193 113 111 127	RD P2 87	201
陸生 ハムグリ類	ハムグリ科	Cyclorrhina	41	1	278
	コアオハムグリ	Protonotaria acuminata (Felderian)	11	1	
	ノコギリカミキリ	Prionus laticollis Motschulsky	11	1	
	ハムシ科	Oxyomelidae	12 11	3	
	ゾウムシ科	Corydalidae	12	3	
	その他の	Coleoptera	RD 14 11 13 10	10	12
	水生甲虫	Aquatic beetle	P1 11	2	
	合計		364	13	377

(検出部位大別)

Elytron(頭部) Antennae(触角) Mouthparts(口器) Head(頭部) Thorax(胸部) Abdomen(腹部) Legs(腿脚)

Elytral(頭部) Antennae(触角) Head(頭部) Thorax(胸部) Abdomen(腹部) Legs(腿脚) Mouthparts(口器) Other(その他)

化石はクリーニングを行ったあと、顕微鏡下で一点ずつ現世の標本と比較しながら同定し、重要なものに関しては写真撮影を行った。同定後の標本は、50%濃度のエチルアルコールを注入し、密閉容器に入れ保管してある。

### III. 分析結果

#### 1. 昆虫化石群集

昆虫化石の同定結果を第8表および図版第51・52に示した。番間遺跡の鎌倉時代前半の溝跡(024SD)から発見された昆虫化石は、試料1で364点、試料2で13点であり、合計で377点であった。試料2については検出点数が少なく、分析結果に有為な差が認められなかったため、本論では試料1と一緒に述べる。また、東畠遺跡の分析試料(試料3・4)に関しては、ブロック割り法およびフローテーション作業を用いて試料1・2と同様に検出作業を行ったが、昆虫化石を得ることはできなかった。

番間遺跡から出土した昆虫化石を分類群ごとにみると科レベルでは8科計75点(19.9%)、亜科レベル2亜科2点(0.5%)、属レベルは5属72点(19.1%)、種まで同定できたものは9種215点(57.5%)であった。これ以外にその他としたものは、12点(3.2%)であった。

検出別部位では鞘翅(Elytron)が最も多く、つづいて腹部(Abdomen)、腿脚(Legs)、前胸背板(Pronotum)などが多く検出された。

生息環境および生態による分類では、食肉性ないし食植性の水生昆虫が1科1亜科2種計7点(1.9%)、食糞性ないし食屍性の地表性歩行虫が2科2属1種計28点(7.4%)、その他

の地表性歩行虫が計2科2属2種57点(15.1%)、陸生の食植性昆虫が3科1亜科1属4種計274点(72.5%)であり、その他の昆虫は計12点(3.2%)であった。なお、ここに記した昆虫化石の点数はいずれも節片ないし破片数であり、生息していた昆虫の個体数を示したものではない。

特徴的な種についてみると、畑間遺跡では、出土した昆虫化石のほとんどが食植生昆虫で占められた。なかでも、野菜類や果樹などの栽培植物を食害する<sup>(3)</sup>昆虫であるヒメコガネ *Anomala rufocuprea* (201点) や、サクラコガネ属 *Anomala* sp. (51点)、同じく食植性昆虫である訪花性のコアオハナムグリ(1点) *Oxycetonia jucunda* や、ハナムグリ亜科 *Cetoniinae* (1点)、ブドウなどの葉を食害するドウガネブイブイ *Anomala cuprea* (2点) といった食植性のコガネムシ類が多産し、昆虫組成の大半を占めた。ヒメコガネは上翅(93点)・前胸背板(36点)・脛腿節(27点)など、多数の部位が検出された。サクラコガネ属の多くはヒメコガネであると考えられるが、みつかったのが破片のみであり、種名の同定までには至っていない。また、同様に食植性昆虫のノコギリカミキリ *Prionus insularis* (1点)、ハムシ科 *Chrysomelidae* (3点) や、ゾウムシ科 *Curculionidae* (3点) の昆虫も検出された。

地表性歩行虫については、雑食性のオサムシ科 *Carabidae* (46点)・ハネカクシ科 *Staphylinidae*、湿潤地表面に生息するミズギワゴミムシ属 *Bembidion* sp. (1点)、ヒラタゴミムシ族 *Platynini* (2点) や、ツヤヒラタゴミムシ属 *Synuchus* sp. (2点)、平地の畑や野原などで見られるナガヒヨウタンゴミムシ *Scarites terricola pacificus* (1点) が検出された。オサムシ科に関しては、前胸背板(11点)や上翅(12点)など、多くの部位が確認された。だが、本分類群に所属する昆虫は破片のみで種の同定をすることが難しく、食性や生活環境も種によって様々であることから、本種の多産から古環境復元に関する詳細な情報を得ることは困難である。

その他の地表性歩行虫に関しては、コブマルエンマコガネ *Onthophagus atripennis* (1点)、エンマコガネ属 *Onthophagus* sp. (17点)、マグソコガネ属 *Aphodius* sp. (1点) やマグソコガネ *Aphodius rectus* (5点) など、人為度の高い環境を指標し、人や動物の糞に集まる食糞性昆虫をはじめ、動物の屍体や糞便を好む食屍性のエンマムシ科 *Histeridae* (3点) が検出された。エンマコガネ属に関しては、朝日遺跡をはじめとする集落遺跡で多く認められる<sup>(3)</sup>コブマルエンマコガネかこの近似種に同定されると考えられる。

水生昆虫に関しては、発見された点数は少なく、池沼などの浅い止水域に生息する食植生のガムシ科 *Hydrophilidae* (3点) や、水田耕作土から多く認められるセマルガムシ *Coelostoma stultum* (2点) やヒメガムシ *Sternolophus rufipes*、湿地に生息するネクイハムシ亜科 *Donaciinae* (1点) がみつかったのみであった。

#### IV. 推定される古環境

本分析では畑間遺跡の鎌倉時代前半の溝(024SD)より、陸生の食植性昆虫を中心とした昆虫化石群を得た。このうち最も多く検出されたのは、成虫がマメ科植物や果樹の葉などを加害するヒメコガネであった。畑間遺跡およびその周辺に果樹・桑・マメ科植物などが植栽された畑作地帯が広がっていた可能性がある。ヒメコガネは、名古屋市若葉通遺跡や一宮市大毛沖遺跡・稲沢市下津北山遺跡などの愛知県内の遺跡をはじめ、静岡県川合遺跡、山梨県宮

沢中村遺跡など、日本各地の中世（鎌倉～室町時代）の遺跡で多産しており、この時代の昆虫群集の大きな特徴のひとつとなっている<sup>(4)</sup>。

ヒメコガネは本来、自然の山林や雜木林の林縁部を構成する小灌木などの葉を加害するにとどまっていたとされる。しかし、人々が人家周辺に果樹や畑作物を多数植栽したことにより、これらを加害するようになり、深刻な害を与えていたと指摘されている<sup>(5)</sup>。一宮市大毛沖遺跡や同大毛池田遺跡・同田所遺跡では、地面に穴を掘り、同じヒメコガネを駆除・投棄した中世の遺構（昆虫土坑）が見つかっており<sup>(6)(7)(8)</sup>、被害の甚大さが伺える。これらの成果から、中世初頭には濃尾平野周辺では土地変更が進行し、森林植生が伐採された人為度が高い空間であったことが推定されている。今回の分析結果から同様の人為的な変更が知多半島北西部に位置する本遺跡においても進んでいたことが指摘できる。

また、地表性歩行虫のエンマコガネ属やマグソコガネなども、中世の多くの遺跡で確認されており、畑作地など今日の人里周辺に普通にみられる昆虫である。これらのことから、化石産出地点およびその周辺は人里生態系が設立していたことが伺える。また、水生昆虫が殆ど検出されなかったことからも、昆虫化石を産出した畑間遺跡の鎌倉時代の溝（024SD）は、人為度の高い搅乱環境下にある溝であり、周辺に安定した止水域は存在しなかったことが伺える。

## VI.まとめ

畑間・東畠遺跡の遺構中より採取した試料より産出した昆虫化石を同定・分析し、その群集組成から当時の古環境を復元した。昆虫群集は、畑作物を加害するヒメコガネやサクラコガネ属など、人里環境を指標する食植性の昆虫で多数が占められていた他、食糞性や食肉性の地表性歩行虫、多数の雑食性の地表性歩行虫が検出された。この結果から化石産出地点およびその周辺には、近現代の農村地帯でみられるような人間の居住域や農耕地が混在する人里空間が展開していたと推定される。

## 謝辞

本分析を行うにあたって、宮澤浩司氏（東海市教育委員会）および国際文化財株式会社のみなさまには試料採取・分析にあたってもご尽力頂き、大変お世話になりました。心より御礼申し上げます。

## 註

- (1) 森 勇一（1999）「昆虫化石よりみた先史～歴史時代の古環境復元」『国立歴史民俗博物館研究報告』第81集 国立歴史民俗博物館。
- (2) 日本応用動物学会編（1987）『農林有害動物・昆虫名鑑』 日本植物防疫協会。
- (3) 奥野絵美・森 勇一（2009）「昆虫化石からみた朝日遺跡の変遷」『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第154集 朝日遺跡Ⅱ』 愛知県埋蔵文化財センター。
- (4) 森 勇一（2009）「遺跡産昆虫から探る人々の暮らし」『BIOSTORY』vol.11 誠文堂新光社。
- (5) 森 勇一（2000）「愛知県下津北山遺跡から産出した昆虫化石の語るもの」『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第88集 下津北山遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター。
- (6) 森 勇一（1996）「愛知県一宮市大毛沖遺跡から得られた昆虫化石群集について」『愛知県埋蔵文

化財センター調査報告書 第66集 大毛沖遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター。

- (7) 森 勇一 (1997)「畑作農村地帯を特徴づける愛知県大毛池田遺跡(中世)の食植生昆虫について」  
『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第72集 大毛池田遺跡』 愛知県埋蔵文化財  
センター。
- (8) 森 勇一 (1997)「畑作農村地帯を特徴づける田所・西上免遺跡の地表性歩行虫」『愛知県埋蔵文  
化財センター調査報告書 第71集 田所遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター。

## 第5章　まとめ

今回の調査では前述のように東畠遺跡1・2地点と畠間遺跡3・4地点の大きく2つに分けられるが、それぞれについて、若干の考察を加えつつまとめたい。

### 1. 東畠遺跡1・2地点について

弥生・古墳時代と中世の大きく2時期に分かれる。

**弥生・古墳時代の遺構** 弥生・古墳時代の遺構について方形周溝墓3基が見つかった。詳細を見れば、007SZと024SZが弥生時代中期後葉に構築され、023SZが古墳時代前期初頭に築かれている。また、007SZの周溝の一部は、古墳時代前期初頭に再掘削され利用されているようである。なお、007SZについては、平面形が不整な梢円形を呈している点、周溝が連続した形で検出されている点は、023SZと024SZが隅の切れる方形周溝墓で平面形が方形であるのと異なる。007SZが方形周溝墓ではなく、祭祀に係わる壇状遺構の可能性もある。いずれにせよ、今回の調査地は、弥生時代中期後葉と古墳時代前期初頭には墓域として利用されていたと考えてよい。また、024SZについて、周溝が掘削直後に砂で埋没し、その後土器が廃棄されている状況が確認できた。

**弥生・古墳時代の遺物** 弥生・古墳時代の遺物について、前期・中期の弥生土器、古墳時代前期の土師器、古墳時代後期の須恵器、土製紡錘車・抉入柱状片刃石斧・両刃石斧・敲石・台石といった石器が出土している。このうち弥生時代前期の櫛玉式・水神平式土器やこれに伴うとみられる抉入柱状片刃石斧は、遺構に伴わないが、知多半島の弥生時代前期の遺跡を考える上で重要な資料である。ほか条痕紋系土器が出土しており、弥生時代前期から中期前葉にかけての遺跡が周辺に存在したことを示す。また、古墳時代後期の須恵器やその後の奈良時代の土師器・須恵器も同様に該期の遺跡の存在が推測できる。

**中世の遺構** 中世の遺構については、地点貝塚1基、土器集積遺構1基、溝4条と土坑3基、ピット群が見つかっている。遺構内から出土した遺物はいずれも13世紀代を示しているが、遺構もこの時期と考えられる。

まず、009SDと019SDは、1地点と2地点の間にある現在の生活道路を挟み平行する溝である。規模や形状が近似するこの2条の溝は道路の側溝として捉えることができ、その場合この現在の生活道路が中世まで遡ると推測できる。そしてこの道を中心の中世の遺構を解釈することができる。2地点の014SDは、方向を変える東端部以外ではこれに直交する溝である。宅地を画する溝と考えることができる。また、この溝に伴う犬走り状の遺構も考慮すると、この溝の北に特別な1区画あると推測できる。そこには014SDに平行する形で001SUが形成されている。その北側にはピット群があり、建物の存在がうかがわれる。しかし、それほど大きな柱ではなく、かつまとまりがなく、どのような建物か復元が難しい。建物があったにせよ、雑舎程度のものしか想定できない。一方014SD北側は、地点貝塚002SMや土坑003SKが形成される。014SDを挟んで北と南では遺構のあり方が異なる。

2地点ではほか出土遺物として12世紀後半の瓦が目立つ。瓦葺建物の存在を可能性として考えれば、2地点北の区画は候補として考えることができるだろう。しかし、その場合建物は調査区外に想定しなければならない。しかし、別の視点として、社山古窯の瓦が京都などに持

ち運ばれた瓦であることを考えれば、流通の中継地として持ち込まれた可能性も否定できない。

1 地点については、019SD や道と平行する溝 010SD がある。その西には廃棄土坑と考えられる 020SK が形成されている。特に宅地等を示す遺構に恵まれず、2 地点のように場の意味を探りにくいが、010SD や 020SK の存在によって、とりあえず何かの区画があつて、その中で土地利用がなされていたことが推測できる。

**中世の遺物** 中世の遺物には中世土師器皿・鍋、瓦器椀、瓦質土器鍋、山茶碗耳皿・小碗・小皿・碗・片口鉢、常滑小形盤・片口、瓦、管状土錐、陶丸、加工円盤が出土している。中世の遺物には包含層出土も含め全体としては、11 世紀後半から 15 世紀前葉の遺物も含まれている。今回の調査地において、遺構は明確ではないが、中世の遺跡が展開し始めるのは 11 世紀後半で、これが 15 世紀前葉まで続くと考えたほうがよいかもしない。特記すべき遺物としては、瓦器椀、瓦質土器鍋、瓦があげられる。ここでの瓦器椀は、近畿地方の瓦器椀の系譜を引く土器であるが、還元焰焼成はしておらず器形も近似しない。内面黒色化している点と見込みにジグザグ状の暗文が入れられている点は近畿地方の瓦器椀を模倣していると推測される。器形は近畿地方の瓦器椀とは全く異なり、むしろ山茶碗に近いのではないかと思われるが、破片が小さく推測の域を出ない。今後の課題である。とりあえず現段階では、近畿地方の瓦器椀の影響を受けた土器として位置づけ、瓦器椀と呼んでおきたい。この類例について管見では愛知県内では見つかなかった。次に瓦質土器の鍋である。これもまた中世前期の瓦質土器としては、愛知県内では見当たらなかった。また、それが受口状口縁をしている点も全くなかった。類例をさぐれば、13 世紀の京都および丹波とその周辺の日本海側に近似した瓦質土器鍋を見出すことはできる（吉岡編 1997）。詳細な比較検討を行っておらず今後の検討課題であるが、現段階ではまず京都周辺の瓦質土器鍋の影響の可能性を想定しておきたい。なお、知多窯においても受口状口縁の鍋を作成しているが、口縁端部を丸く仕上げるなど若干異なる点がある。瓦については軒丸瓦や丸瓦が出土しているが、軒丸瓦については 12 世紀後半から 12 世紀末までのものがみられた。比較的古い段階の軒丸瓦が入っている点も重要であるが、その瓦范の文様と范傷の詳細が明らかになったことは、今後同范関係や范傷の進行に基づく知多窯産瓦の生産地と消費地の関係を解明する上で重要な手がかりとなつてこよう。

## 2. 煙間遺跡 3・4 地点について

遺構としてはほぼ中世のみである。遺物として弥生時代から平安時代までの遺物が出土している。

**中世の遺構** 中世の遺構では堅穴建物跡 1 基、井戸 1 基、溝 10 条、土坑 30 基、貝層 5 基、土器集積遺構 3 基、焼土集積遺構 10 基、ピット 3 基、洪水砂層 1 条があった。この内 II 層の上面の遺構と下面の遺構に分けることができ、下面についてはさらに 4 時期にわけることができた。それを I ~ V 期として整理すると次のようになる。

**I 期**：堅穴建物跡 011SB と溝 041SD がある。024SD などの溝による区画が成立する以前の段階である。ともに正方位に近い方向である。正方位であるということは、古代条里制などが想起され、古い特徴ではなかろうかと思われる。しかし、出土する遺物には山茶碗が含まれており、中世の遺構であることは間違いない。時期を特定する遺物に恵まれていないが、ここではとり

あえず中世前期の古い時期としておく。II期の年代との関係で、I期はおよそ12世紀前半を中心とする時期になってこよう。なお、011SBは窯などではなく、日常生活していた住居とは考えにくい。裏づけとなる有力な出土遺物がないが、作業場として機能していたと考えたい。

II期：024SD、035SD、036SDによって区画される時期である。029SK、038SE、048SK、049SK、052SK、058SKはこの時期の遺構であろう。また、遺物はないが遺構の位置から040SKや061SKもこの時期の遺構と思われる。遺構の主軸は、遺構によりばらつきがあるがN-10°～16°-Eと東にやや振っている。時期は知多窯の中野編年で2型式から6a型式、実年代で12世紀後半から13世紀中葉にかけての時期である。3・4地点中央に024SDと036SDによって区切られた区画が成立する。この区画は東西約17mを計る。東辺を画する024SDは調査区南端で収束しつつあり、西辺を画する036SDもb3・c3区の搅乱を超えて南には続かない。これは東西に溝が切れている部分があり、この区画の出入り口が開いていたことを示している。このあたりをこの区画の東西方向の中軸線と仮定すると南北の幅は約16mとなり、この区画はほぼ正方形の区画であったと推測できる。区画の内部には井戸038SEがある。この井戸は先ほど仮定した中軸線上にあり、おそらく区画のほぼ中央に位置するものと思われる。ただし、中野編年の4型式ごろ、この井戸は廃棄されて埋められているようである。また、036SDの西側には約1m離れて036SDに平行する溝035SDがある。036SDと035SDはセットになってこの区画の西辺の境界を示している遺構と考えられる。なお、柵や壙の痕跡はこの時期のこの区画では見つからず、溝のみで区切られているとしかいえない。また、縄袖陶器火舎香炉やI群の瓦はこの時期に伴うものである。このような遺物は一般的な集落とは考えられず、寺院跡を想定したい。しかし建物跡が全く確認できておらず、あくまで想定に留まる。

III期：地点貝塚021SM、025SM、026SM、027SMが形成され、024SD・036SDが埋没する時期である。そのほか028SKがある。知多窯の中野編年の6a型式から7型式、藤澤編年の尾張型および東濃型第7型式から第8型式に当たる。実年代では13世紀中葉から14世紀前葉になる。024SDや036SDが埋まりきらず窪み状に残り、その中に地点貝塚が形成される。025SMと027SMは比較的早い時期に、026SMと021SMはやや遅れて形成されたと考えられる。026SMの時期は、遅くとも藤澤編年の第8型式であり13世紀末から14世紀前葉に位置づけられる。なおこの区画ではこの時期廃棄が盛んに行われおり、この点前のII期とは非常に異なっている。区画が維持されなくなり、廃棄の場になった時期と捉えられよう。

IV期：023SD、034SD、050SD、057SDによって区画される時期である。この時期の遺構には土器集積遺構043SU、044SU、045SUがあり、そのほか031SK、032SK、039SK、046SK、067SKがある。遺構の主軸はこれも遺構によって若干のばらつきがあるが、N-4°～14°-Eと前時期の遺構に比べ真北よりである。この時期はII期に成立した区画が拡張される時期である。すなわち東辺から東北隅を023SD、北辺を057SD、西辺を034SDによって区切られた区画が成立する。東西は約27mを計る。034SDはa3・b3区境界付近で東へ直角に屈曲するので、西辺については前時期と同様、区画への出入り口とみられる部分があるが、東辺では023SDが切れるところがない。西辺の出入り口とみられる部分を利用して中軸線を仮定して計れば南北は約17mに一応復元できる。この時期の区画は拡張して東西に長い長方形になった可能性がある。また、034SDの東側には約1.5m離れて034SDに平行する溝050SDがある。034SDと050SDはセットになって

この区画の西辺の境界を示している遺構と考えられる。なお、この時期も柵や塀の痕跡はこの区画では見つからず、溝のみで区切られているとしかいえない。

この時期について、知多窯の中野編年の8型式から10型式、藤澤編年の尾張型および東濃型第10型式から第11型式に当たると考える。Ⅲ期の遺構とⅣ期の遺構には切り合い関係がなく、またⅣ期の遺構の出土遺物にはこれより古い時期の遺物も少なからず出土しており遺構の形成時期が特定できていない。しかし、状況として次のように考えられる。すなわち、024SD・035SD・036SDの区画から023SD・034SD・050SD・057SDの区画への拡張が連続的に行われたとした場合、拡張した区画内には024SD・036SDが埋まらずに壅みとして残っており、そこで廃棄行為が行われている状況を想定しなければならない。023SDや057SDを掘削する際には024SDを埋めなければ作業が困難に思われるが、埋めた痕跡が認められない。いずれも、不自然と思われる。そこで区画の拡張を連続したものと考えず、時間を置いて行われたと考えたい。つまり024SD・035SD・036SDが廃棄等により完全に埋没した後に区画の拡張が行われたと考えれば、こうした不自然さは解消される。

また、Ⅳ期とした遺構からは15世紀前葉から中葉の遺物は多数出土し、この時期の遺構とすることに問題はない。また、調査区全体の出土遺物は、Ⅲ期との間で、藤澤編年の第9型式の遺物が欠落している。そこで、藤澤編年の尾張型・東濃型第10～第11型式の時期、すなわち15世紀前葉から中葉の時期をⅣ期と考えた。

ただし、ここでも問題が1つある。045SUから出土した常滑の茶壺写しの壺(103)である。中野編年の12型式、16世紀後半に位置づけられ、この遺構の年代観と矛盾する。調査区全体を見ても16世紀台の遺物はほとんどない。とりあえず、Ⅱ層上面出土の焼土を天文年間の火災と関連付けて解釈しようとしているので、Ⅱ層下面の遺構は新しくとも16世紀前葉までと考えている。しかし、この焼土の由来が別の時期のものであることがわかれば、Ⅱ層上面・下面の年代観を修正して位置付けることも可能になってくるかもしれない。とりあえず、現段階ではⅣ期の年代観はこのままとして常滑の壺の問題を指摘しておくこととする。

この時期には、034SDに土器集積遺構が形成される。043SU、044SU、045SUがそれである。044SUは「隆弥」や「六親 七世父母」墨書土師器皿を含め、土師器皿を組み合わせて034SDの埋没途中の壅みに埋納したものである。この時期のまじないに係わる祭祀遺構としても重要なである。また、この時期の土師器皿の一括資料としても価値がある。また、Ⅱ群の瓦はこの時期に伴うものである。それはこの時期、この瓦を葺く建物が造営されたことが推測できる。Ⅱ群の瓦の出土地点は4地点西区に偏っており、4地点の西に建物はあったと推測したい。また「寺」墨書の山茶碗もこの時期のものであり、その建物が寺院である可能性が高い。

**V期：**Ⅱ層上面の遺構がこれにあたる。主に022NRやほかの洪水砂層の堆積後である。013SMと037SD、焼土集積遺構019SU-I～10がある。時期は16世紀以降であるが、遺構からこの時期を示す遺物がほとんどないため、明確に述べることは難しい。013SMは貝を多量に含んだ遺構であるので一応貝塚として扱っているが、報告でも述べたとおり、道路遺構の可能性があると考えている。焼土集積遺構は、建物の土壁が火災等で被熱したものを見棄した遺構である。天文年間の龍雲院火災があるいは弥勒寺寺伝の織田信長の兵火と関連付けて考えたい。この地が集落の廃棄の場であったことを示すものである。

**中世の遺物** 中世の遺物については、中世土師器皿・羽釜・鍋、瓦質土器鍋・花瓶、山茶碗の輪花碗・小皿・碗・片口鉢、綠釉陶器火舍香炉、常滑鉢・播鉢・甕・壺・広口瓶・三筋壺・片口椀・片口・盤・羽釜、瀬戸美濃平碗・鉢皿・直縁大皿・四耳壺・甕・桶、白磁碗・皿・青磁碗・皿、中国産陶器茶入・瓦、錢貨、木球、板材、折敷底板、建築部材、柄、たたり未製品など木製品がある。特記すべき点として4点あげられる。

まず、知多半島の中世の良好な一括遺物が出土したことがあげられる。今回の発掘調査で中世前期の一括資料が得られたことから、これまであまりよくわからなかつた知多半島の中世の土器様相がある程度わかるようになった。それは具体的には、II期の038SE出土遺物、024SD下層・036SD出土遺物、III期の026SM出土遺物、IV期の034SD出土遺物、044SU出土遺物である。それに伴い興味深い点がいくつか明らかになった。それはまず土製煮炊具が特異であること。これは東畠遺跡の項でも指摘したが、受口状口縁の瓦質土器の鍋がII期の一括資料に含まれる。これは愛知県内ではこの時期の遺跡では見られなかつた種類であり、器種・器形である。また山茶碗のあり方について、この遺跡は知多窯という生産地に近いが、13世紀中葉以降瀬戸窯産山茶碗や東濃型山茶碗が入ってきてていることが明らかとなった。また、044SU一括資料ではIV期の土師器皿の組み合わせを知る上でも貴重な資料である。かつ墨書き土師器皿の墨書きの内容はまじないの内容や意味がある程度つかめるものであり、当時の信仰を知るうえで貴重な資料である。

綠釉陶器火舍香炉は特筆すべき遺物である。この時期については型式学的検討が必要であるが、ここでは出土状況からみて藤澤編年の尾張型第3～第4型式に伴うものではないかと思われる。古代以来の猿投の綠釉陶器生産の最末に位置づけられる資料である。

瓦質土器の鍋のほか花瓶が出土している。13世紀代の瓦質土器生産は愛知県内ではこれまで知られてこなかつた。鍋の器形も特異であるが、その生産も愛知県内では特異な存在である。器形とともに由来を探る必要がある。

瓦については2種類の瓦を確認した。I群とした瓦は12世紀後半の知多窯産の瓦である。なかでも杏葉唐草文を配する軒平瓦は社山古窯や論田古窯で生産され、遺跡近くの觀福寺の所蔵品にある。また同文の軒平瓦は熱田神宮でも採取されており、関係の解明が待たれる。畑間遺跡では、これと三巴文の軒丸瓦がセットになると考えられる。II群とした瓦は14世紀中葉に位置づけられる。生産地不明である。焼し焼きにより黒色化しているが、還元焰焼成が不十分で、一部赤く発色している。連珠文軒平瓦と三巴文軒丸瓦がセットになる。瓦当文様や瓦当貼り付け技法など畿内の影響がみられるが、凹面に布目痕がないなど全て畿内的ではない。この瓦の製作地や分布圏、時期的変遷や系譜の解明が今後の課題である。

このようにみると、遺物については特異な点が多い。瓦質土器鍋や綠釉陶器火舍香炉、瓦など、これから検討すべき課題も多い。また、瓦や火舍香炉、花瓶、三筋壺など集落遺跡ではあまり見ない遺物が出土することから、寺院跡の可能性を遺物からも指摘できる。今回挙げた課題を追究する中で、畑間遺跡やそれを含む知多半島の中世遺跡の特徴が改めて明らかにされてくるであろう。

**弥生時代から古代の遺物** 弥生時代前期・中期・後期の弥生土器や石器、奈良・平安時代の土師器・須恵器・製塙土器、平安時代の灰釉陶器が出土している。いざれも遺構からの出土では

なく、包含層ないし後世の遺構からの出土である。付近にこうした時期の遺跡の存在が予想される。

(桐山)

## 引用参考文献

- 石川松衛 1928 『横須賀町誌』 愛知県史蹟編纂会・知多郡横須賀町役場。
- 立松彰 1997 『愛知県東海市東畠遺跡等試掘調査報告』 東海市教育委員会。
- 立松彰ほか 1998 『知多弥勒寺遺跡発掘調査報告』 東海市教育委員会。
- 立松彰・永井伸明 2004 『愛知県東海市畑間遺跡発掘調査報告』 東海市教育委員会。
- 長島広・柴田直光 1999 『愛知県 知多半島遺跡詳細分布調査 報告書』 愛知県教育委員会。
- 永井伸明・宮澤浩司 2007 「伊勢湾を望む海辺の遺跡－東畠遺跡等発掘調査概報－」 東海市文化調査委員会編『研究報告とうかい』創刊号掲載 東海市教育委員会。
- 半田市立博物館 1993 『知多の古瓦』
- 文化庁文化財保護部 1975 『全国遺跡地図』23 愛知県 国土地理協会。
- 福岡猛志 1991 『知多の歴史』 松嶺社。
- 宮澤浩司 2009 「伊勢湾を望む海辺の遺跡(2)－平成19年度畑間・東畠遺跡発掘調査概要報告－」 海市文化財調査委員会編『研究報告とうかい』第2号掲載 東海市教育委員会。

遺物については下記の参考文献に拠った。

## &lt;弥生土器&gt;

- 永井宏幸・村木 誠 2002 「尾張地域」『弥生土器の様式と編年－東海編－』所収 木耳社。
- 赤塚次郎 1992 「山中式土器について」『山中遺跡』(愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第40集) 所収 (財) 愛知県埋蔵文化財センター。
- 石黒立人・宮腰健司 2007 「伊勢湾周辺地域における弥生土器編年の概要と課題」『伊藤秋男先生古希記念考古学論文集』所収 同刊行会。

## &lt;土師器&gt;

- 赤塚次郎 1990 「廻間式土器」『廻間遺跡』(愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第10集) 所収 (財) 愛知県埋蔵文化財センター。
- 赤塚次郎 1997 「廻間I・II式再論」『西上免遺跡』(愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第73集) 所収 (財) 愛知県埋蔵文化財センター。

## &lt;須恵器&gt;

- 齊藤孝正・後藤健一編 1995 『須恵器集成図録 第3巻 東日本編I』 雄山閣出版。
- 尾野善裕 2000 「猿投窯(系)須恵器編年の再構築」『須恵器の出現から消滅－猿投窯・湖西窯編年の再構築－』(第1回東海土器研究会資料) 所収 東海土器研究会。

## &lt;灰釉陶器&gt;

- 齊藤孝正 2000 「猿投窯出土の灰釉・綠釉陶器碗・皿類の変遷」『越州窯青磁と綠釉・灰釉陶器』(『日本の美術』第409号)掲載 至文堂。

## &lt;鎌倉・室町時代土師器鍋・釜&gt;

## 引用参考文献

吉岡康暢編 1997 『[共同研究] 中世食文化の基礎的研究』(『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集) 国立歴史民俗博物館。

北村和宏 1996 「尾張平野における鎌倉・室町時代の煮炊具の編年」『年報平成7年度』所収 (財)愛知県埋蔵文化財センター。

同 1996 「尾張の『伊勢型鍋』『鍋と甕 そのデザイン』(第4回東海考古学フォーラム資料集)所収 東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会。

### <山茶碗>

藤澤良祐 1994 「山茶碗研究の現状と課題」『三重県埋蔵文化財センター研究紀要』第5輯 三重県埋蔵文化財センター。

岡本直久 2005 「山茶碗編年の現状について」『全国シンポジウム 中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～資料集(第2版)』同シンポジウム実行委員会。

### <常滑>

赤羽一郎・中野晴久 1994 「生産地における編年について」『シンポジウム 中世常滑焼を追って』資料集所収 同シンポジウム実行委員会。

中野晴久 1996 「常滑羽釜」『鍋と甕 そのデザイン』(第4回東海考古学フォーラム資料集)所収 東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会。

同 2005 「常滑・涅美」『全国シンポジウム 中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～発表要旨集(第2版)』所収 同シンポジウム実行委員会。

### <瀬戸美濃>

愛知県史編さん委員会編 2007 『愛知県史』別編窯業2(中世・近世 瀬戸系) 愛知県。

藤澤良祐 2009 『中世瀬戸窯の研究』 高志書院

### <中国産磁器>

横田賢次郎・森田 勉 1978 「大宰府出土の輸入陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』4 所収 九州歴史資料館。

森田 勉 1982 「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2掲載 貿易陶磁研究会。

上田秀夫 1982 「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No.2掲載 貿易陶磁研究会。

山本信夫 1995 「中世前期の貿易陶磁器」中世土器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』所収 真陽社。

### <石鍋>

木戸雅寿 1995 「石鍋」中世土器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』所収 真陽社。

(註) 煙間遺跡・東畠遺跡出土遺物について専門の研究者に実見していただいて、ご教示をいただいている。瀬戸・猿投窯産山茶碗と瀬戸美濃については藤澤良祐氏、知多窯産山茶碗と常滑については中野晴久氏、中世の土器・陶磁器全般、とりわけ綠釉陶器については尾野善裕氏、中国産陶磁器については山本信夫氏、中国産茶入については稻垣正宏氏、瓦については柴垣勇夫氏、小林康幸氏、芦田淳一氏、浜中邦弘氏、梶原義実氏、中村信幸氏にご教示をいただいた。記して謝意を表する。

第9表 東畠遺跡出土器・陶磁器観察表

第9表 東畠遺跡出土土器・陶磁器遺物観察表

1. 器種・式・その他用語については本文の遺物の記載で準じた文獻に基づく。  
 2. 残存率は、基本的に口縁部にて測定し、12分のいくつまで記載した。ただし底面破片の場合を底部で計測した。  
 3. 評価付きの数値について、底径・口径では復元径を、器高では残存高を示す。  
 4. 内面と外面上の項目では、表面技術を記載した。  
 5. 斧土は、基本的に砂粒を含むか否かのみを記載した。  
 6. 色調上、断面の色調を『新編標準土色図』(例言参照)に基づき記載した。  
 7. 備考のdで始まる番号は取り上げ番号である。

番号	調査ID	グリッド	層位・遺構	產地	材質	器種	残存率	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	内面	外面	斧土	色調	時期	備考
1	1	b4	015BD	弥生土器	太頭壺	2/12	(12.2)	(19.2)	-	寧誠	寧誠	砂粒を含む	2,517/1 灰白色	古井式	d106	
2	1	b4	015BD	弥生土器	壺	12/12	-	(7.3)	5.0	寧誠	タテハケ	砂粒を含む	外側 10188/3 浅黄褐色 内側 2,515/1 黄灰色	弥生時代 中期?	d106	
3	2	c4	015BD	土師器	長頸壺	3/12	(11.7)	22.9	4.2	上平 ナビ 下平 ユビオ サヌ・板ナ	タテハケラミ ガの後、各 部ココのヘタ シガキ	砂粒をほ とんど含 まない	10188/4浅 黄褐色	圓窓II式	d105	
4	1	c3	098SD	土師器	広口壺	-	-	(23.4)	-	ナナメハケ	底部・突巻の 上に刻印、 体部・タテの ヘタミガキ	砂粒をほ とんど含 まない	外側 10187/3 にら・黄 褐色 内側 2,516/6 黄灰色	圓窓II式	d091	
5	2	d5	017SD	土師器	広口壺	12/12	15.9	31.0	6.8	口縁部 ヨコ ハケ 体部 板ナ	タテハケ・ナ ナメハケ	砂粒を含 む	10188/3 浅黄褐色	圓窓II式	d109	
6	2	c11	015SK	弥生土器	深鉢	1/12	(22.0)	(3.3)	-	ナビ	(穿孔)	砂粒を含 む	10186/1 褐色	理工式	条痕紋系 土器	
7	2	b10	014SD	弥生土器	鉢	-	-	(1.0)	-	ヨコナナ	柔直	砂粒を含 む	7,518/6 浅黄褐色	内傾口縁 土器		
8	2	c9	014SD	弥生土器	深鉢	1/12	-	(2.5)	(6.0)	ナビ	貝殻柔直	砂粒を含 む	10188/3 浅黄褐色	条痕紋系 土器		
9	2	b8	096SD	弥生土器	上層 造	-	-	(3.9)	-	ナビ	貝殻柔直	砂粒を含 む	5106/6 褐色	水神平式		
10	2	b8	096SD	弥生土器	上層	-	-	(3.4)	-	ナビ	貝殻柔直	砂粒を含 む	10185/2 灰褐色	水神平式 土器		
11	2	b9	包合層	土師器	器台	-	-	(6.3)	-	寧誠	ヘタミガキ	砂粒をほ とんど含 まない	10187/4 にら・黄 褐色	圓窓II式	d096	
12	2	b10	094SD	弥生土器	太頭壺	12/12	21.0	(13.9)	-	ユビオサエ・ ナナ	ナビ・ヘラ形 斜格子紋後 ナビナ	砂粒を含 む	31/4 灰白色	古井式 新規版	d107	
13	2	b9	094SD	弥生土器	細頭壺	12/12	7.0	22.2	4.5	ユビオサエ・ ナナ	前縄文4条・ 刻葉紋後段、 タテハケ後段 本單位の縪部 直縫紋12單 位、本單位の 縪部直縫 紋12單位 後、ヨコハケ 後タテハケ	砂粒を含 む	7,518/6 浅黄褐色	高麗式	d094	
14	2	b9	094SD	弥生土器	太頭壺	-	-	(24.7)	-	上平 ナビ ユビオサエ 下平 ヨコハケ ナナ	上平 ヘラ形 斜格子紋の後 16本單位の縪 部直縫紋後段 本單位の縪部 直縫紋12單 位、本單位の 縪部直縫 紋12單位 後、タテガ キのイナ ナ・ヨコミガ キ	砂粒を含 む	7,515/4 にら・黄 褐色	古井式	d078・ d079	
15	2	b9	094SD	弥生土器	太頭壺	5/12	(21.2)	(3.0)	-	ヨコナナ	ヨコナナ	砂粒を含 む	10186/4 にら・黄 褐色	古井式	d90	

第9表 東畠遺跡土器・陶磁器観察表

番号	調査区	グリッド	層位・遺構	高地 材質	器種	残存率	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	内面	外面	胎土	色調	時期	備考
16	2	b10	004SD	弥生 土器	細頸壺	-	-	(9.1)	-	板ナデ	肩 2条單位の横縞と縦紋の後沈線によると、外側に1条單位の横縞と縦紋の後沈線に上り下りを50回 ハラミガキ	砂粒を含む	2.5H6/3 にぶい黄色	回頭紋系 上2段 (高麗 式?)	d098
17	2	b10	004SD	弥生 土器	高环	5/12	(18.5)	(4.2)	-	摩滅	摩滅	砂粒を含む	3H6/6 褐色	高麗式	d074
18	2	b10	004SD	弥生 土器	甕	11/12	23.2	(21.9)	-	上半 粗いいハ ケメ 下半 ケズリ	タテハケの後 タタキ。その 後下半タテハ ケ	砂粒を含む	3H6/6 褐色	高麗式	d087
19	2	b10	004SD	弥生 土器	甕	9/12	(21.0)	(15.8)	-	上半 粗いいハ ケメ 下半 ケズリ	タテハケの後 タタキ。その 後下半タテハ ケ	砂粒を含む	3H6/6 褐色	高麗式	d073
20	2	b9	004SD	弥生 土器	甕	3/12	(20.8)	(19.2)	-	上半 ハケメ 下半 ケズリ	タテハケの後 タタキ。その 後下半タテハ ケ	砂粒を含む	3H7/6 明黄色	高麗式	d092
21	2	b10	004SD	弥生 土器	甕	12/12	19.5	(12.20)	-	上半 ハケメ 下半 ケズリ	タテハケの後 タタキ。その 後下半タテハ ケ	砂粒を含む	3H6/4 にぶい黄色	高麗式	d087
22	2	b10	004SD	弥生 土器	台形甕	12/12	-	(14.5)	7.8	ケズリ	タテハケの後 タタキ。その 後下半タテハ ケ	砂粒を含む	3H6/4 にぶい黄色	高麗式	d072
23	2	b9	012SU	弥生 土器	細頸壺	12/12	-	(23.2)	5.8	上半 ハケメ 下半 板ナデ	横伏紋・タ ケメ後2条單位の横縞と縦 縞は2条單位の横 縞と波状紋 底径2倍・ ヨコハケ後タ ケハケ	砂粒を含む	3H7/4 にぶい黄色	高麗式	d100
24	2	b9	012SU	弥生 土器	甕	7/12	(29.8)	(21.4)	-	上半 粗いいハ ケメ 下半 ケズリ	タテハケ後 下半タテハケ	砂粒を含む	3H6/6 褐色	d01+d02	
25	2	b9	012SU	弥生 土器	甕	9/12	18.0	(29.5)	-	上半 ハケメ 下半 ケズリ	上半 タタキ 後タテハケ。 その後 下半タテハケ	砂粒を含む	3H6/6 にぶい褐色	高麗式	d099
26	2	b9	001SU	瓦質 土器	甕	2/12	(26.6)	(14.1)	-	板ナデ	摩滅	砂粒を含む	2.5H7/3 浅黄色	d022	
27	2	b9	001SU	瓦器	甕	1/12	-	-	(8.0)	ハラミガキ	ナデ	砂粒を含む	2.5H7/4 にぶい黄色		
28	2	c10	002SM	山茶碗	小皿	12/12	8.2	2.0	6.1	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	2.5H7/3 浅黄色	多型 中野5型式	d093
29	1	d4	包含層	土師器	甕	2/12	(23.8)	(4.7)	-	摩滅	ヨコナデ	砂粒を含む	2.5H7/2 灰黄色	伊勢型 d034	
30	1	d3	包含層	山茶碗	耳皿	12/12	11.0	3.3	4.8	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含 まない	2.5H7/1 灰白色	知多型 藤澤瓦茶 型第3型式	d025
31	2	b8	包含層	山茶碗	小皿	8/12	5.0	3.5	4.7	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含 まない	2.5H7/1 灰白色	慈雲院 藤澤瓦茶 型第3型式	d067
32	1	d3	包含層	山茶碗	小皿	5/12	(9.4)	3.3	(3.8)	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	2.5H7/2 灰黄色	知多型 中野1型 式	d029

第9表 東畠遺跡出土軒丸瓦観察表

番号	調査区	グリッド	位置、構造	產地 材質	器種	残存率	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	内面	外面	胎土	色調	時期	備考
33	1	d3	包含層	山茶園	小瓶	5/12	(9.6)	3.2	4.6	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒・繊維を含む	10YR7/3 に5Y4(黄 褐色)	知多葉 中野2型式	-d026
34	1	e3	包含層	山茶園	小瓶	3/12	-	(2.2)	(5.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	10YR6/4 に5Y4(黄 褐色)	知多葉 藤澤尾張 型第1型式	
35	1	e3	包含層	山茶園	小瓶	2/12	-	(1.7)	(4.2)	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	2,5Y7/2 灰黃色	知多葉 藤澤尾張 型第1型式	
36	1	e3	包含層	山茶園	小瓶	7/12	8.0	1.9	5.0	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	2,5Y7/1 灰白色	知多葉 中野4型式	-d039
37	2	b8	096SD	山茶園	小瓶	7/12	7.7	1.8	4.4	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	2,5Y6/2 灰黃色	知多葉 中野4型式	-d063
38	2	c7	包含層	山茶園	小瓶	4/12	(8.3)	1.7	3.9	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒・繊 維を含む	10YR8/1 灰白色	知多葉 中野5型式	-d064
39	2	b10	南トレンチ	山茶園	小瓶	7/12	8.2	1.8	4.5	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	2,5Y6/2 灰黃色	知多葉 中野5型式	
40	1	e4	包含層	山茶園	小瓶	4/12	(8.7)	2.0	5.5	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒・繊 維を含む	2,5Y8/1 灰白色	廻戸型 藤澤尾張 型第1型式	内部に板 状工具と 調整工具 -d033
41	2	c8	096SD	山茶園	小瓶	5/12	(8.0)	1.8	5.0	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含 む	2,5Y8/2 灰白色	知多葉 中野6a型 式	-d062
42	2	b8	096SD 上層	山茶園	小瓶	8/12	7.2	2.8	3.3	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含 む	10YR7/3 に5Y4(黄 褐色)	中野1型式 に併用 か?	-d085
43	1	b4	包含層	山茶園	瓶	1/12	(12.9)	5.0	(6.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒・繊 維を含む	2,5Y8/1 灰白色	廻戸型 藤澤尾張 型第9型 式	-d041
44	1	b4	包含層	山茶園	瓶	4/12	(13.0)	4.3	5.6	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒・繊 維を含む	2,5Y8/1 灰白色	廻戸型 藤澤尾張 型第10型 式	-d028
45	1	e4	包含層	山茶園	瓶	3/12	(11.8)	(3.7)	(3.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含 む	2,5Y7/1 灰白色	東濃型大 輪東1号葉 式	
46	2	c8	包含層	山茶園	片口鉢	3/12	-	(9.7)	(15.6)	ロクロナデ	ロクロナデ 回転ヘラケス リ	砂粒を含 む	2,5Y6/2 灰黃色	知多葉中 野5型式	内部に多 量の自然 釉付着
47	2	b10	包含層	常滑	小形盤	2/12	(14.0)	3.5	(13.0)	ヨコナデ	ヨコナデ	砂粒を含 む	10YR7/4 に5Y4(黄 褐色)	(不明)	-d001
48	2	c8	包含層	常滑	盤	1/12	(37.0)	(4.1)	-	ヨコナデ	ヨコナデ	砂粒を含 む	10YR7/4 に5Y4(黄 褐色)	知多葉 中野4型式	-d054
49	2	c8	096SD	常滑	盤	1/12	(36.2)	(6.8)	-	ヨコナデ・板 オサエ後ナデ	ヨコナデ・板 ナデ後ナデ	砂粒を含 む	10Y5/1 鶴灰色	口縁部厚 利鉢等、 押出あり	-d058
50	1	e4	010SD	常滑	片口	2/12	(21.6)	(10.0)	-	ナデ	ナデ・ヘラケ ズリ	砂粒を含 む	10YR7/3 に5Y4(黄 褐色)	知多葉 中野6a型 式	-d082
51	2	c9	014SD	瀬戸美濃	平碗	底部 3/12	-	(3.7)	(7.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含 む	2,5Y8/1 灰白色	古瀬戸中 高台内に 鉢出	















第14表 煙間遺跡出土土器・陶磁器観察表

番号	調査ID	グリッド	層位・遺構	産地 材質	器種	残存率	口径 (cm)	25高 (cm)	底径 (cm)	内面	外面	粘土	色調	時期	備考
182	4	e2	022R	弥生 土器	盃	-	(6.0)	8.6	底部 12/12	ナデ	タテハケ	砂粒を含 む	10TB6/1 褐色	弥生時代 前期～中期	
183	4	b3	043S	弥生 土器	広口加飾 盃	1/12	(17.0)	(1.9)	-	ナデ	ナデ	砂粒を含 む	7. TB8/4 浅黄褐色	山中式	
184	3	f2	026S	弥生 土器	台付盃	4/12	-	(3.9)	(9.6)	ナデ	ヘラミガキ	砂粒を含 む	7. TB7/4 浅黄褐色	山中式	
185	4	b2	036SD	弥生 土器	盃	-	-	(5.9)	-	板ナデ	ナデ	砂粒を含 む	10TB6/4 に点・黃 褐色	山中式	
186	4	d3	038SE	蒸煮器	环	4/12	(14.0)	(2.8)	-	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含 む	10TB8/4 浅黄褐色	黒蟹14号 式?	
187	3	f2	包含層	灰釉 陶器	碗	3/12	-	(2.2)	(7.8)	ロクロナデ	回転ヘラケズ リ	砂粒を含 む	2. 5TB/1 灰白色	黒蟹90号 式	

第15表 煙間遺跡出土軒丸瓦観察表

第15表 煙間遺跡出土軒丸瓦観察表

1. 植込みの数値について、複数では複元数を、長さ・厚さでは残存値を示した。
2. 四面と凸面の項目では調整技術を記載した。
3. 施土は、基本的に砂粒を含むか含まないかを記載した。
4. 色調は、断面の色調を『新編標準上色版』(例言参照)に基づき記載した。
5. 検索の内で始まる番号は取り上げ番号である。

番号	グリット	層位・遺構	種類	底径 (cm)	内径・直径 (cm)	内径数値	外径幅 (cm)	外径高さ (cm)	長さ (cm)	厚さ (cm)	四面	凸面	施土	色調	備考
188	c3	024SD下層	軒丸瓦	(15.2)	(11.8)	30	1.7	1.0	(3.2)	—	—	—	砂粒を含む	N7.0 灰白色	灰文2個残存 d013
189	e1	包穴層	軒丸瓦	—	—	30	—	—	(1.6)	—	—	—	砂粒を含む	2.0H7.2 灰黄色	灰文5個残存
190	e1	057SD	軒丸瓦	(14.8)	(12.6)	(不規)	1.1	1.0	(3.1)	—	—	—	砂粒を含む	2.0H7.2 灰白色	灰文2個残存 d033
191	e1	022NR	軒丸瓦	—	—	30	—	—	(1.6)	—	—	—	砂粒を含む	2.3H8.1 灰白色	灰文2個残存 d044
195	a3	031SK	軒丸瓦	10.3	7.8	30	1.4	1.2	20.4	1.1	ナデ	ヘラケズリの後ナデ	砂粒、雜物を含む	2.3H8.3 灰黄色	三線なし 灰文14個 d034

第16表 煙間遺跡出土軒平瓦観察表

1. 植込みの数値について、残存値を示した。
2. 四面と凸面の項目では調整技術を記載した。
3. 施土は、基本的に砂粒を含むか含まないかを記載した。
4. 色調は、断面の色調を『新編標準上色版』(例言参照)に基づき記載した。
5. 検索の内で始まる番号は取り上げ番号である。

番号	グリット	層位・遺構	種類	瓦当数値	瓦当面 (cm)	内径厚さ (cm)	土外区 (cm)	下外区 (cm)	外区高さ (cm)	底さ (cm)	厚さ (cm)	四面	凸面	施土	色調	備考
192	e2	包穴層	軒平瓦 吉葉唐草文	2.5	4.0	2.0	1.5	0.5	(3.6)	—	(布目)	—	砂粒を含む	10H6.5 褐色	d023	
193	e1	036SB	軒平瓦 吉葉唐草文	7.3	3.9	2.0	1.4	0.5	(6.4)	2.8	(布目)	ナデ	砂粒を含む	10H7.3 灰白色	d0161	
194	f2	包穴層	軒平瓦 吉葉唐草文	(6.9)	3.9	(1.9)	1.1	0.5	(5.2)	—	(布目)	—	砂粒を含む	10H6.1 褐色		
196	a3	031SK	軒平瓦 通床文	3.6	1.8	1.1	0.7	0.6	(9.1)	1.6	ナデ	ヘラケズリ	砂粒を含む	10H7.4 正当幅21.1cm 灰文15個 d026-d031		
197	b2	022NR	軒平瓦 通床文	3.7	1.9	1.1	0.7	0.6	(5.1)	1.8	(摩滅)	ヘラケズリ	砂粒を含む	7.0H7. 3 正文9個残存 d025		
198	a3	031SK	軒平瓦 通床文	3.7	1.9	0.9	0.9	0.7	(6.7)	1.4	ナデ	ヘラケズリ	砂粒を含む	10H7.3 灰文15個 d033		
199	a3	包穴層	軒平瓦 通床文	(3.6)	1.8	0.9	0.9	0.5	(2.2)	—	—	—	砂粒を含む	2.0H7.1 灰白色	d019	

第17表 煙間遺跡出土瓦観察表

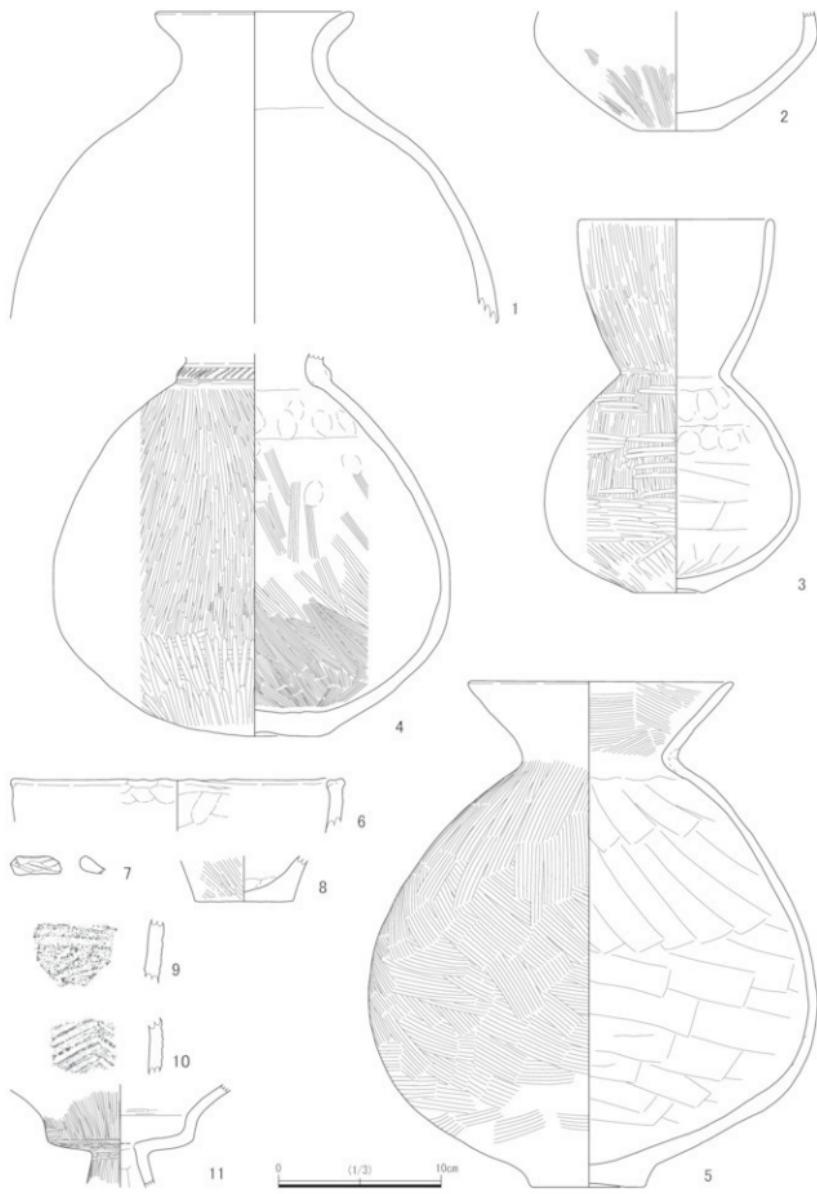
1. 新瓶付きの数値について、残存値を示した。
2. 四面と凸面の項目では調整技術を記載した。
3. 施土は、基本的に砂粒を含むか含まないかを記載した。
4. 色調は、断面の色調を『新編標準上色版』(例言参照)に基づき記載した。
5. 検索の内で始まる番号は取り上げ番号である。

番号	グリット	遺構	種類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	四面	凸面	施土	色調	備考
200	b2	022NR	平瓦?	(6.0)	(6.1)	2.5	ナデ	ナデ	砂粒を含む	2.0H6.1 黄褐色	
201	b3	034SD	面戸瓦	5.8	8.6	1.5	ナデ	ヘラケズリ の後ナデ	砂粒を含む	10H8.2 灰白色	d062



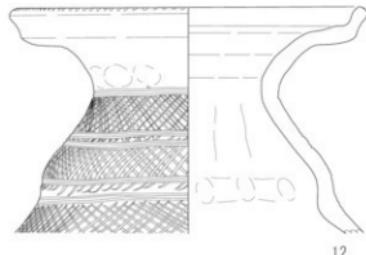


# 図 版

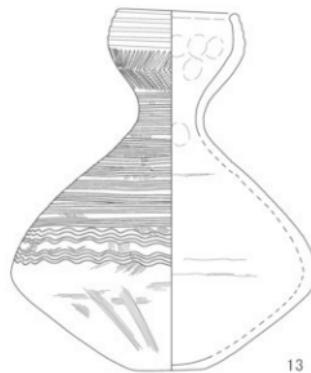


東畠遺跡1・2地点出土土器実測図(1/3)(1)

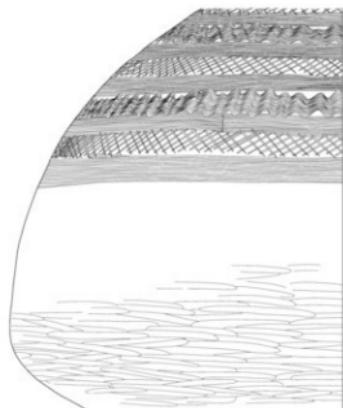
図版第 2



12



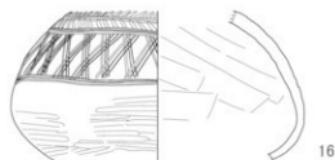
13



14



15



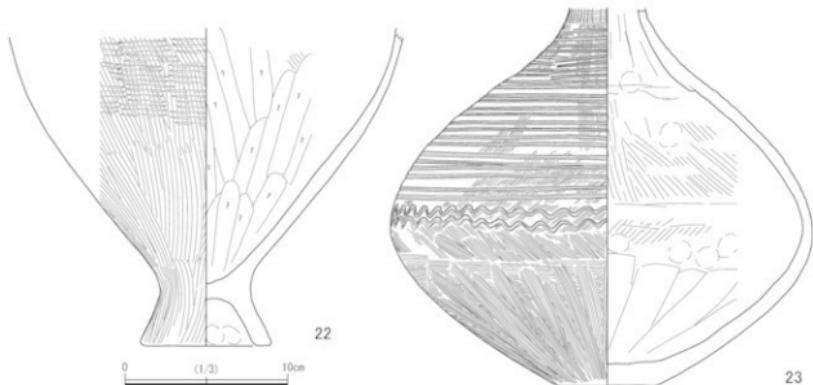
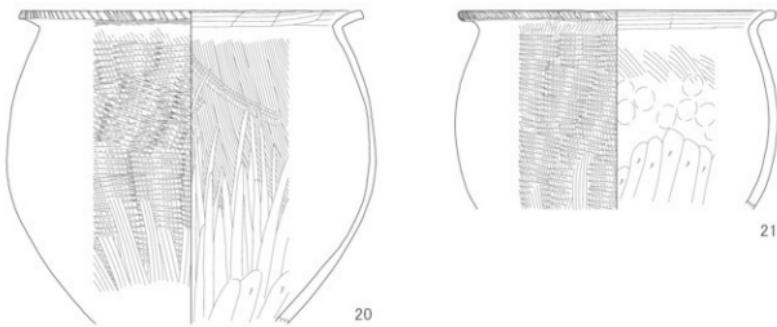
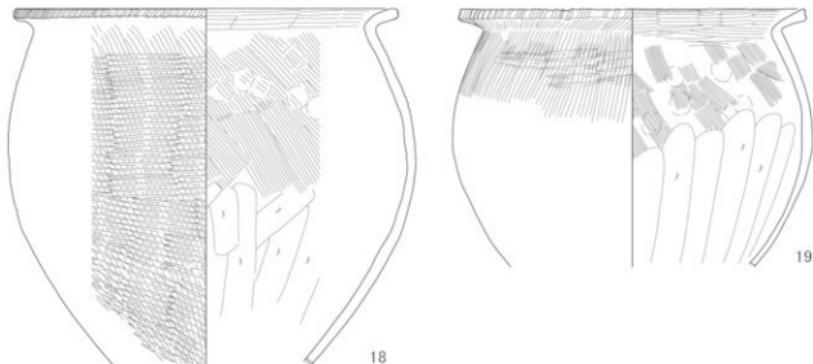
16



17

0 (1/3) 10cm

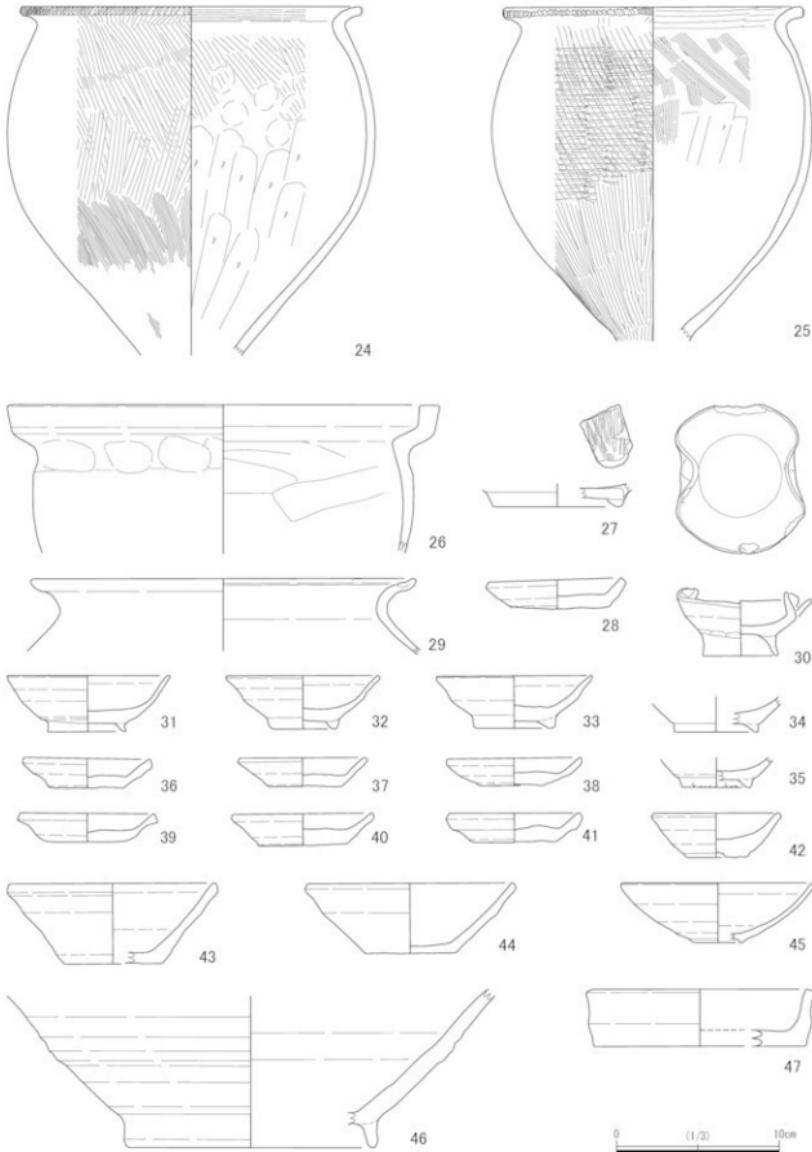
東烟遺跡 1・2 地点出土土器実測図 (1/3) (2)



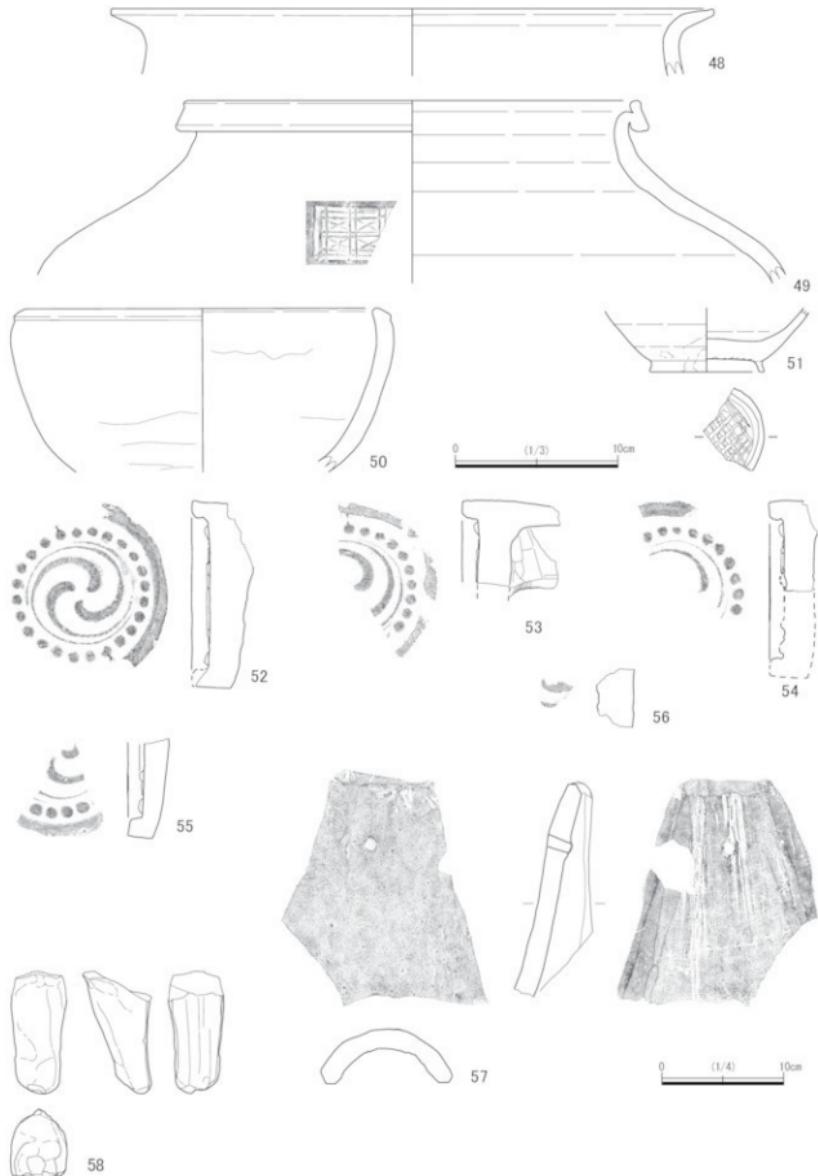
0 (1/3) 10cm

東畠遺跡 1・2 地点出土土器実測図 (1/3) (3)

図版第 4

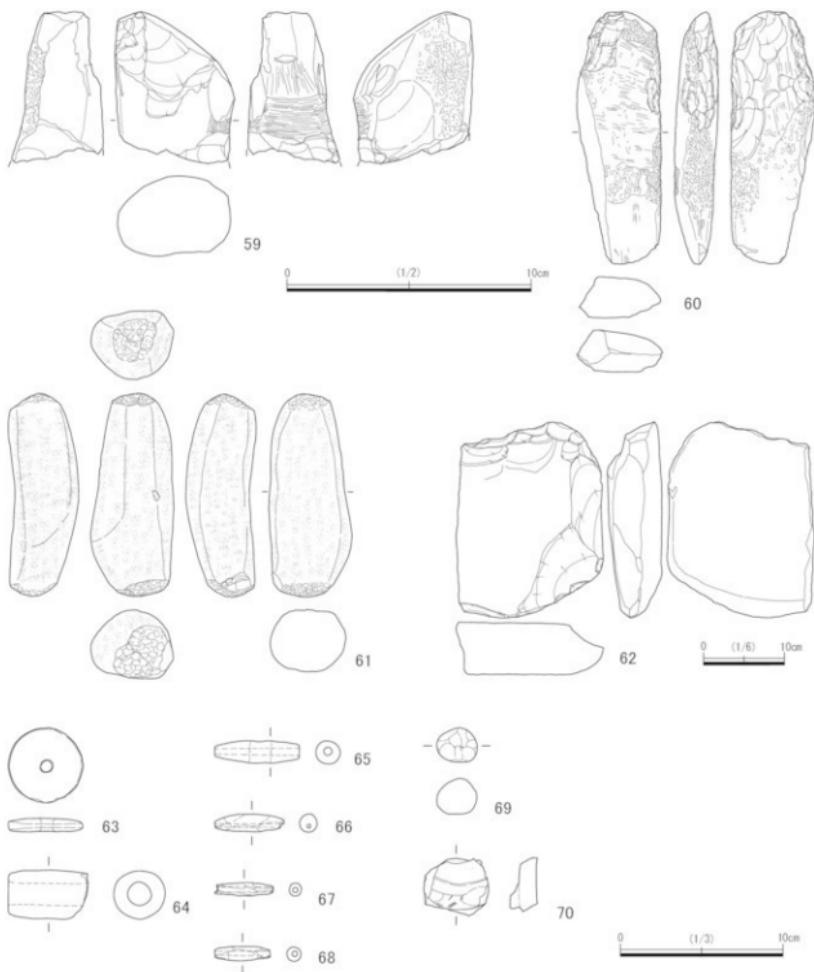


東畠遺跡 1・2 地点出土土器実測図 (1/3) (4)



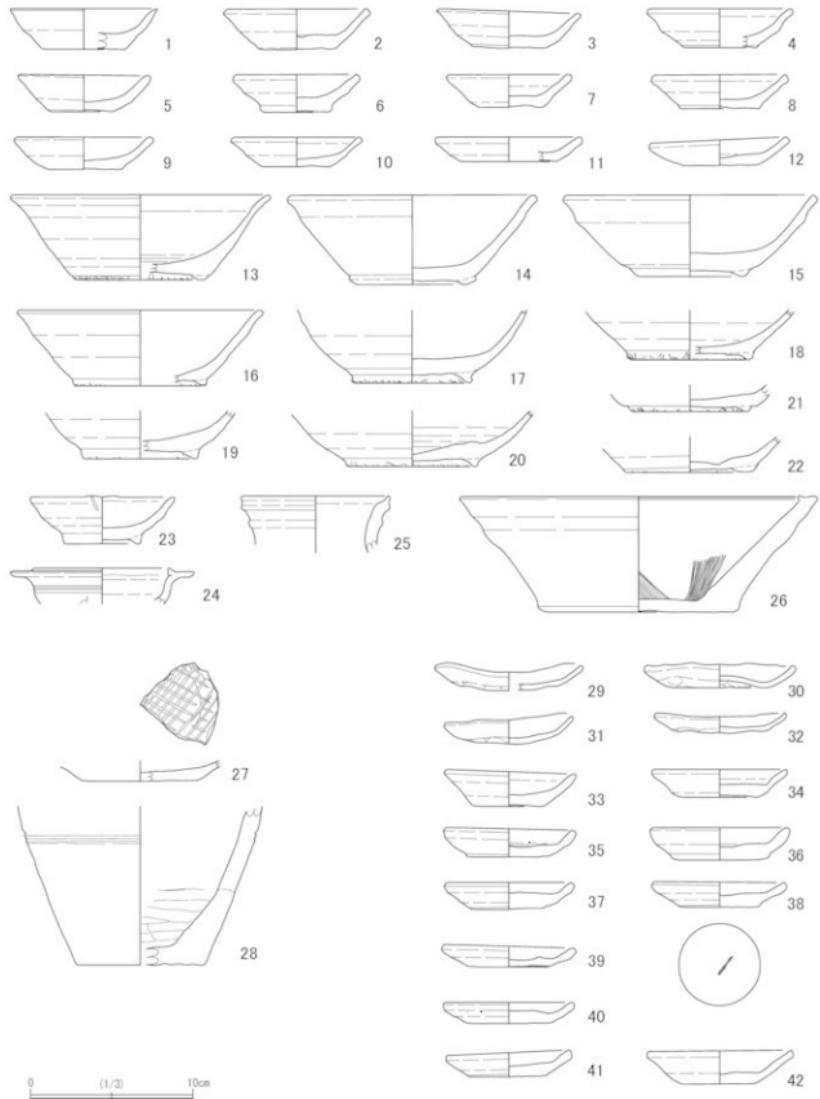
東畠遺跡 1・2 地点出土土器実測図 (1/3) (5)・瓦実測図 (1/4)

図版第 6



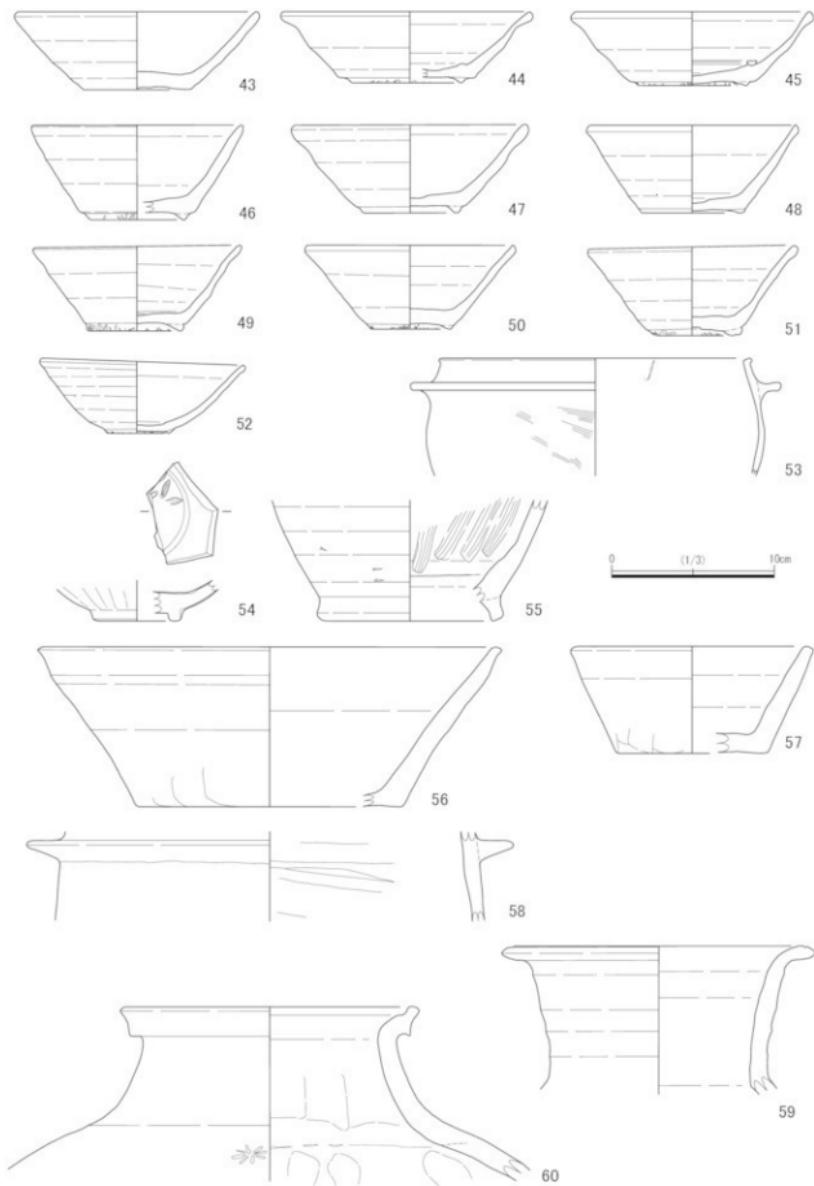
東畑遺跡 1・2 地点出土石器実測図 (1/2, 6 のみ 1/6)・土製品実測図 (1/3)

図版第7

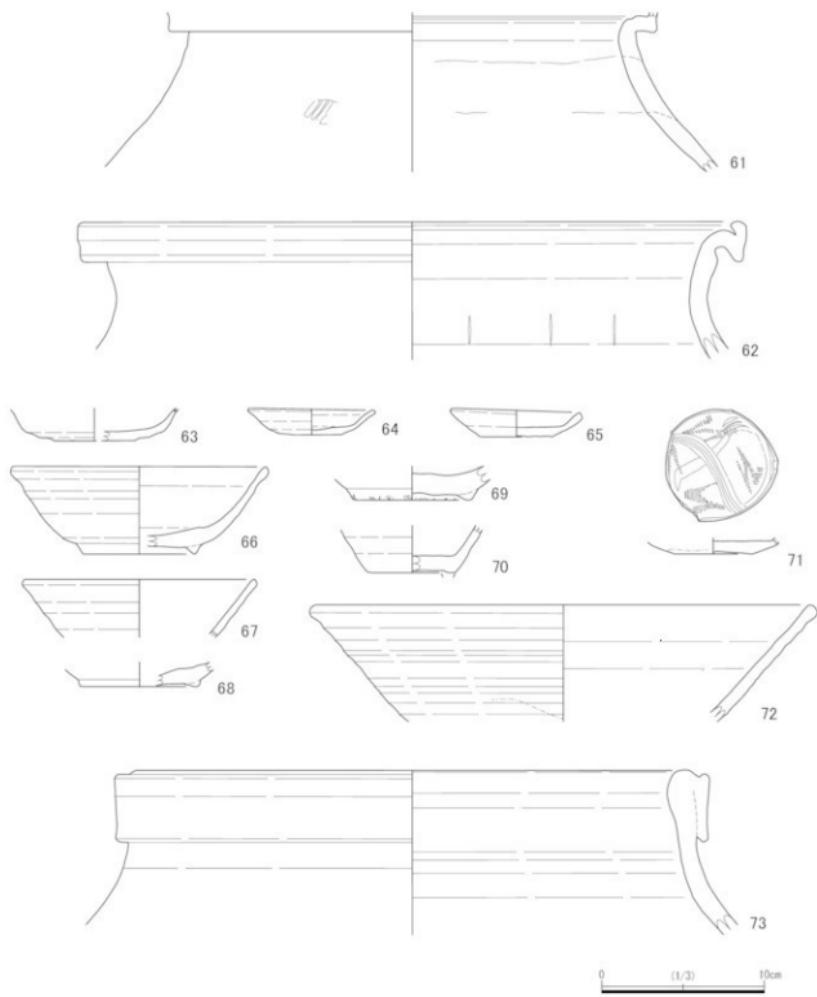


細間遺跡3・4地点出土土器実測図(1/3)(1)

図版第 8

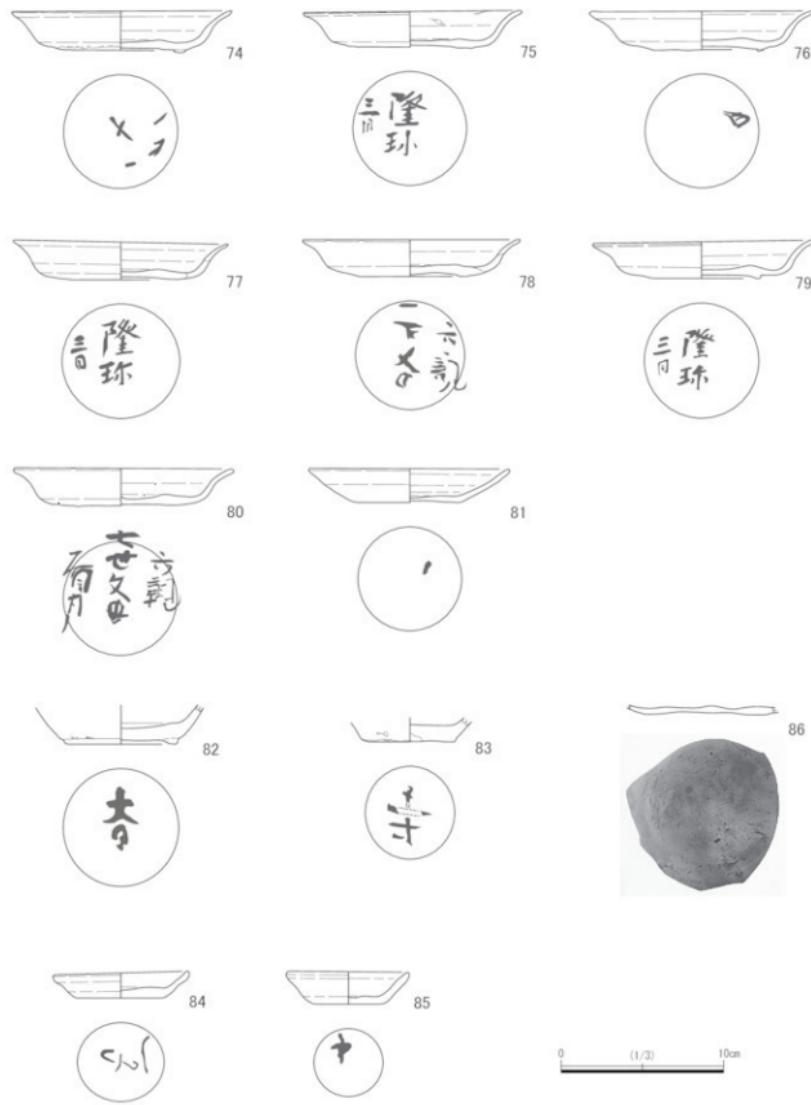


烟間遺跡 3・4 地点出土土器実測図 (1/3) (2)



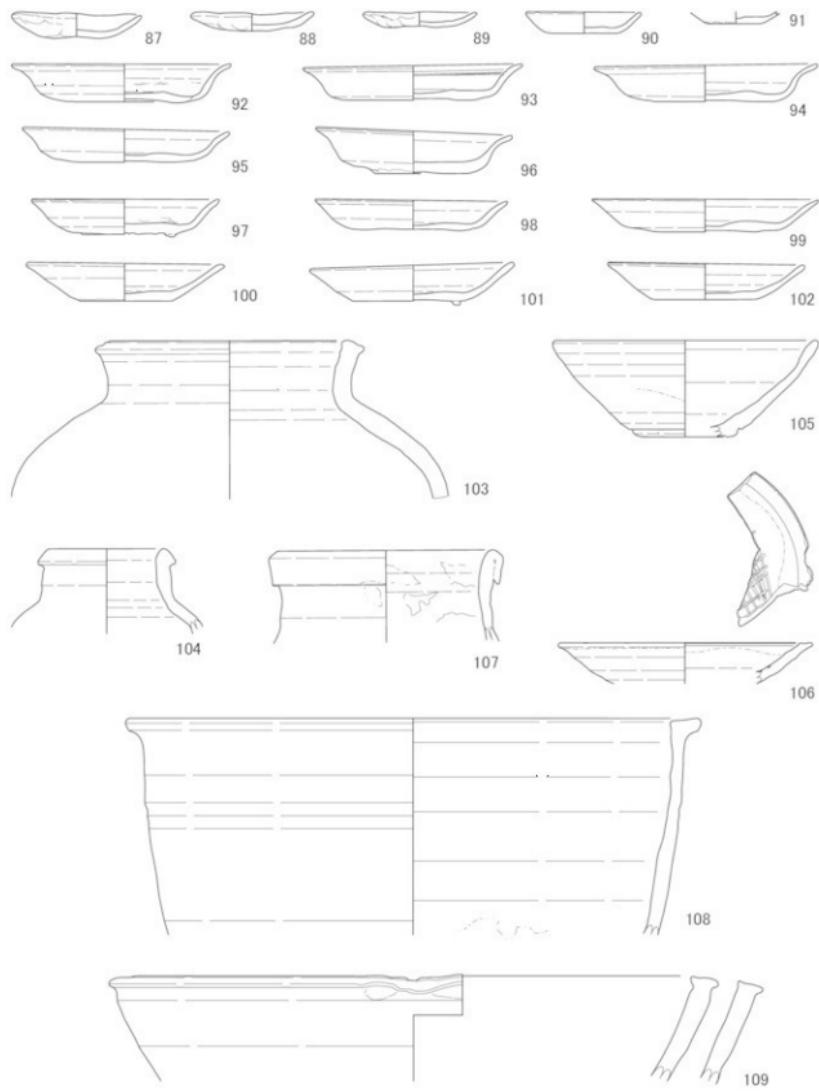
畠間遺跡3・4地点出土土器実測図(1/3)(3)

図版第 10



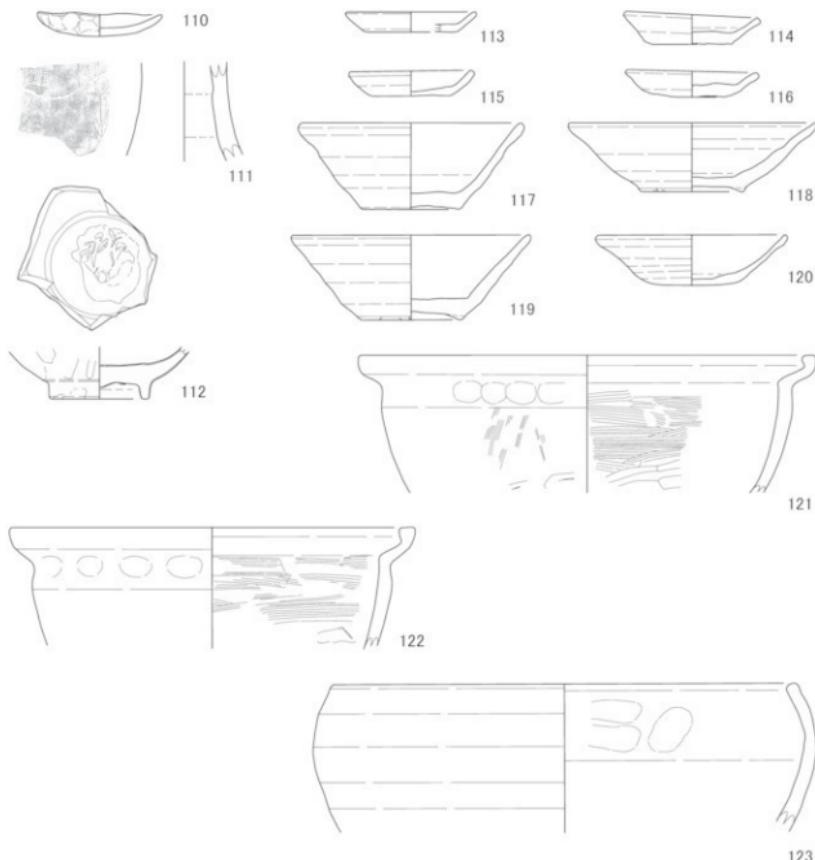
烟問遺跡 3・4 地点出土土器実測図 (1/3) (4)

図版第 11



畠間遺跡 3・4 地点出土土器実測図 (1/3) (5)

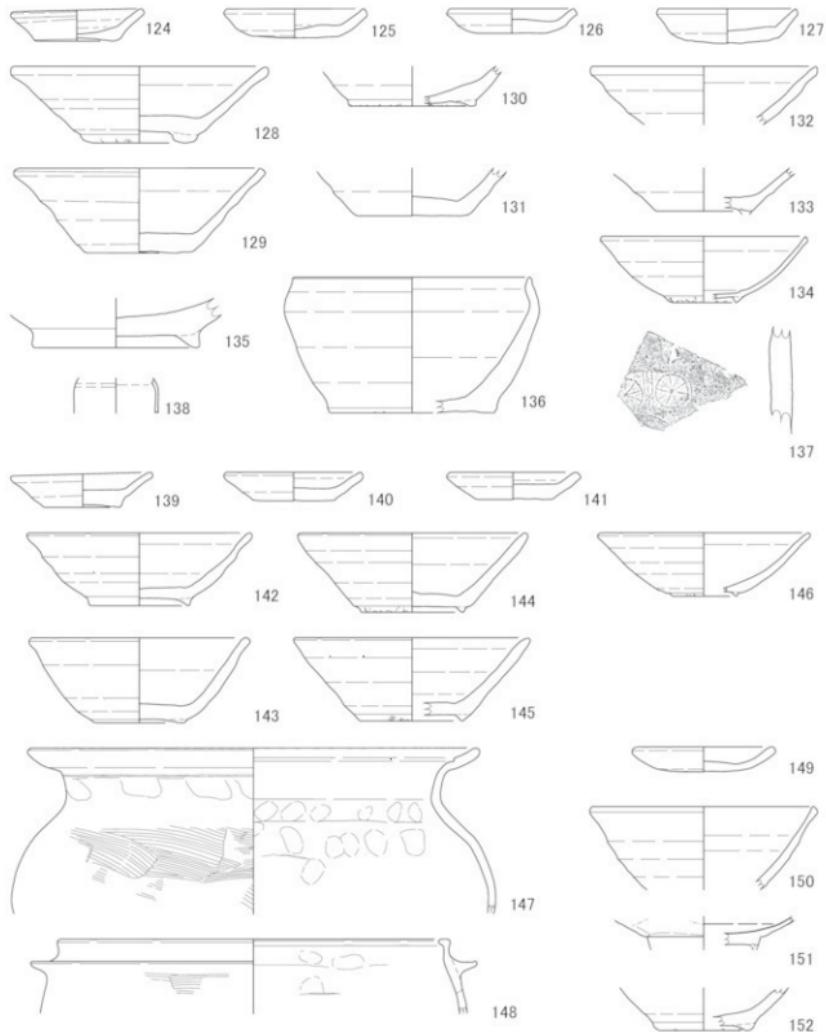
図版第 12



0 (1/3) 10cm

畠間遺跡 3・4 地点出土土器実測図 (1/3) (6)

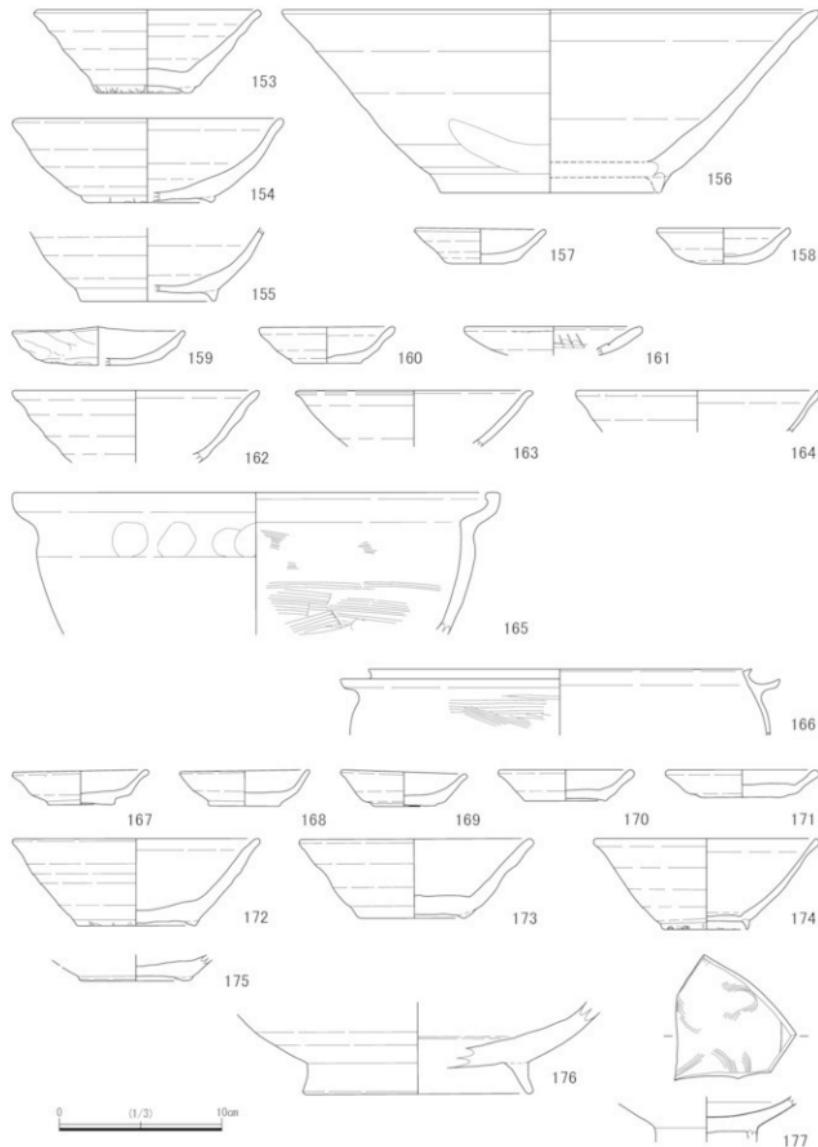
図版第13



0 (1/3) 10cm

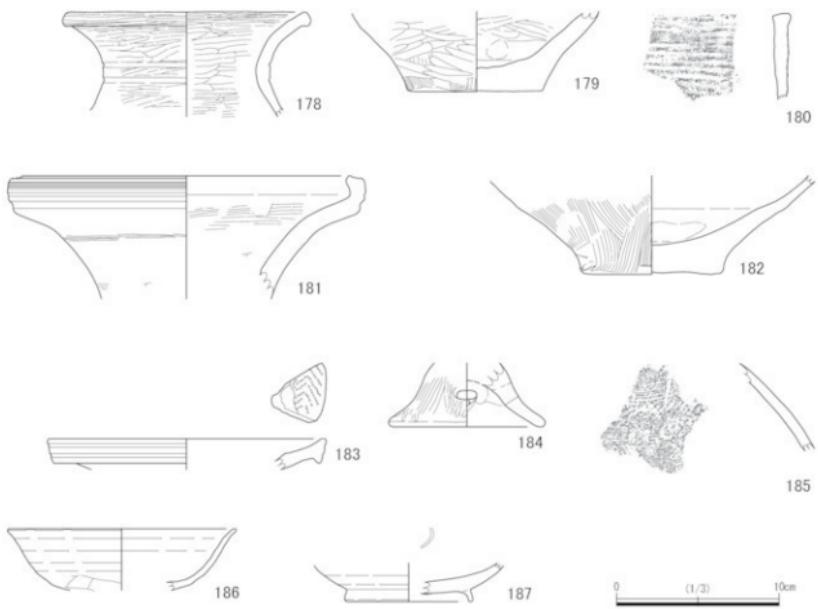
畠間遺跡3・4地点出土土器実測図(1/3)(7)

図版第 14



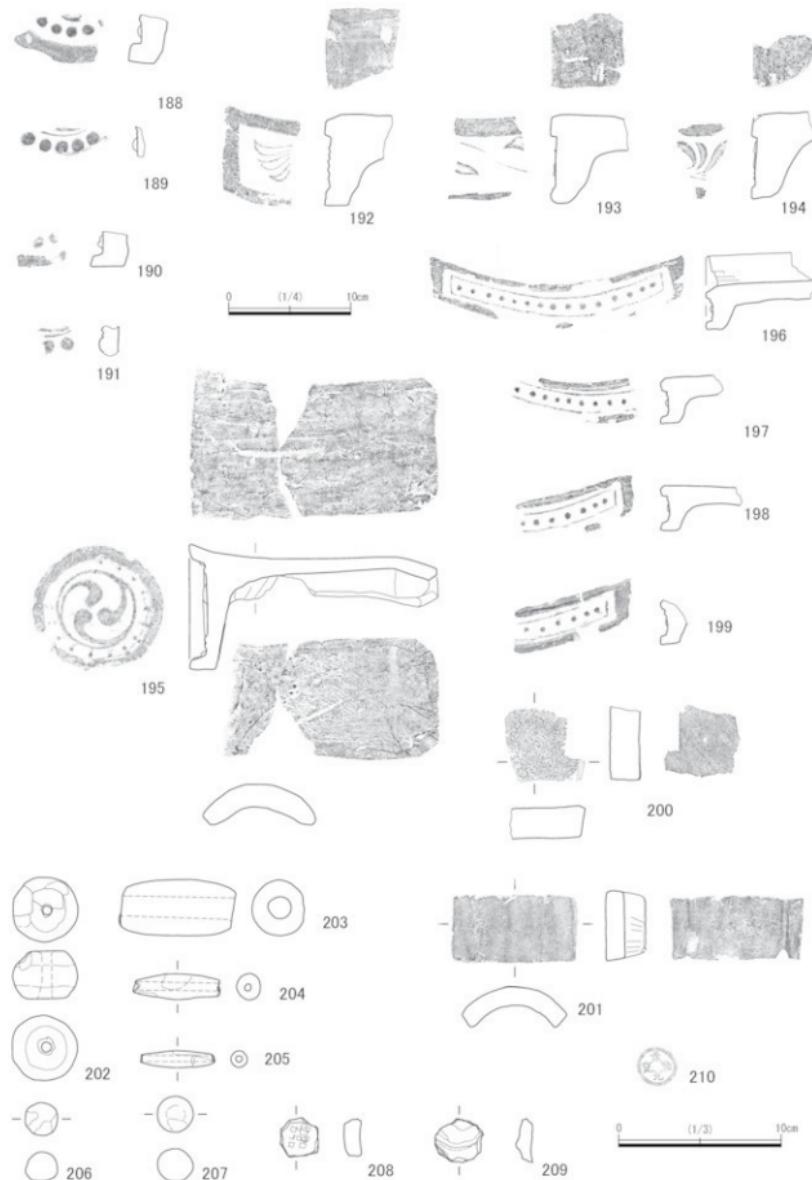
烟問遺跡 3・4 地点出土土器実測図 (1/3) (8)

図版第 15



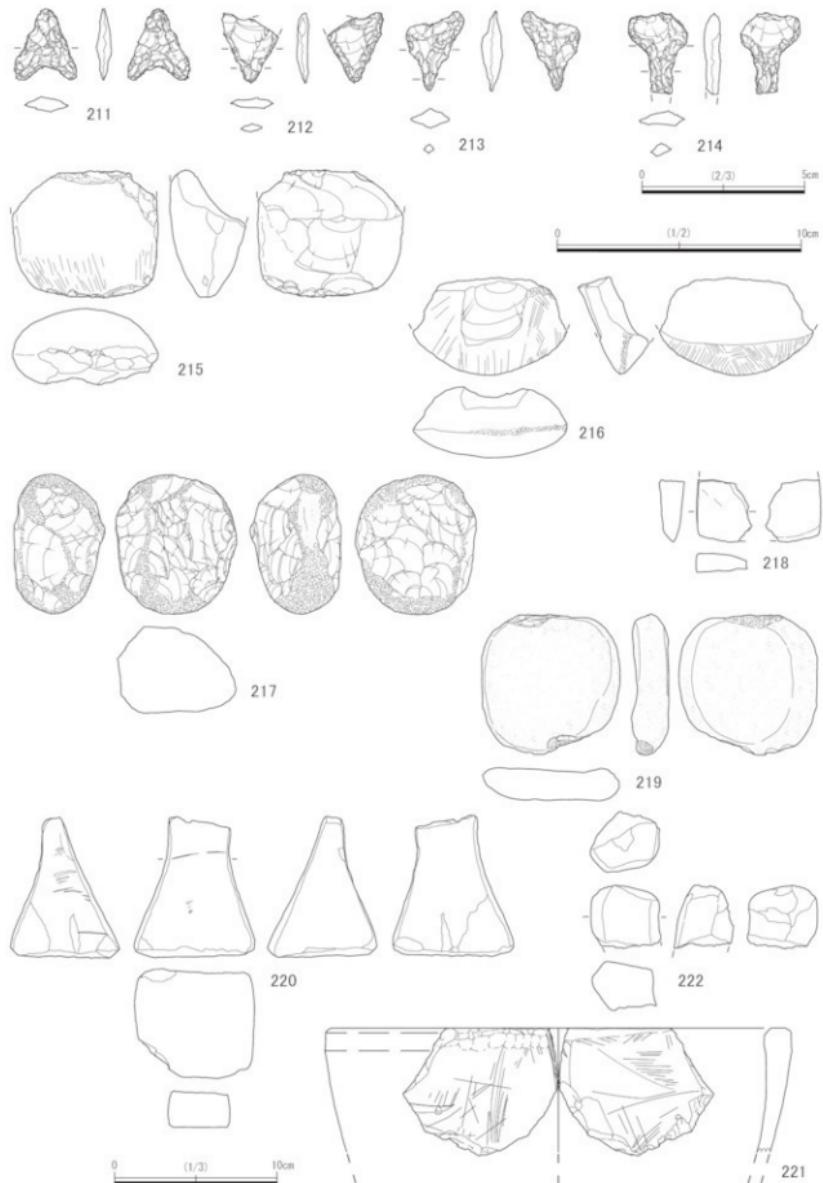
烟間遺跡 3・4 地点出土土器実測図 (1/3) (9)

図版第 16



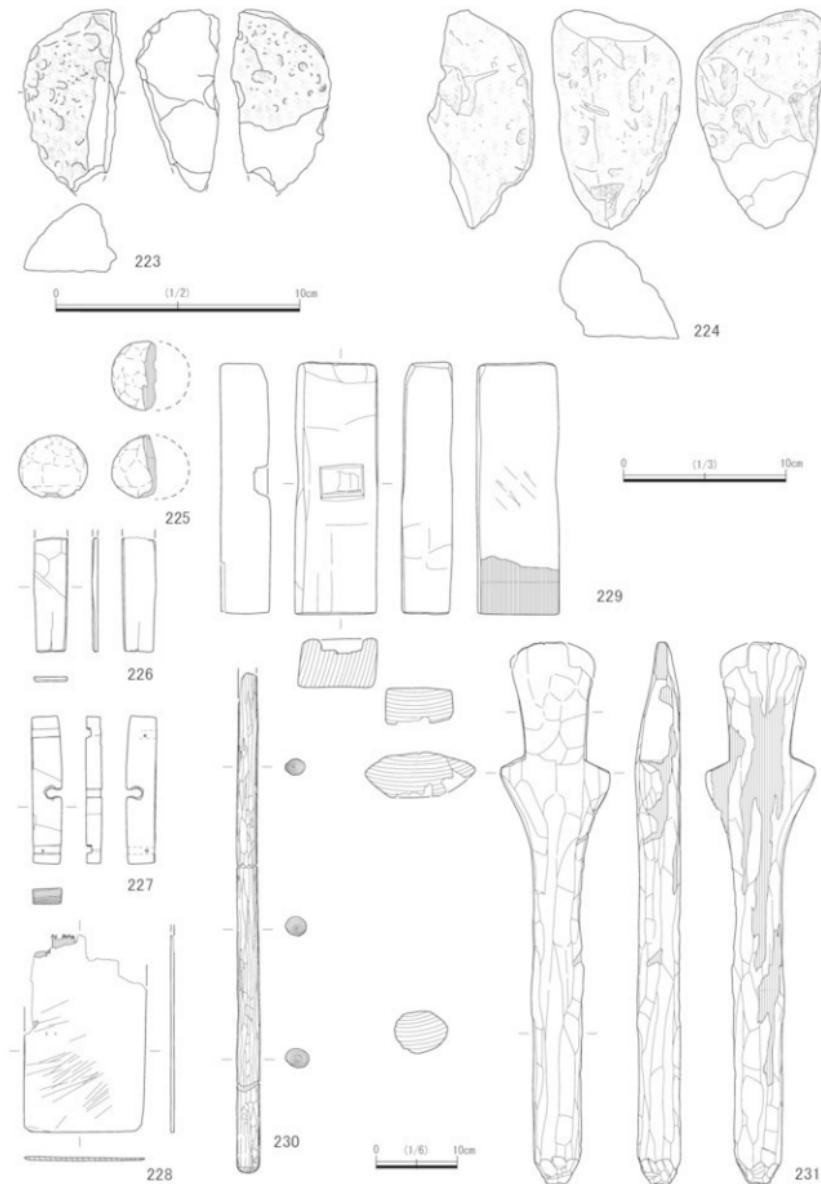
烟間遺跡 3・4 地点出土瓦実測図 (1/4)・土製品・錢貨実測図 (1/3)

図版第 17

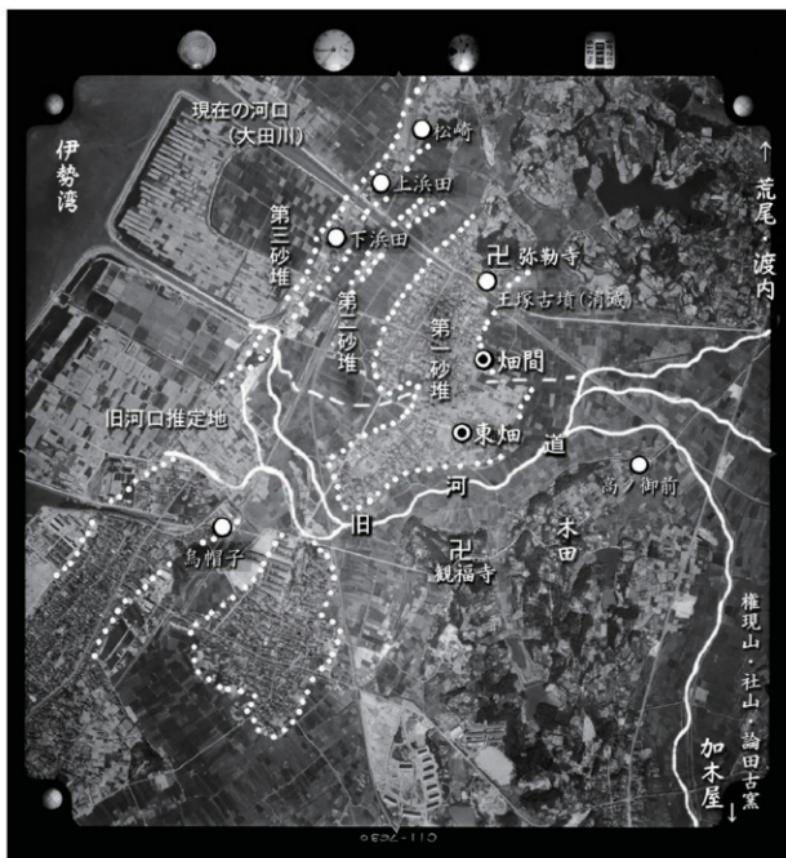


畠間遺跡 3・4 地点出土石器・石製品実測図 (211～214 は 2/3, 215～220・222 は 1/2, 221 は 1/3) (1)

図版第 18



畠間遺跡 3・4 地点出土石器実測図 (1/2) (2)・木製品実測図 (1/3, 230 と 231 は 1/6)



煙間・東畑遺跡周辺空中写真（上空から）

上が北方位。旧河川と遺跡・寺院・集落の位置を加筆した。

図版第 20



東畠遺跡 1 地点調査区全景（北より）（上部中央は近代井戸の搅乱）



東畠遺跡 2 地点調査区全景（北より）



東畠遺跡 007SZ 完掘状況（1）（南東より）



東畠遺跡 007SZ 完掘状況（2）（北東より）（墳丘の高まりの残存を観察することができる）

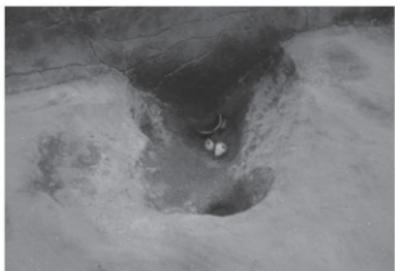
図版第 22



東畑遺跡 023SZ 完掘状況（北西より）（周溝の切れた部分【コーナー】が観察される）



東畑遺跡 023SZ 断面（南西より）



東畠遺跡 017SD・021SP 完掘状況（西より）



東畠遺跡 017SD 土器出土状況（1）（西より）



東畠遺跡 017SD 土器出土状況（2）（北より）



東畠遺跡 008SD 断面（西より）



東畠遺跡 015SD 断面（東より）



東畠遺跡 008SD 土器（4）出土状況（北より）



東畠遺跡 015SD 土器（3）出土状況（東より）



東畠遺跡 015SD 土器（1・2）出土状況（北より）

図版第 24



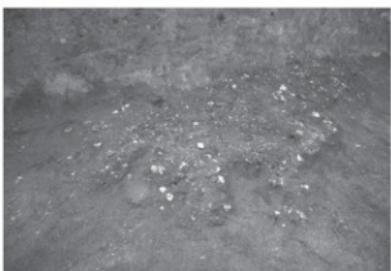
東畠遺跡 1 地点西壁土層断面 (1) (北東より)



東畠遺跡 1 地点西壁土層断面 (2) (北東より)



東畠遺跡 2 地点西壁土層断面 (北東より)



東畠遺跡 002SM 検出状況 (北より)



東畠遺跡 001SU 検出状況 (1) (北東より)



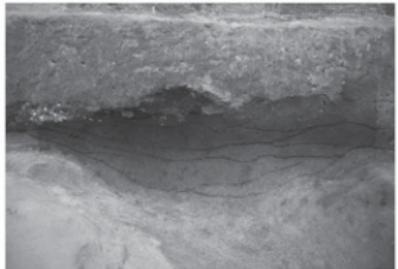
東畠遺跡 001SU 検出状況 (2) (東より)



東畠遺跡 004SD 土器出土状況 (1) (南東より)



東畠遺跡 004SD 土器出土状況 (2) (北西より)



東畠遺跡 004SD 断面 (北より)



東畠遺跡 004SD 土器出土状況 (3) (北西より)



東畠遺跡 012SU 検出状況 (北西より)



東畠遺跡 006SD 断面 (東より)



烟間遺跡 3 地点西半完掘 (1) ( 北東より )



烟間遺跡 3 地点西半完掘 (2) ( 南より )



畠間遺跡 4 地点調査区全景（東より）



畠間遺跡 4 地点西半完掘（西より）



烟間遺跡 3 地点西壁断面 (1) ( 東より )



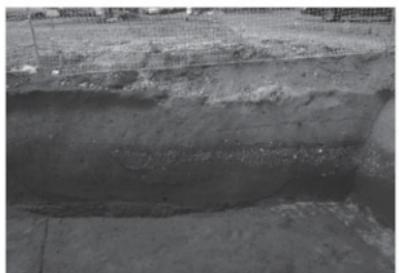
烟間遺跡 3 地点西壁断面 (2) ( 東より )



烟間遺跡 3 地点西壁断面 (3) ( 東より )



烟間遺跡 3 地点西壁断面 (4) ( 東より )



烟間遺跡 3 地点西壁断面 (5) ( 東より )



細間遺跡 3 地点 013SM 検出状況（西より）（貝殻が敷き詰められ固まっている）



細間遺跡 3 地点 013SM 完掘状況（南より）

図版第 30



烟間遺跡 4 地点 013SM 検出状況（西より）（貝殻を伴う硬化面が帯状に展開している）



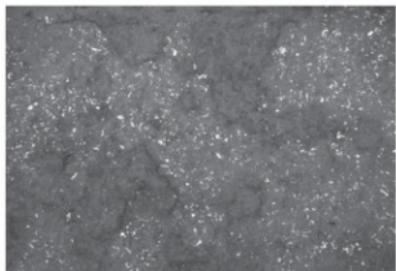
烟間遺跡 4 地点 013SM 完掘状況（東より）



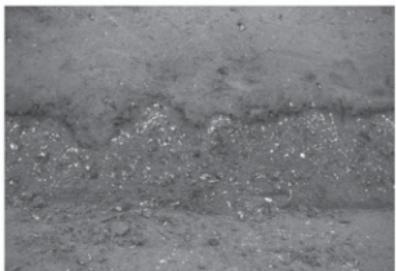
烟間遺跡 3 地点 013SM 断面（南東より）



烟間遺跡 4 地点 013SM 断面および上面（東より）



烟間遺跡 4 地点 013SM 上面（拡大）



烟間遺跡 4 地点 013SM 断面（拡大）



烟間遺跡 037SD 検出状況(1)（南より）



烟間遺跡 037SD 断面（南西より）



烟間遺跡 037SD 完掘状況（南東より）



烟間遺跡 019SU-10 検出状況（北より）

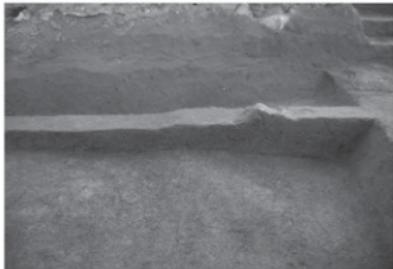
図版第 32



烟間遺跡 011SB 完組状況（北より）



烟間遺跡 011SB 断面東半（北より）



烟間遺跡 011SB 断面西半（北より）



畠間遺跡 038SE 完掘状況（北西より）（段掘りされた井戸の構造がわかる）



畠間遺跡 038SE 断面（北より）（基盤層由来のシルトブロックが観察される）

図版第 34



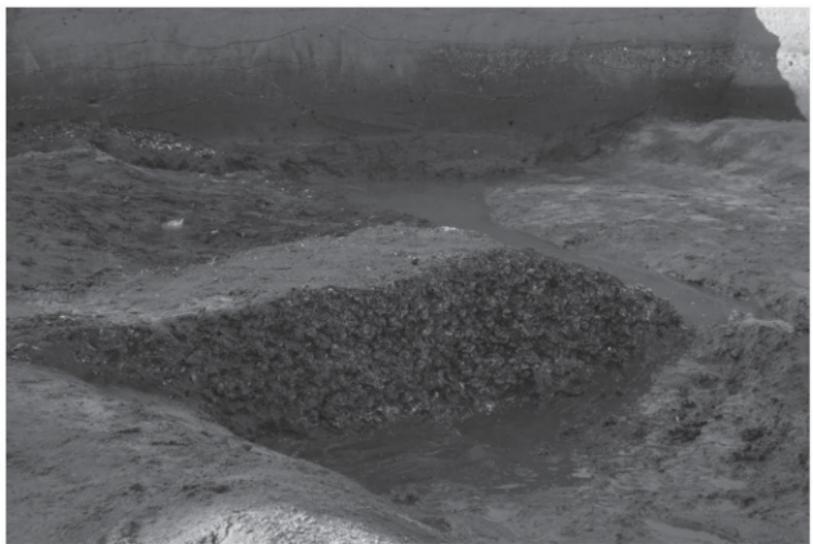
烟間遺跡 026SM 検出状況 (1) (南より) (貝層が溝に沿って帯状に広がっている)



烟間遺跡 026SM 検出状況 (2) (西より)

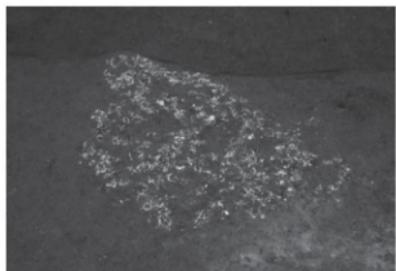


畠間遺跡 026SM 完掘状況（南東より）

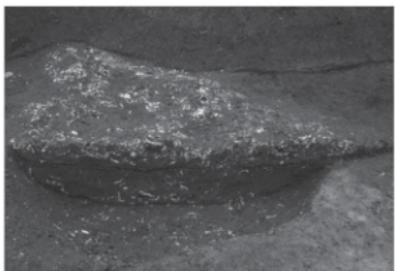


畠間遺跡 026SM 断面（南東より）（ほぼ純貝層であることがわかる）

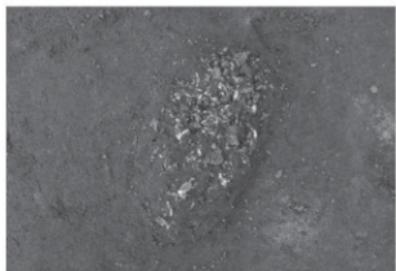
図版第 36



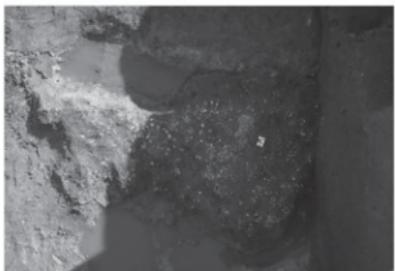
烟間遺跡 021SM 検出状況（北より）



烟間遺跡 021SM 断面（北より）



烟間遺跡 025SM 検出状況（東より）



烟間遺跡 027SM 検出状況（西より）



烟間遺跡 044SU 土師器皿出土状況(3)（東より）



烟間遺跡 044SU 土師器皿出土状況(4)（東より）



烟間遺跡 044SU 土師器皿出土状況(5)（東より）



烟間遺跡 044SU 土師器皿出土状況(6)（東より）



烟間遺跡 045SU 検出状況（東より）



烟間遺跡 041SD 断面（南より）



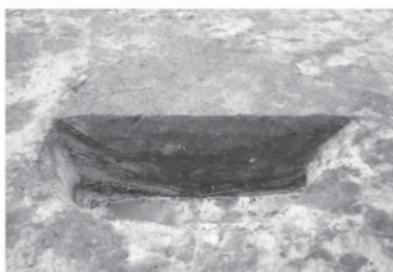
烟間遺跡 058SK 木製品出土状況（南より）



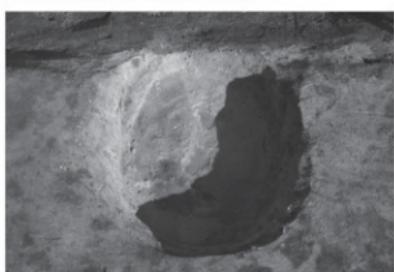
烟間遺跡 047SK 断面（南西より）



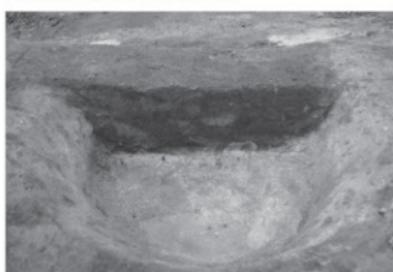
烟間遺跡 048SK 完掘状況（南より）



烟間遺跡 048SK 断面（南より）



烟間遺跡 049SK 完掘状況（南より）



烟間遺跡 049SK 断面（南より）

図版第 38



東畠遺跡 1 地点包含層掘削作業



東畠遺跡 2 地点 013SU 遺物検出作業



番間遺跡 3 地点包含層掘削・測量作業



番間遺跡 3 地点 013SM 貝層サンプリング作業



番間遺跡 3 地点 026SM 掘削作業



番間遺跡 4 地点 044SU 遺物検出作業



番間遺跡 4 地点遺構掘削作業 (1)



番間遺跡 4 地点遺構掘削作業 (2)



3

東畠遺跡 015SD 出土土師器



5

東畠遺跡 017SD 出土土師器



12

東畠遺跡 004SD 出土弥生土器 (1)



13

東畠遺跡 004SD 出土弥生土器 (2)



16

東畠遺跡 004SD 出土弥生土器 (3)



23

東畠遺跡 013SU 出土弥生土器 (1)

図版第 40



18

東畠遺跡 004SD 出土弥生土器 (4)



19

東畠遺跡 004SD 出土弥生土器 (5)



20

東畠遺跡 004SD 出土弥生土器 (6)



21

東畠遺跡 004SD 出土弥生土器 (7)



24

東畠遺跡 013SU 出土弥生土器 (2)

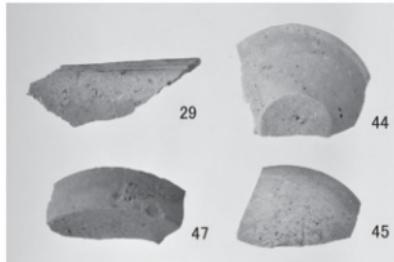


25

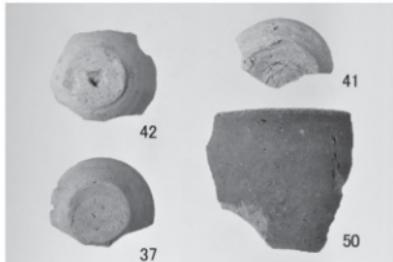
東畠遺跡 013SU 出土土器 (3)



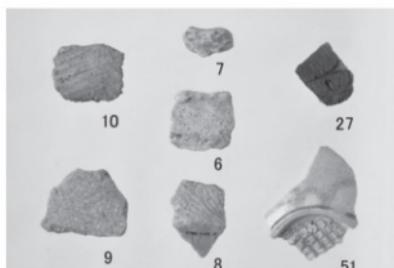
東畠遺跡出土山茶碗耳皿・小碗・小皿



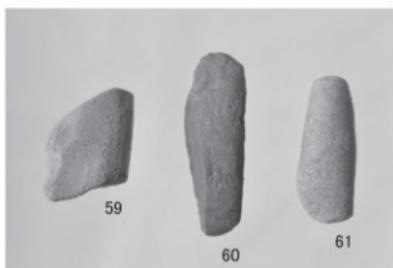
東畠遺跡出土土師器鑷・山茶碗・常滑



東畠遺跡出土山茶碗・常滑



東畠遺跡出土弥生土器・瓦器椀・瀬戸美濃平碗

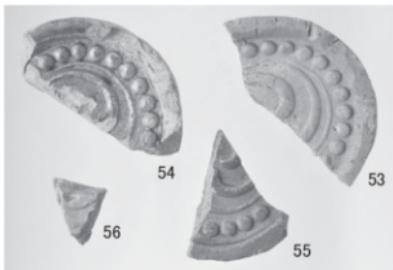


東畠遺跡出土石器



52

東烟遺跡出土瓦 (1)

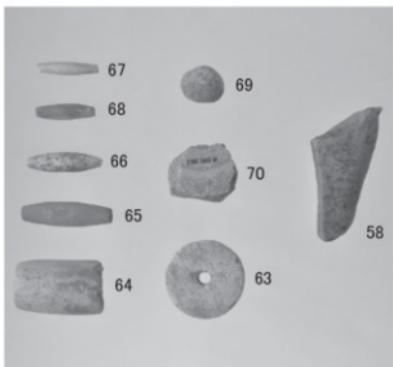


東烟遺跡出土瓦 (2)



57

東烟遺跡出土瓦 (3)



東烟遺跡出土土製品



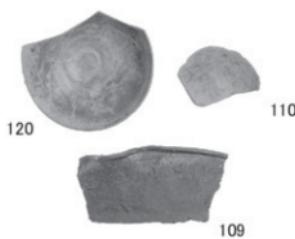
烟問遺跡 038SE 出土山茶碗



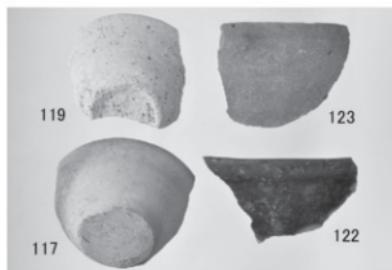
烟問遺跡 024SD 出土山茶碗



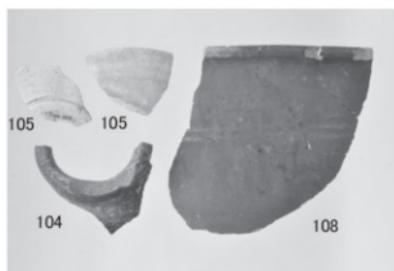
烟間遺跡 034SD(044SU) 出土土師器皿



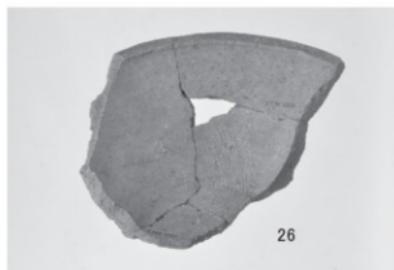
烟間遺跡 034SD 出土山茶碗・常滑



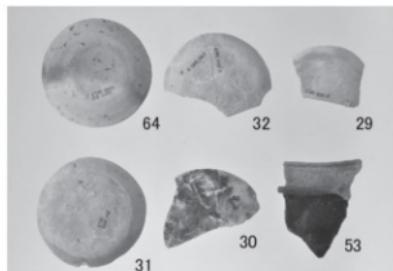
烟間遺跡 036SD 出土土師器鍋・山茶碗・常滑



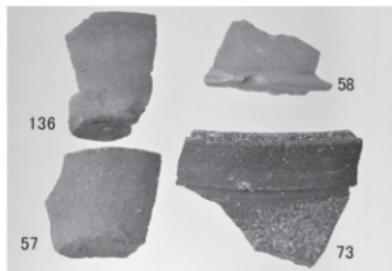
烟間遺跡 034SD(045SU) 出土瀬戸美濃・常滑



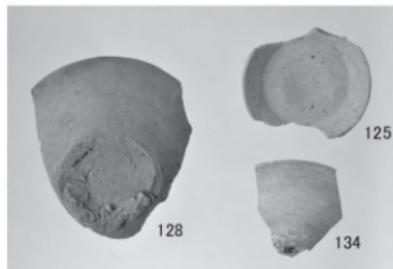
烟間遺跡 038SE 出土常滑擂鉢



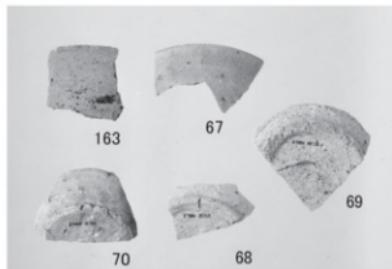
烟間遺跡 024SD・057SD 出土土師器皿・鍋



烟間遺跡 024SD・057SD・022NR 出土常滑



烟間遺跡 022NR 出土山茶碗



烟間遺跡 052SK・057SD 出土山茶碗



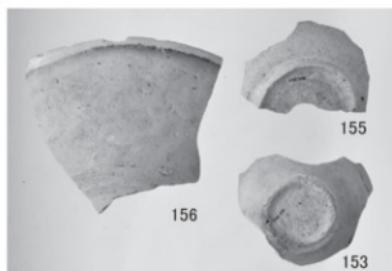
烟間遺跡 013SM 出土山茶碗・常滑



烟間遺跡 026SM 出土土師器皿

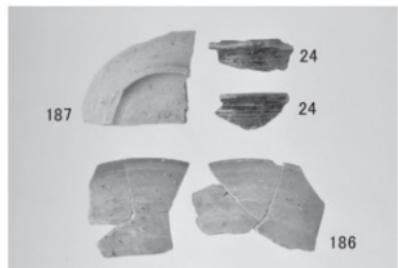


烟間遺跡 026SM・027SM 出土土師器皿・鍋・山茶碗

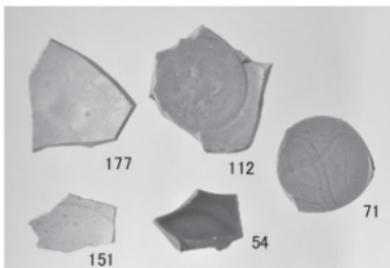


烟間遺跡 029SK 出土山茶碗

図版第 46



烟間遺跡出土須恵器・綠釉陶器・灰釉陶器



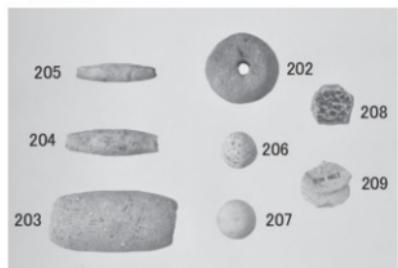
烟間遺跡出土白磁・青磁



烟間遺跡出土瀬戸美濃



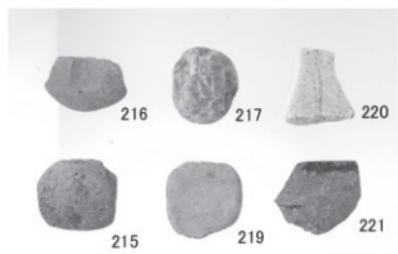
烟間遺跡包含層出土土師器・瓦質土器・山茶碗



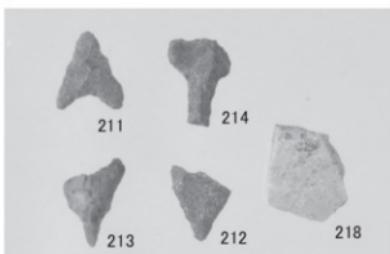
烟間遺跡出土土製品



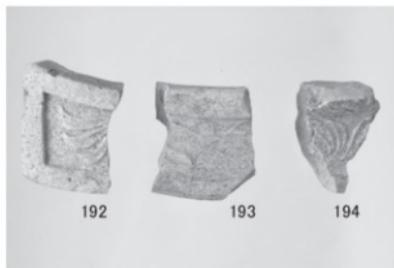
烟間遺跡出土焼土塊



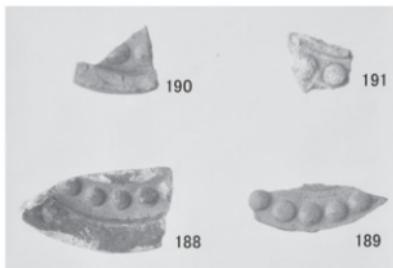
烟間遺跡出土石器・石製品(1)



烟間遺跡出土石器・石製品(2)



烟間遺跡出土瓦 (1)



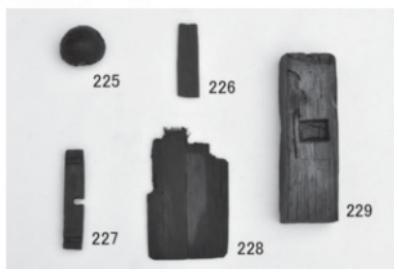
烟間遺跡出土瓦 (2)



烟間遺跡出土瓦 (3)



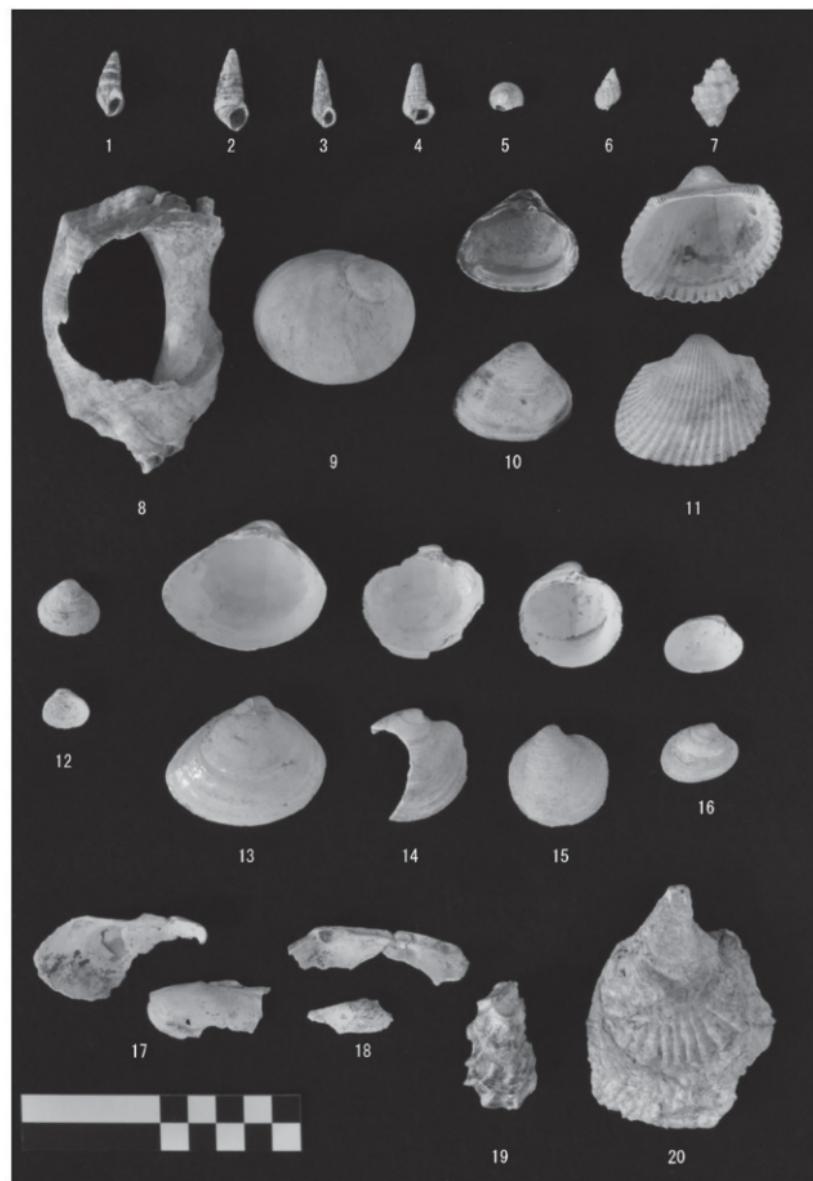
烟間遺跡出土瓦 (4)



烟間遺跡出土木製品 (1)



烟間遺跡出土木製品 (2)



烟間遺跡出土動物遺体(1)(貝類)(スケールは全長 10cm)



細間遺跡出土動物遺体 (2) (脊椎動物骨) (スケールは全長 10cm)



烟間遺跡出土動物遺体(3)(脊椎動物骨)(スケールは全長 10cm)

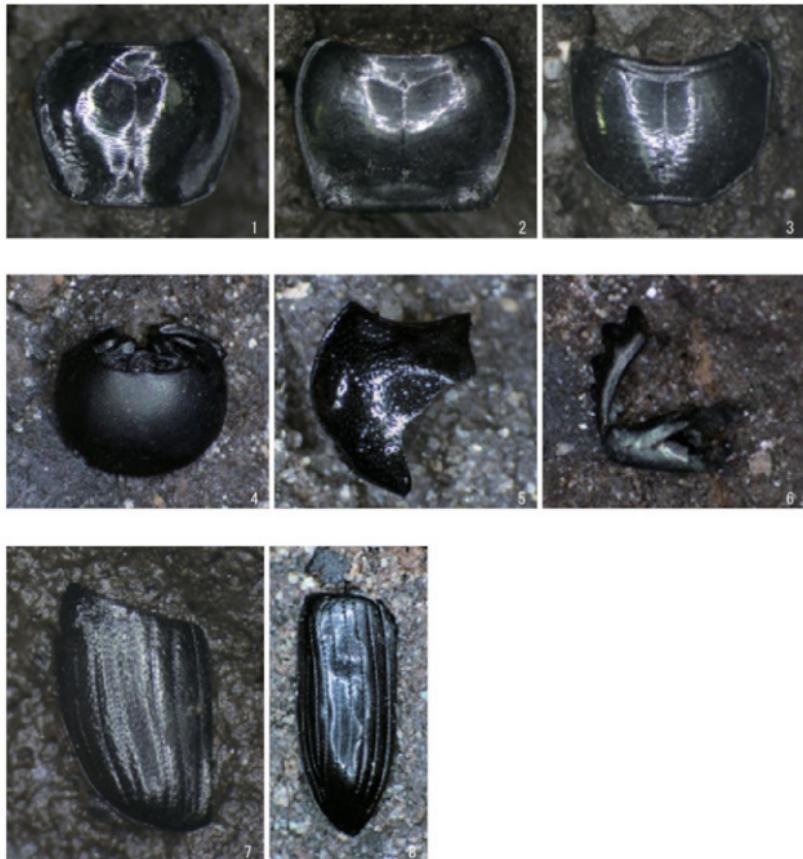


写真 1～8 煙間遺跡出土昆虫化石写真(1)

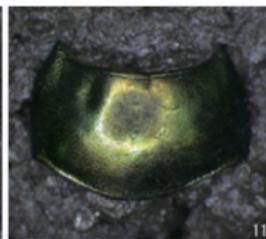
1. ヒラタゴミムシ族 Platynini 前胸背板 3.6mm
2. ヒラタゴミムシ族 Platynini 前胸背板 2.6mm
3. ナガヒヨウタンゴミムシ Scarites terricola pacificus Bates 前胸背板 4.9mm
4. エンマコガネ属 Onthophagus sp. 前胸背板 3.2mm
5. エンマコガネ属 Onthophagus sp. 前胸背板片 3.1mm
6. マグソコガネ属 Aphodius sp. 左前脚 3.8mm
7. コブマルエンマコガネ Onthophagus atripennis Waterhouse 左上翅 3.2mm
8. マグソコガネ Aphodius rectus (Motschulsky) 左前翅 3.1mm



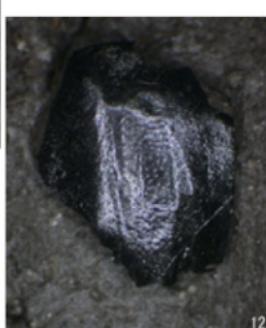
9



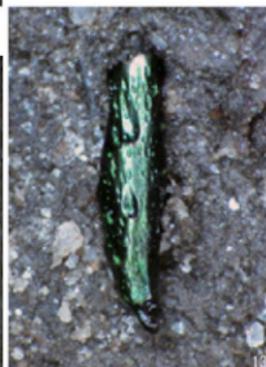
10



11



12



13

写真 9～13 煙間遺跡出土昆虫化石写真 (2)

9. コアオハナムグリ *Oxyctonia jucunda* (Faldermann) 右前翅片 6.2mm
10. ヒメコガネ *Anomala rufocuprea* Motschulsky 中胸腹板 4.1mm
11. ヒメコガネ *Anomala rufocuprea* Motschulsky 前胸背板 5.1mm
12. ノコギリカミキリ *Prionus insularis* Motschulsky 左上翅 8.1mm
13. ヒメコガネ *Anomala rufocuprea* Motschulsky 脊節 2.8mm

## 報告書抄録

ふりがな	はたま・ひがしはたいせきははくつちょうさほうこく						
書名	烟間・東畠遺跡発掘調査報告						
副書名							
卷次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	宮澤浩司・桐山秀穂・坂野俊哉・鬼頭剛・堀木真美子・西野順二・奥野絵美・森勇一						
編集機関	国際航業株式会社						
所在地	〒452-0901 愛知県清須市阿原神門95-1 Tel 052-408-0245						
発行機関	愛知県東海市教育委員会						
所在地	〒476-8601 愛知県東海市中央町1丁目1番地 Tel 052-603-2211						
発行年月日	2009年8月7日						
フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東經	調査期間	調査面積	調査原因
ハタマ・ヒガシ 烟間遺跡・ ヒダラ・タカイ 東畠遺跡	アイチケン トウカイシ 愛知県東海市	23222	43050	35°1'6''N 136°53'47''E	2008.11.10～2009.02.19	820m <sup>2</sup>	土地区画 整理
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
煙間遺跡	集落跡	中世	区画溝など溝 井戸・土坑 貝塚・住居址	土師器皿・鍋, 山茶碗 瀬戸美濃, 常滑, 白磁 青磁, 瓦, 弥生土器	緑釉陶器火舎香炉 「隆珍」「寺」ほか 墨書き土器		
東畠遺跡	集落跡	弥生時代・中世	方形周溝墓 溝・土坑	弥生土器, 山茶碗 常滑, 石器	弥生時代の方形周溝 墓		

愛知県東海市  
畠間・東畠遺跡発掘調査報告

平成21年8月5日 印刷

平成21年8月7日 発行

編 集 国際航業株式会社  
〒452-0901 愛知県清須市阿原神門95-1  
TEL 052-408-0245

発 行 愛知県東海市教育委員会  
〒476-8601 愛知県東海市中央町1丁目1番  
TEL 052-603-2211

印刷・製本 三星商事印刷株式会社